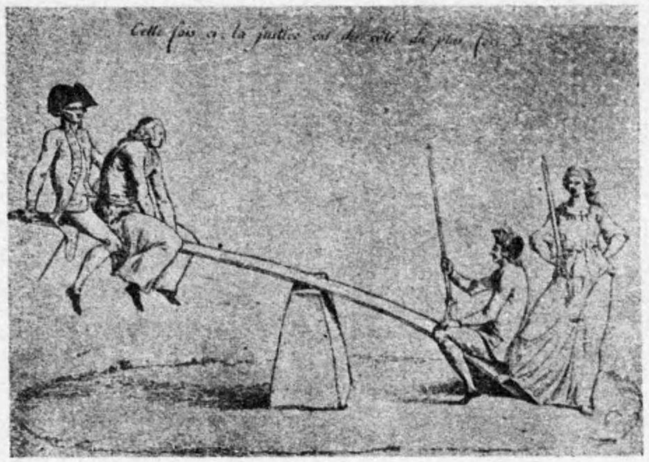
次に來れるものは貴族部の議員なり。衣帽に華美を競ひ、勳章に肩章に、燦爛として春の日も其の光を失はんとす。しかも民衆は一人としてこれに喝采を送るものなし。唯一人オルレヤン公はわざと列を離れて先頭に在り、後れたる第三部の人々と密接して歩めるが、僅かに歡聲を以て迎へられしのみ。此の公はかくして民權家たる風を裝ひ、密かに人望を攬らんと努めつゝありしなり。

貴族部の後を受けて僧侶部は同じく冷淡なる沈默を以て送られぬ。その先頭には紫衣の高僧三十人許り、間に音樂隊を挿みて、牧師

貴族部議員の列



正義強し（戯畫）
——貴族僧侶敗れ平民と正義と勝つ——

は背後に從ふ。一見して貴族部が一團として親和の狀あるに對し、僧侶部に二種の截然たる異分子あることを知り得たり。

僧侶部議員の列

かくて最後に、王及び王后を中心とせる朝廷の人々の華やかなる行列はしづかに歩みぬ。王行くとき人民は萬歳を唱へ、王后來るや、意地わるく沈默しぬ。細民の女の群よりは却つて、諷刺的にオルレヤン家萬歳と叫ぶ聲も聞えぬ。オルレヤン公は王后には當面の仇敵なれば、王后は甚だしき不快を感じ、激動の極危く倒れかからんとして、ランバル公姫[1]に扶けられぬ。

王及び王后

ホーストリヤの豹
（マリー・アントアネツトを誹れる當時の戯畫）

1 Princesse de Lamballe Marie, Thérèse Louise(1749-1792)

寺院に先着せる第三部議員は、中央に座を占めたり。式部長官は議員等に少しく席を譲らん事を求めしに、[1]議員ラルヴリエー・ルボー頑として應ぜざりしが、他の議員等彼を宥めて席を譲らしめぬ。やがてナンシーの大司教ド・ラ・ファル[2]の説教ありしが、此の人もと自由主義者にして、宗教の訓戒いつか政談演説と變じ、貴族の豪奢を非難し、人民の負擔の過重を説くこと委曲に亙りしのみならず、最後に、これらの罪悪みな順良なる王の名に依りて行はると結びしかば、第三部の議員等は場所柄をも忘れて、覺えず喝采したりき。此の一場の光景を観てネッケールたるもの、徒らに其の妻子と共に狂喜し在るべきに非ず、民衆の風氣の趨く所を察しては、豫め警戒する所なかるべからざるに、彼は遂に此の間の事情を覺らざるものゝ如くなりき。

姫公ルヌンラ

翌五日、ヴェルサイユ議會の第一會は開かれぬ。王宮内サル・ド・メニュー[1]（現存せず當時は五千人を容れし大廣間なりき）の正面高き所に王の椅子を安置し、其の周圍を王后及び朝廷の男女の席とす。王に對し正面左に寄りて第三部議員の席を設けたり。此の際昨日の混雑に懲りたる式部官は、此度は窮屈なる紀律に依りて彼等を拘束せんとして、甚だしく第三部議員の感情を害へり。議員等は初め戸の外に在り、位階順に依り一々姓名を呼ばれて中へ入る。此の間久しく、暗く狭き廊下の外に佇立せしめられたる議員等は、恰も囚徒として扱はれたるが如き思ひをなし、囂々として不平を鳴らし、中には名を呼ばるゝも素知らぬ顔して答へざるものあり、かくの如き徒らなる形式の事に三時間を費したり。

その間には例のオルレヤン公の、同じくクレピイ[2]州より選出せられし一牧師に入室の先を譲りて、喝采を博せるなどのこともありき。

議員等漸くにしてみな着席するや、尚待つこと一時間餘、未だ晝餐を

1 Larevellière-Lepaux
2 De la Farre, Archevêque de Nancy

三部會の初會議復び第三部員を怒らしむ

1 Salle de Ménu
2 Crépy

議員等空腹に苦しむ

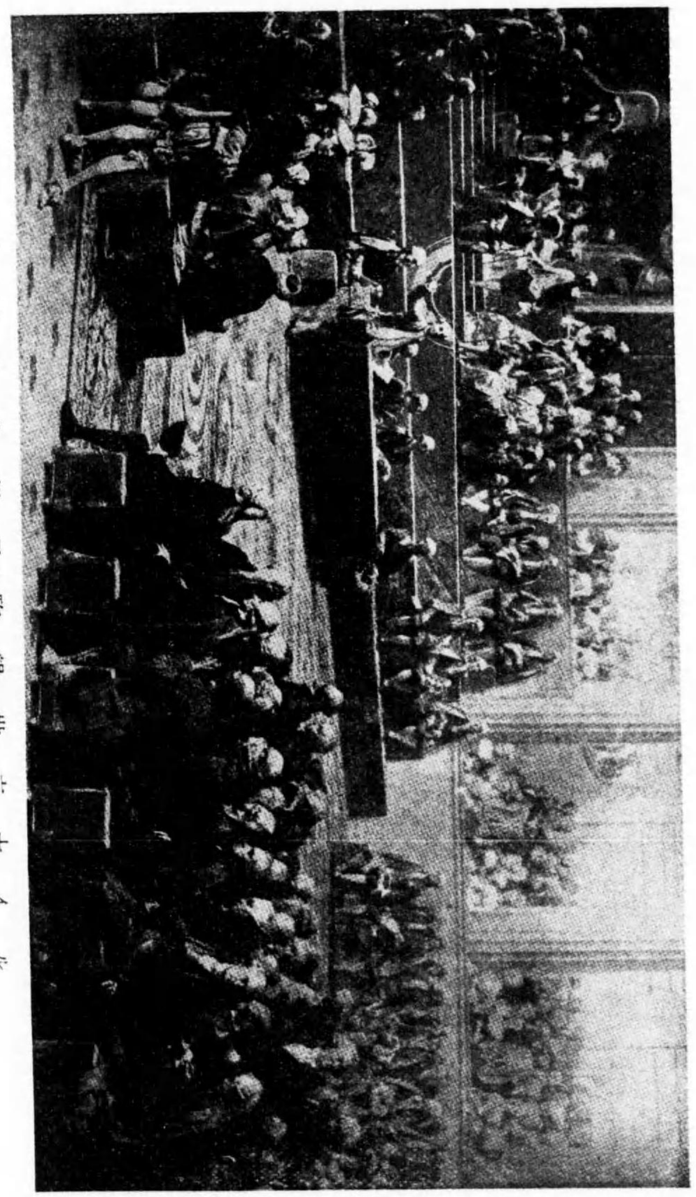
爲さゞれば、一同空腹に苦しみ、面色益〻安からず。漸く午後一時頃に至りて王、王后以下擧朝出席し、議員等一同起立して敬禮す。その時ミラボーその傍人に囁きて、『こゝに犧牲者(ヴォアラ・ヴィクチーム)あり』[1]といひき。結果はミラボーが豫言以上なりき。

王の勅語

王は立ちて勅語を朗讀せり。その意に曰く、『朕が卽位以來王國の財政は甚だしく窮迫せり。これ專らかの名譽ある、しかも失費多き戰爭の結果なり。これがため勢ひ人民の出費を繁くし、負擔分配の不公平を訴へしむるに至りしは遺憾とするところなり。』かくいひて、最後に王は、『卿等は今日の場合一致して、此の困難を救ふに努めざるべからず』と結びたり。王の詔勅に次いで內大臣バランテン[2]の演說あり、次に大藏大臣ネッケールの演說に入りき。

ネッケールの演說は滔々三時間に亙りしが、要するに數字の朗讀に過ぎず、此の間空腹と退屈とに苦しめられし議員等は、宛も拷問に遭へる思ひなりき。而もネッケールの演說中に彼等が豫期したる下層人民の

1 Voila victime
2 Barentin



會開の會部三・臨親世六十イル
—蔵館物博ユイサルニヴ・畫デーク—

救濟、革新の方法如何に關して、終に一語をも聽く事を得ず。加之彼等がかくても此の辛き拷問に堪へたるものは、やがてネッケールの口より、すべての議事は『頭數により決すべし』との一言を聽かんとしたればなり。而も彼は終に『頭數による』とも『部別による』とも又言ふ所なかりき。かくて彼が最後の言に曰く、『諸君は現在の秩序を保ち、革新の精神を確立せざるべからず。議事を二部又は三部に托し、迅速なる決議を執られたし。行動及び利益の一致を要する場合、又は事件に依り、共同の議決に從ふ事は國家の爲便利なりとす』と。卽ち之に依れば、或一事は三部箇々に、或は二部に別れて協定し、或事件に限り三部協定を爲す事、それも政府の命令によらず、各部合意の決議に依らしめんとす。これネッケールに鞏固なる自信なく、謀に妥協融合を計る窮策なり。封建制度の保存を冀ふ者と、其の破壞を謀る者とを一堂に會せしめ、而も自ら指導的仲介者たらずして、此の氷炭相容れざる兩者をして、尙相互の間に都合よき調和鹽梅を圖らしめんとす。これ恰も木に緣りて魚を

ネッケールの長演說最要件に及ばず

求むるものにして、その愚また多くいふに足らず。

ミラボーの計畫頓挫す

ミラボーは當日、若しネッケールにしてよく此の重大問題の解決に對し、斷乎として主動者の地位に立たばよし、さなくば、止むを得ず、自ら進みて其の局に當り、茲に一大轉機を作らんと欲し、密かに演說の草稿を準備し來れり。此の草稿は幸ひにも彼の書記バッシー[1]の手に依りて後世に傳へられたるが、其の要領は、王に迫りて三部會成立の前、先づ各部別々に分れて議決するか、共同して議決するかを決定せんとするに在りき。而してネッケールの演說中此の事に及ばざれば、其の演說終るを待ちて、自ら起ち、日頃熟知せる王の優柔なる性癖に乘じ、一擧王に肉薄して其の心を動かしなば、彼忽ち心迷ひて、たとへ衷心反對なる事柄をも承諾するに至らんと、一人作戰の方略を定めたりき。且彼は自己の辯舌に自信あり、これに依りて感激しやすきフランス人の感情を刺戟し、ひとり三部議員の全部のみならず、二百人の牧師議員の心をも動かして、此の一場の謁見式を直ちに變じて國王親臨の會議となし、一瀉千里にさしもの難問題を解決し去らんとの企を有したり。彼は曩に、議員を一々呼入れし時、マルエー、ムニエー等の頻りに衆議員より喝采せられしに反し、彼に對して人々依然輕侮の情あり、冷眼を以て見送りしことを知れど、彼の意氣はこれが爲に沮喪せず、『見よ、久しからずして汝等は一々わが指揮に從はん』と思へるものゝ如くなりき。

1 Passy

ミラボー、ネッケールを筆誅す

しかれどもミラボーが作戰は其の緒を開くに及ばずして敗れぬ。ネッケールが豫めかゝる事のあるべきを恨れて、王に忠告するところありしや否やは知らず、王はネッケールの演說終ると卽坐に、闥外へ出で去りて、ミラボーに發言の機會を與へずして終りぬ。ミラボー深く之を遺憾とする情あり、後、雜誌『ル・ジュルナル・デ・ゼター・ジェネロー』[1]に當日の事を記して、ネッケールを罵倒して止まざりしかば、ネッケールその發賣を禁止し、なほ今後政府の許可を經ずして右雜誌を刊行することを禁止せり。言論制抑は從來政府の權限に許されたるところなれど、三部會召集以後、政府は寧ろ言論に對し寬大の方針を執り、輿論もこれを自由主義の

1 Journal des États Généraux

發現として歡迎し居たりしなり。しかも今や三部會開會卽日にして此の壓迫は來れり。ミラボーこゝに於て題名を變へて別に雜誌を出し、『レットル・ザ・メ・コンメッタン』[1]といひ、その紙上に言論抑壓を叫ぶこと頗る猛烈に、大いに世の注目を惹きぬ。ミラボーの名聲これより漸く昂る。

二　三部會より國民議會へ

第三部故意に成立せず

三部會は五月六日を以て開會せらるべく宣言せられぬ。よりて六日には第三部議員前の如くサル・ド・メニューに集りしに、他二部の議員は待てども來らず、やがて彼等は別室に集合しゐること明かになりぬ。第三部議員はかくては彼等の思ふ坪に嵌りて、部によりて議決する端緒を開かんことを慮れ、自部の成立を進めず、靜坐して何事をも爲さず待ちゐたり。しかも多少の秩序を作りて議事を爲すの必要あるを以て、最年長者の、ルルー[2]を議長とし、次の年長者六人を選びてこれを扶けしむ。しかれども未だ正式に成立せるにあらねば、眞の三部會にあらずといふことに一致し、この際何事をも爲さず、他部議員の來るを待ちて、完全なる三部會の形式を作らんと思へり。かくてあるほどに、ドーフィネー州の一議員は來りて、今、他の二部は既に資格審査を終了して、各成立せんとしつゝありと報ぜり。こゝに於て第三部は、今日は未成立のまゝに散會し、明日更に集會せんことを懇談して去りぬ。

他二部の態度

これより後、第三部議員等は毎日空しく會合して何事をも爲さず、他部議員の來るを待つと稱して二週日を過したり。此の間十二人の委員は選ばれて、各個人の資格により他の二部に赴き、その來り加はらんことを勸告せり。これにより他二部は投票に依りて其の可否を決することとなり、貴族部に在りては、贊成者四十七に對する反對者百八十八人の大多數を以て加入の案を拒斥し去れるに拘らず、僧侶部に於ては同じく拒斥に決せしが、その贊否の決、百十四に對する百三十三には過ぎざりき。以て兩部の態度の著しき徑庭あることを認むべきなり。

1 Lettres à mes commétants
2 Leroux

ミラボーが常に僧侶部と成るべく情意を疏通せんとしたるは、此の爲なりしなり。

三部の交渉頻々

五月十三日、貴族部よりプラレン[1]公以下數人の委員は來りて、第三部に告げて曰く、『吾等は既に成立せり。貴部より協議を要することあらば、吾が部交渉委員を作りて協議するところあらん』といひ、次いで僧侶部よりも同樣の申込をなし來りぬ。之に對し第三部に種々の議論あり、五月十九日、ムニエー、バルナーヴ以下十六名は、不明の方法にて選擧せられ、二十三日より二十五日に亙り、協商會は開かれぬ。第三部の委員等は、よろしく三部合同して資格審査を行ひ、然る後成立すべしと主張し、他二部の委員等は各別に成立すべきことを主張して、妥協遂に成らず。しかも僧侶部は、なほ妥協成立するまで吾が部は成立することを差控ふべしといへるに、貴族部は遮二無二個別成立を主張して下らざりき。

此の間第三部にては、カミュサ・ド・ベロンブル[2]、僧侶部に勸告の委員を送

1 Duc de Praslin
2 Camusa de Bélombre

ミラボー頭角を顯す

るべしと動議するや、ミラボーは初めて最初の大演説を試みき。

之より先き五月二十五日の會にて、ムニエーはミラボーの演説を評して、その中逕りに、『ミラボー伯』といふ語を繰返したるに、民主主義の一議員は立ちて、『われ等平等の人の集會なるに、何の勳爵を反復するぞ』と絶叫せり。ミラボー直ちに之に應じて起立し、『伯爵の名を欲するものは何時にても之を取れ、余の尊ぶ所は全國同胞の代表たる稱號のみ』と云ひて喝采を博せり。ミラボー初めは頗る賤しめられゐたれど、その一言一行みな光彩あり、常識あり、漸くにして衆望を負ふに至らんとす。今や此の五月二十七日に、彼は立ちてカミュサの說に贊成し、初めてカーライル（史家・文豪）[1]の所謂「獅子吼」[2]を爲せり。

ミラボー最初の獅子吼

今やミラボーの莊重にして熱情ある雄辯は、一回は一回より深く衆人の心を魅し去りぬ。されば彼が此の際に於ける演說の與へし感動は、眞に甚深なるものなりき。彼は先づ貴族の傲岸頑冥を挫き、僧侶の首鼠兩端を責め、正義正理の名に依り、第三部に代りて貴族部の反省を

1 Carlyle
2 Lion's Roar.

求めんといふや、喝采は雷の如くなりき。かくてタルジェー[1]以下數名の議員等は僧侶部に至り、ミラボーの語を傳へて熱心勸說するところありしに、こゝにも感動する者少からず、シャルトル[2]の司敎リュベルザックの如き、直ちに僧侶部全部は立ちて第三部に加はるべしと叫び、牧師の多數これに同ぜしが、高僧等強ひてこれを制止せり。

王三部間の協商を命ず

當時また僧侶部の內に、ラングル[3]の司敎ド・ラ・リュゼルンの如き、問題解決の一法として、今は貴族部、僧侶部相合して一院を作り、平民部に對しもはやイギリスの上院の如き位置を占むべしと說けるものあり、ネッケールも之に贊成せり。しかも王は憂慮やまず、ヴァランテン、モンモレン、その他大臣臨席の上にて、三部の協商會を再開すべきを命じき。これに依りて五月三十日、協商會は再び開かれしが、貴族部と平民部とは益〻意氣盛んにして、相讓らず、僧侶部は依然として兩端を持し、遂に此の度も失敗に終りぬ。

ミラボー、マルエーと會す

此の頃ミラボーは政府筋と或交涉を有するに至りぬ。はじめ、元來保守的傾向を有するマルエーは、ネッケール及びデュロヴェルセー[1]と特殊の關係あり。ミラボーこれを利せんとし、その友デュモン[2]を介して、五月末マルエーに對し會見を求めたり。彼は其の時マルエーに語りて曰く、『余は足下が自由の賢き友なる事を知れり。余も然るなり。貴下は暗澹たる暴風雨の將に來らんことを憂慮せらるゝならん。此の點に於て余の苦衷も貴下に讓らず。たゞ數多き議員の中には、過激論者、危險人物も少からず。また貴族の中、自由の精神旺んなる者は智力足らず、小人の中には、火藥にマッチを投ずるが如き事を爲す人物二三あるを知れり。目下の問題は君主制及び君主が、來りつゝある暴風雨に遭遇して、能く殘存し得べきや、既に行はれ、尙引續き行はるべき失策が、われ等總べてをも渦中に卷き込まざるべきや否やに在り』といひぬ。

ミラボー、マルエーと會見す

マルエーはもと溫和自由說にして、君主統治を思ふ人なれば、今、極端なる過激派として恐れしミラボーの意見の、彼がごとく穩健にして、秩序ある改革說なるを知りて、いたく驚けり。まことに彼はミラボーの

1 Target
2 Lubersac, Evêque de Chartres
3 de la Luzerne, Evêque de Langres

1 Duroverslay
2 Dumont

前半生の放逸無頼なりしを知り、なほ其の天才は認めたるも、これを以て民衆を煽動するデマゴーグのそれなるを思ひ、甚だ恐るべき危險人物の觀を爲しゐたりしなり。されば今やミラボーの意外なる言葉を聽き、『君よ、余は君の意見に敬服せり。余はなほ多く君の言はんとするところを聽かんと欲す』といふ外なかりき。ミラボーは曰く、『余のいはんとするところは甚だ簡單なり。貴下は王の顧問府の首腦たるネッケール及びモンモレンの親友なりと聞く。余はかの二人を愛せず、彼等もまた余を好まず。然し余等が互に相愛すると否とを問はず、余と彼等との間に意志の疏通をはかるは無用にあらずと信ず。故に余は此の目的を達するため、足下が余を彼等に會見せしむる勞を取られんことを希望す。彼等の意向にして往昔の三部會と同樣に、此の度の三部會をも抑壓せんと欲するならば、彼等は無能偏狹の人物と云ふの外なく、王も亦その責を免れざらん。しかも事實は眞に然らざるべし。思ふに彼等は主義を生命とし、これが爲に奮鬪することを辭せざるなる

マルエー、ミラボーに敬服す

べし。この計畫にして君主制の範圍內に於て道理あるものならば、余はこれに同情し、すべて其の事に余の精力を用ひて、極端なる民主主義の氣風を緩和するに努めん』と。

マルエー、ミラボーを兩相に介す

マルエーも亦既に此の意見を有し、これを以て嘗て宰相等に進言せることもあり、今や有力なるミラボーが同意見の抱持者なるを知りて喜ぶこと限りなく、直ちに兩宰相の許に赴きて、會見のことを勸告せり。然るにモンモレンは、ミラボーが嘗てプロシャの宮廷に使して、その隱祕を發ける『ベルリン宮廷の祕書』を著せしを指摘して『余はかゝる不信用の人物に會ふことを欲せず』といひて拒絕せり。ネッケールに至りては、例に依り無言にて天井を凝視せるのみ、また可否をいはざりき。されどマルエーは熱心に勸說して止まず、彼と意志を疏通し置かば、たとへ直接に何の得るところなきまでも、少くとも政府反對黨の巨魁を懷柔するを得る利あるにあらずやと說きしに、ネッケールは曰く、『彼は信用なし、將來も然らん』と簡單に答へぬ。『然し、ともかくも彼の心中を探り

置くも無用にはあらざるべし』といひ、翌日午前八時を以て、會見の時刻として約束せり。

ミラボー、ネッケールの會見及び衝突

かくてネッケール、ミラボー會見の一場は成功したれども、此の際マルエーが其の席に立會はざりしは大なる失策なりき。ミラボーは定められたる時刻を違へず、ネッケールの家に至り、先づ鄭重なる辭令を以て今日の會見を謝せるに、ネッケールは甚だ傲慢なる態度を示し、少しく頷けるのみなりき。ミラボーは曰く『君よ、マルエー君を介して、貴下は余が貴下と會見せんとする理由を了解し、之を許されたり』と。ネッケールは答へて曰く『君よ、マルエー君は、君が余に對し、何事か申出ありといへり。何なるか』と。ネッケールはミラボーの貧窮なるを知り、彼は自ら求めて買收せられんとするものならんと思ひ、其の『申出』[1]（プロポジション）とは報酬に關する要求を暗に意味したるなり。卽ち普通の富豪が其の恩惠を乞ふ貧人に對するが如き態度にて、言動いたく無禮なりき。ミラボーは今この『申出』なる語を聞くと共に、憤然立ちて『余が申出は、貴下に、アデュー[2]（さよ）を告ぐることのみ』といひ、席を蹴つて去れり。かくて其の足にて直ちに議場に赴き、マルエーに遭ふや『貴下の人（ネッケールを指す）は小人なり。彼はやがて余より聞く所あるべし』といひき。以上はマルエーが其の『覺書』（メモアール）に記したる所に據る。

1 Proposition
2 adieu

平民部王に建白書を出す

次回の三部委員協商會は、五月三十日の衝突後、六月三日まで中止せられき。而して此の間第三部は直接王に向ひ建白書を出し、自己の主張を述べたり。その中に『吾々は王威と人民の幸福との上に、國家の基礎を作るの外を知らず、種々の特權社會に對する王と人民との自然の同盟は、必然に實現せられざるべらず』といふ語ありき。此の建白書を捧呈せんとするに當り、障害となりしは、皇太子急死のことありて、委員の謁見を止められしことなりき。これまで第三部は、座長をば一週間毎に選擧しゐたるが、六月三日、多數を以て座長に選ばれたるバイイーを代表して、王に謁見を求めたり。

謁見は六月六日に行はれたるが、バイイーは第三部の建白書を捧呈

し、且太子の死に對する弔辭を述べしに、王は單に一般的の謝辭を以て之に答へたるのみなりき。

これより先き、ネッケールは六月三日の三部協商會に參し、王の名によりて次の宣言を爲しぬ。

三部會に對する王の宣言

第一、各部は別々に資格審査を行ひ、相互に通知すべし。

第二、この資格審査に關し異論あらば、三部の委員協同してこれを審査すべし。

第三、三部委員の協商成立せざる時は王これを決定すべし。

此の宣言に從ふときは、第三部は全くその目的を失ふ事となるなり。

六月六日、僧侶部は右のネッケールが宣言に同意せしが、第三部いまだこれに反對を表明せざる以前、貴族部はダントレーニュ[1]以下の極端保守黨の說を容れ、宣言第二條の到底承認しがたきを主張して、これが訂正を行ひしため、遂に不成立となりしは、第三部の爲に幸福なりき。

六月六日バイイー以下十名は王の許に建白書を上りたる後、僧侶部

1 d'Antraignes

より來れるエイ大司敎以下の委員と會見せり。大司敎等は下層細民の饑饉の爲に困窮せる實狀を說き、黑パンの一片を示し、『此の獸類も食ふを欲せざる物が、目下人民の食物なり』といひ、第三部も早く委員を出して、救濟の道を講ぜられたしと勸說せり。これ極めて巧妙なる罠なりき。第三部にしてこれに同意せんか、既に自ら成立を自狀せるにひとしく、三部別々に協議する先例を作るなり。一たび其の術を作らば、從來の辛苦も水泡に歸せん。然らば、第三部にして之を拒絶せんか、彼等は我意を主張する爲に、人民の疾苦を顧ざる者との惡評を蒙るべし。此の時第三部が爲せる答辯は更に巧妙なりき。曰く、『吾等は貴下等と同じく、深く責任を感じ居れり。また公衆の不幸に關しては、感動の極涕涙を禁ずる能はず。かくて余等が切望するところは、貴君等憂を同じうする人々と共に一堂に集りて、速に救濟の道を講ぜんことなり』と。此の巧妙なる辭令の提議を爲せるものは、これまで嘗て人の注目を惹かず、色蒼ざめ、神經質の樣子を現し、木の葉のごとくに戰へながら

演說せる青年なりき。而もこれ後に、萬人を震慄せしめしロベスピエール[1]が處女演說なりしなり。

三部會は其のはじめ一定の方針なく、團結なき烏合の群集に過ぎざりしが、しかも民主主義の一點に於て、その間潑剌たる血脈の相搏つものあり、此の主義を中心とし、此の主義を擁護するためには、反對に遭ふ毎に鞏固を加へ、漸くにして自家の勢力を自覺するに至れり。されば彼等が一月の餘もたゞ集合して、何の爲す所もなかりしは、實に大いに爲しつゝありしにて、卽ち彼等は此の間に、確固たる自信を養ひ、最後の大決心を爲す勢力を蓄へ得たりしなり。政府は其の初め彼等の結束不十分なりし時に於て、自らこれが指揮に任せば、これを操縱することも案外に容易かりしならんも、今や彼等は自ら大なる指揮者として、以て全フランスを動かすべき勢力を養ひ得たることを自覺せり。その集會は、數週間後の今日、尙形式的に成立せざりしかど、その實力は今や自ら何事に對しても解決を與へ、自ら主謀者として政治の樞機を運轉す

第三部の團結漸く固し

1 Robespierre

べき希望を鮮明にし來れり。かの僧侶部の最後の勸告に對する議事は、明白に此の事實を發現せしめたるものなりき。

六月十日、開會劈頭ミラボーは、『吾人がかく今尙不成立の儘に遲疑するには恐るべき危險あり。吾人は今に於て早く決心せざるべからず』といひしに、議員の多數は彼を信用せざれども、而も彼の一言一行みな常識的なるが爲、知らず識らず彼を指導者として其の言に傾聽せり。此の時まづ起立せしは彼のアベ・シエースなり。彼は此の日始めて出席せしが、その前既に『第三部とは何ぞや』の著書によりて有名となりたれば、その發言は大いに衆耳を惹けり。彼は『吾等は個々分立して國事を議するる秋にあらず』といひ、第一、他二部は來りて第三部に合同すること、第二、一時間內に資格審査を行ふこと、第三、この勸告を容れて加入し來らざるものは、自ら其の缺席の責に任ずること等の提案を爲しき。而して此の決定的提案は、忽ち衆の容るゝ所となれり。

シエースの決定的提案

六月十一日は恰も祭日に當りて休會せしが、この間に僧侶部の牧師

百人ほど會合して、第三部の勸告に從ひ、これに加入することを決議せり。かくて六月十二日、開會劈頭、第三部は他の二部に委員を送り、共同して資格審査に加はることを勸告せり。これに對して僧侶部は答へて、何れ貴族部とも相談の上實行すべしといへり。第三部は王に送るべき建議文を議したるに、マルエーの原案は其の用語あまり敬語多きに失すとして、別にバルナーヴの案を可決せり。このバルナーヴの文案は多く修飾を用ひず、單刀直入、三部の協和今日に至るも成らず、その曲は專ら第一部に在り、第三部は此の上無益に議論に日を送るを止め、直ちに議事を開始せざるべからず、その方法を奏上する爲、座長の拜謁を願ひ出づといふ意味を載せたるものなりき。この日他二部よりは一人の議員も來らざりき。こゝに於てデミュニエー[1]の動議に依り、資格審査をはじめ、無事これを終了せり。翌六月十三日には、第二部より三人の牧師、レセーヴ[2]、バラール[3]、ジャレー[4]來りて第三部に加はり、滿場の喝采を以て迎へられぬ。その數は三人なりしかども、その加入の意味は重

三部合同の成立上奏文

僧侶議員三名加入

1 Desmeuniers
2 Lescève
3 Ballard
4 Jallet

大なりき。

六月十六日、マルエー及びムニエーより、議會の行動を以て過激なりとする議論出でしが、その意、若し此の會既に第三部のみの代表にあらずとするも、果して國會なりや如何といふに在りき。然るに第三部は既に、自ら國民全體の議會なりとする實を認め、進んで其の命名についての議論を爲すに至れり。アベ・シエース[1]は『フランス國民のすべての委托せる代表者の會』とすべしといひ、ミラボー[2]は『フランス國民の代表者の會』といふ名を主張せしが、ムニエーは元來保守的溫和の意向を有する人とて、『少數の不在に於ける議事中の多數』といはんといひ、ヴァンド[3]ーム選出の一議員は『選擧人の代表者の會』とすべしと提議し、グルノーブルのピソン・デュ・ガラン[4]は、『フランス國民の代表者の會』とすべしと名づけんなどいふに至りて、議論紛々たり。此の際國民議會の權力確立せし時、王はこれに對し中止權を有するや否やの議論出でゝ、はしなくも問題を惹起せり。

三部會名稱變更の議事

1 "Assemblée des Représentents connue et verifiée de la Nation française"
2 Assemblée des représentants du Peuple français
3 Vendôme
4 Pison du Galland

ミラボーは六月十五日、王の認定の必要を論ぜるに對し、十七日議員

國民、議會の名定まる

ツーレー[1]は、『人民が自ら其の意志を告ぐる以上、その上に他の認定を待つ必要なし』といふや、ミラボーは憤然起立して曰く、『余は王の中止權を必要とす。若し中止權なき程ならば、余は寧ろ此の國を去りて、コンスタンチノープルの民とならんのみ』と。彼復曰く、『人民は今尚無なり。されど追々偉大とならん。吾人は今尚王の任意の權力の下に在り。故に吾人は王の認可を待たざるべからず。吾人は目下の權利を以て滿足し、未來に於て抵抗し難き請求を爲さゞるべからず。故に諸君は須らく自ら『フランス國民の代表者の會』といひて、人民のために權利の端緒を作れ。而して人民と共に膨脹せよ』といへり。蓋し彼の精神は飽までも君主主義にして、イギリスに於けるがごとく、漸を追うて民主權を擴張し、遂に君民同治の窮極に到るべきを理想としたりしなり。この際彼は憤激のあまり議員等を罵倒せし爲、滿場騷然たりしかば、ミラボーは一時退席せり。かくて最後に、ラグラン[2]の動議せる『國民議會[3]』

1 Thouret
2 Iagrang
3 Assemblée nationale

成立を翌朝に延期す

の語勝利を得て、これに定まりぬ。此の語簡單にして、從來も政府が三部會全體に對し、此の語を用ひし慣例あり。かくの如くして、國民議會は成立の端緒を見出すに至りぬ。

此の議事は十六日の深更に至りて終りしが、議員の多數は直ちにこれを以て國民議會の成立と認めんとせり。マルエーの率ゐし少數の議員はしかし極力これに反對し、罵聲叫聲を以て議事を妨げんとしたれど、聽衆また多數に聲援し、中にも一人は議場に闖入し、忽ちマルエーの襟髪を摑みて振り廻したるまゝ、姿を隱したり。かくて紛議を重ねて夜深に至るに隨ひ、賛否双方鬪ひ疲れて、人氣悄沈せるを見て、溫和主義の議員ゴーチエ・ド・ビオーザー[1]は起ちて、『かくの如き決議は宜しく白晝に行ふべし。余は吾人の集會が國民議會として成立することを望む者なれど、今は其の時にあらざるべし。明日余は血を以て其の投票に署名するを躊躇せず』といひ、滿場これに賛同して解散せり。

1 Gautier de Biauzat

第四章　朝廷と國民議會との爭議

一　國民議會の團結

イギリス大使の批評

パリー駐在のイギリス大使ドルセット公[1]が、六月十一日本國國務卿リーヅ[2]に送れる報告に、『宰相等は何等の成算をも有せず、少數の熱烈なる辯士に威嚇せられつゝあり』といへり。これ當時のフランスの實狀を穿ちたるものにて、ネッケールは胸中何等の經綸をも策略をも有せず、徒らに貴族と平民とを調和推讓せしめ、之に依りて自家の財政政策を行ひ、以て救世主たる賞讃を贏ち得んと欲せるのみ。而も六月四日の議會に於て、彼は此の希望の目前に雲散霧消せるを見たり。貴族は益〻自家の特權擁護を主張して毫も讓らんとせず、而して第三部は最後の一擧に依りて既に舊來の政體を轉覆せり。何となれば第三部は國民議會と爲り、王と國民議會との間に一の中止權なしと決議し、これより直

ネッケールの無能處置を顧倒す

1 Dorset
2 Leeds

ちに改革を始むる事を宣言せり。これ純然たる民主政治にして、舊來の君主政治は、一夜にして君民同治以上の議會政治となりしにあらずや。こゝに於てさすがのネッケールも今更の如くに周章し、早く六週間以前に於て示すべかりし決心を、今はじめて固むるに至れり。

彼はマルエーに會見して曰へり、『卿等は權利なき處置を以て立法權を獨占せり。今や王は此の權力を恢復し、卿等を再び舊の位置に還らしむべし』と。マルエーその時これに對へて曰く、『貴下にしてこれを行ふを得ば幸なり。余もこれに贊成することを吝まざらん。然れども貴下はそれがために選擧資格審査を不完全なりと宣言せざるべからず。然る時は貴下は今後議會に對して全く無價値の人と成り了れることを人民に向つて示すのみならん』。ネッケール曰く、『諸君等はたゞ三部會の一部を代表するに過ぎざるに、しかも三部會の全權を獨占せんとす。故に王は諸君等を一旦舊の第三部に還らしめざるべからず。其の爲に王は三部全體に勅語を下さゞるべからず。而して其の後に

ネッケールの國民議會を否認す

於て王は貴君及びミラボー君が熱心に主張する如き計畫を發表すべし』と。その意は先づ議會を譴責し、第三部を舊位置に還し、更に親臨會（セアンス・ロア）議（ヤール）を開きて、政府より改革の案を提出せんとするに在るなり。しかもこれ宜しく數ヶ月の前に於て爲すべかりし事にして、今や既に其の時機は後れたり。議員の意氣は正に沖天の勢あり。此の際に當りては、其の措置、一に敏活にして愼重ならざるべからず、しかもこれネッケールの能くするところにはあらざりき。抑もまた彼が先にミラボーと會見しながら、樂んで其の助言を聽くの雅量を有せざりし失敗なり。

時機既に後る

六月十七日、國民議會は再び集合せり。傍聽者は場に滿ちぬ。劈頭政府より議長に對し、王より議員に與ふべき書狀あれば、來りてこれを請取らるべしといへり。これまたネッケールが小策にして、直ちに王の書を議場に送らば、國民議會を公認したることとなるがゆゑに、かくして少くとも議會の成立を妨げんとする策なりしなり。しかれども議員中の過激黨はかゝる結果あらんことを恐れ、今、重大なる會議中なれば、議長の退席をゆるさずといひて拒絶し、つひに四百九十一人の多數を以て國民議會は成立し、改めてバイイーを議長とせり。かくて遂に第三部は變じて國民議會となりしなり。

國民議會の成立

各議員はこゝに於て、『各人は其の頭上に負へる義務をば、熱心と誠實とを以て行ふべし』との誓言を爲せり。新議會は直ちに、一、自己の徴稅を決する權利を認定し、從來のすべての租稅を廢止すること、一、しかし何等の理由あるも此の國民議會の散會までは、從來の租稅は其のまゝに取立て得ること、一、會期終るとともに、議會の認定を經ざる租稅は全くこれを徴收することを得ざらしむること、一、國債はフランス國民が名譽上その責任を負ふこと、一、現下の民間の饑饉及び不平の救濟をもなすこと、一、成立の宣言、及びこれ等すべての決議事項を出版すべき決議すること、一、成立の宣言、及びこれ等すべての決議事項を出版するため、カミュー[1]を委員として、パリーの出版業者ボーヅエン[2]の許に至り、大至急に出版を命ずること等を決議したり。これ等の活動は六週間の不活動に對し、花々しき對照を示したりき。

無爲の六週間の後の大活動

1 Camue
2 Baudonin

抑も第三部は初めより政府の意志、大改革に在る事を信じ、喜んで之を助けんとせしに、政府は却つて改革の主動者たらず、貴族は頑然特權を固守して、第三部と決議を共にするを好まず、かくて改革の志の成る何時の日にかあらんと思ひては衷心不安を感ぜざるを得ず、不安は更に決意を生み、飽くまで民主主義を推立てゝ遮二無二驀進せんとするに至れり。げにも鹿を追ふ獵夫は山を見ず、彼等は今や必ず到達すべき所まで到達せずんば止まざらんとす。必ず大改革を遂げんとする志は彼等を驅りて、協賛者たる位置より進みて、主權者たらしめんとするに至れるなり。しかも、議會は形式だけも尚君主權を認めゐたり。

議會は協賛者より主權者に變ぜんとす

王の親書第三部に讓歩を促す

六月十七日朝、國民議會愈〻成立し、その宣言書を朗讀するに當り、一同王の萬歳を唱へたり。その夕議長バイイーは政府より歸り、王の親書を携へ來れるを報告するや、また王の萬歳を唱ふ。しかれども親書の內容は決して議會を喜ばすこと能はざりき。勞頭『第三部議長バイイー君……』と記せるものまづ彼等を不滿ならしめたり。曰く『他の二部を特權者と名づくるは非なり。……第三部が王に對して信賴と敬愛とを顯す程それだけ、彼等は王を愛し又王に愛せらるゝことを悅ぶ人民の感情を充分に代表するものなり』と。これ第三部に讓歩を促す意味なれども、文辭例に依りてネッケール式の不得要領なりき。

宮中守舊派の活動

六月十九日に議會は休會せり。而して此の十九日こそ、朝廷側の保守黨が大活躍の日なりけれ。この時王はマルリー[1]に在り。保守黨は、王がヴェルサイユに在る時は、一般人民の同情に動かされ、ネッケールの助言に扶けられて、溫和ならんことを惧れ、マルリーに在る一味は、王后及び朝廷を刺戟して、意志薄弱なる王に迫り、今にして斷然たる處置に出でざれば、王權地に墮ちんと威脅せり。曰く『禮を辨へざる第三部を猶豫なく抑壓せよ。ヴェルサイユ及びパリーの市民が反對運動を行ふとも、軍隊の力これを鎭壓するは易々たるのみ。たとへ兵士中に多少の革命分子あるとも、外國傭兵は却つて忠實なり。些々たる一揆の盲動恐るゝに足らず。何よりも大切なるは王權擁護なり、そのため

1 Marly

に人民の半を失ふも亦可ならずや』と。

これを聞きて王の心は久しく惑へり。彼は天性もと殘酷なる處置を嫌ひ、殊に内亂の如きは其の最も恐怖するところなりき。一方、ネッケールが無能なるがために、この重大なる時局を惹起せるを見ては、今はネッケールの進言にも耳を傾くるを躊躇せざるを得ず。さりとて彼はネッケール以上の斷乎たる改革を行ひ得る勇氣もなかりしかば、彼は最後に優柔なる中間の愚策を取れり。即ち彼は國民議會を廢止することを爲さず、會議に親臨して、自己の意の在るところを彼等に告げんとせり。これ實に最初の開會當時に爲すべかりしことなりしなり。是に於て朝臣等は王の親臨を名とし、突然議會の會場を閉鎖せり。これは僧侶部の多數第三部に投せんとする虞ありしを防ぐため、また第三部を畏懾せしむるための威嚇手段に過ぎざりき。議會の閉場は朝廷保守黨の小刀細工にして、ネッケールは與り知らざるところなりしが、このこと果して一大事の導火となれり。

王終に中間の策を取る

一大事の導火

六月二十日朝、式部長官ブレーゼー侯は、議長バイイーに『二十二日、王親臨の會議を開く。準備の爲議會を閉鎖す』と通告せり。かゝる親書は王より直接議會に送らるべく、一式部官の手より送らるゝは、第三部に對する非禮の處置といはざるべからず。バイイー乃ちこれに答へて、『王より直接の命令ならねば、會議は依然として開かるべし』といひて謝絶し、事既にこゝに至る、斷じて會議を延期すべからずとて、當日は定刻の八時に、サル・ド・メニューに向つて三々伍々議員は集り來れり。然るに番兵門前に堵列して、彼等の中に入ることを拒めり。バイイー進みて、ガルド・フランセーズ（フランス近衞軍）の當直士官に對し、『既に今日開會の決議あれば、王も亦之を中止せしむる權なし』といへるに、士官等は頭を掉りて、『小官はたゞ命令を行ふのみ』といひ、遂に入場を肯ぜず。この日朝より細雨霏々として下り、天候寒冷、陰鬱不快の日なり。議員等の中の若き人々は、憤激して傘の蔭より大聲疾呼、『吾々は番兵にかまはず入場すべし』と叫ぶや、士官は兵士をして銃劍を裝はしめ、斷然たる處

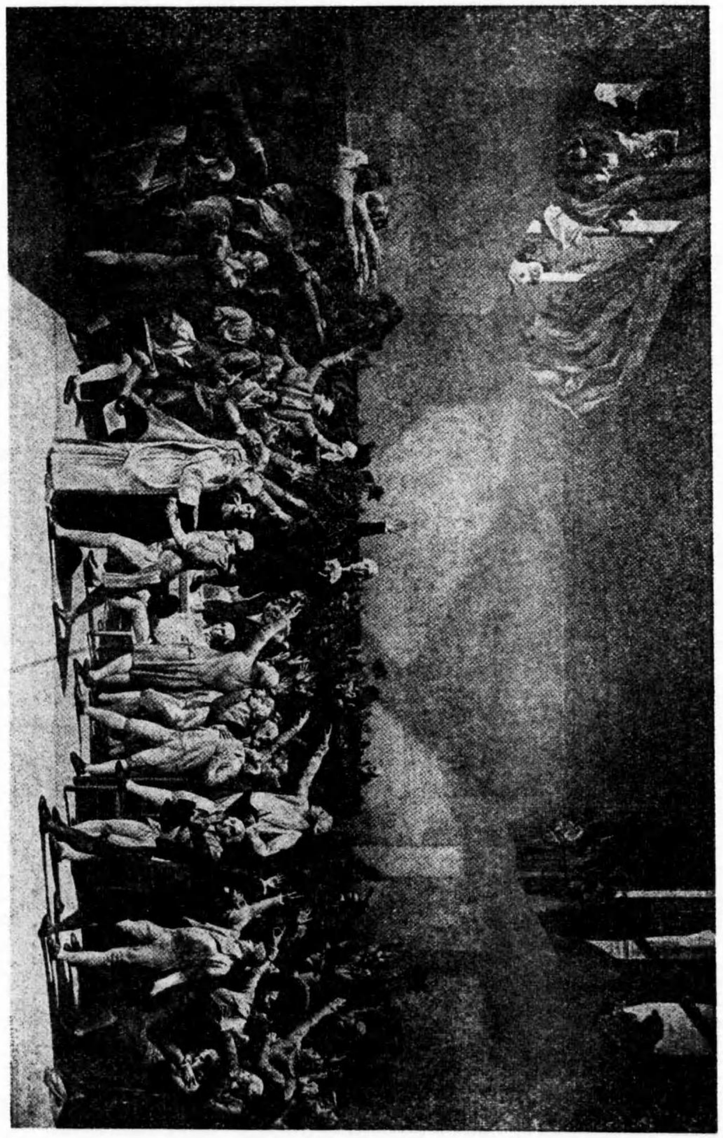
第三部議員等議場閉鎖を憤る

置に出づべき決心を示せり。然れども當直の士官は、特に好意ある取計ひとして、バイイー及び二三人の議員のみ入場して、内に在る記錄を携出する事に同意せり。この間に議員等は往來に集りて、其の後の手段を相談せるが、或はマーリーに行かんといふものあり、或は王宮に赴かんといふものあり。然るに其の時、ドクトル・ギーヨッテンは提案して、[1]セン・フランソア町に、朝廷のテニス・コートあり、廣くして多數を容るに足れり、彼處に赴きて會議を開かんは如何にといひしかば、一同これに賛成して赴き集る。（このテニス球戲場卽ち[2]ジュー・ド・ポームは今尙存在し、[3]革命博物館の名稱の下に、バイイーの肖像、議員の誓を爲すの圖、その他の記念品を藏めたり）。

議員等テニス場に集る

さて此の假議場に於ては、議長バイイトが爲に一脚の卓を準備せるのみ、他は議員皆佇立せる儘、午後一時議事は開かれぬ。その時アベ・シエースは立ちて、これより直ちにパリーに赴き、人民の後援を得て運動を開始せんといひしに、ムニエーはこれによりて過激派の說勝利を制

1 Rue Saint François
2 Jeu de Paume
3 Musée de la Révolution



約誓の場スニテ
——藏館物博ユイサルエヴ・畫ーイヴダ——

せんことを惧れて、この議を沮み、一の誓詞を行ふ事を提議して、賛成を得たり。誓詞に曰く、『國民議會は如何なる場所に開會すべく餘儀なくせらるゝとも、何人も其の議事を繼續し、及び其の重要なる任務を果すことを妨ぐるを得ず、我等議員は王國の憲法制定と、公共の復活が成就するまでは、決して解散すべからず』と。かくて更にこれを確實にする爲、各議員みな署名せり。この誓約の際、バイイー先づ音頭を取りしが、その態度、聲調、優美にして明朗、よく場内に徹底せり。各員もその發聲に從ひて右手をあげ、高聲に誓へり。その光景轉た悲愴を極めしかば、感情強きフランス人のこととて、一同は非常に感動し、或は涙を流し、或は相抱き、感極まりて歔欷するものすらありき。かくて滿場一致を以て國民議會は成立せしが、唯一人、ランクドック州のカステルノーデー選出のマルテン・ドーシュこれに反對して、署名の代りに、『反對』と記入せり。見物の群衆はこれを見て、ドーシュを捕へんと犇きしかば、バイイーは徐かに事情を述べて、ドーシュの反省を促しゝが、彼は王の許可なき誓書に

テニュ場の誓約

反對者一人

1 Languedoc
2 Castelnaudary
3 Martin d'Auch
4 Opposant

署名する能はずと拒斥せり。群衆はこれを見て愈〻激昂せしかば、バイイーはひそかに彼を横手の入口より人知れず退場せしめぬ。議員等は此の一人の反對のために全會の一致を破られしを遺憾として、必ず彼を要して署名を迫らんとする者多かりしが、領袖者の間には却つて『これ敢へて顧慮するに足らず、一個の反對は却つて衆心の一致を示すものにあらずや』といひて、意氣愈〻昂れるを示しぬ。

翌二十一日は日曜なりしがため、二十二日王の親臨會議終りて後、議員等居のこりて議事を繼續すべしと決議せり。しかも此の際のことよりして重大なる結果は生じぬ。卽ち下に述ぶる如き理由にて、二十二日の親臨會議は二十三日に延期せられ、國民議會はこれが爲、會議を延期せざるべからざるに至りぬ。しかもサル・ド・メニューは依然として固く閉鎖せられたり。こゝに於て、かのジュー・ド・ボームに再會せられんとせしが、他より使嗾を受けしか、または偶然何の思慮なく行ひしことなるか、ともかくも其の日は王弟アルトア伯主催のテニス會あり、會場

は使用を許されざりき。一說に、バイイーの提議として、ジュー・ド・ボームは、四方に見物人群衆し來り、議事の妨礙を爲すこと多ければ、已むを得ず中止せりともいへり。何れにしても會議はジュー・ド・ボームには開かれず、[1]センルイ寺に於て開かれぬ。

センルイ寺の三部合同會議

これより先き六月十九日、僧侶部は第三部に對し、合同すべきや否やにつき協議すべき事を求めたるに、可とするもの百二十九、否とするもの百三十七、條件附にて合同を肯せんとするもの九人なり。かくて百二十九人の贊成者は、直ちに九人に同意し、百三十八票となり、贊否の決たゞ一票に過ぎざるに至れり。此の事未だ決定に至らず、保守派の司教等は憤然として退場せるものあり。ヴィエンヌ及びボルドーの大司教、シャルトルの司教等主腦となりて、再び決選投票を行ひしに、百二十人は、直ちに之を可とし、折柄外出の二十四人は後ヴィエンヌ大司教の家にて贊成の決意を告げ、他の不在なりし五人もこれが贊成の側に立ち、是に於て百四十九人の多數を以て、第三部と合同することを決定せり。

僧侶部の多數第三部と合同に決す

1 Saint Louis

かくて二十二日には、この百四十九人相率ゐて、セン・ルイ寺に來會せり。此の外に貴族部としては、ドーフィネー州選出の、[1]ブラソン侯及び[2]ダグール侯の來りて加はるあり、これに第三部の全員を集めて、みなセン・ルイ寺に會し、三部合同の形式全く備り、國民議會こゝに成立を告ぐるに至りぬ。されば朝廷が親臨會議を二十三日まで延期せることは、却りて民黨の大なる利益とはなりしなり。

第三部初めて成立す

二　朝廷派の陰謀

ネッケールの獻策三箇條

之より少しく前に遡りて、親臨會議の經過を述べん。六月十九日マルリーの御前會議に於て、朝廷は、六月十七日の第三部會の變じて國民議會となれるにつきて、政府はいかなる方針を執るべきかを議せり。その時ネッケールは自己の新計畫を陳べて大なる反對に遭ひぬ。ネッケール案の要點は、第一、頭數決議の要求を認可すること、但し特權に關しては各部箇々に決議すべきこと、第二、文武の官職を貴族以外一般人民のために開放すること、第三、六月二十三日の第三部の決議を全然取消さしむること、但し其の際に當り、十分政府の意の在るところを告ぐること、これなりき。

1 Marquis de Blaçous
2 Marquis d'Agoult

他大臣の反對

右の改革案の內、第一及び第三は、バランテンが、國法及び舊慣に反くを理由として反對し、第二に對しては、陸軍大臣[1]ピュイセギュル之に反對して、軍事は王の手に在り、第三部の之に非望をかくる理由あらずといへり。さて最後の國民議會成立に關しては、議會は次の議會の組織を豫め規定する權利ありや否やの論起りて、會議は長時間に渉りて激烈なる論爭となり、遂に決する所なかりき。

御前會議の延期

此の爭議の途中、王は王后の進言を納れ、これらの事すべて二十二日重ねて御前會議を開きて決すべしと云へり。これ保守黨の策略にして、王后を通じて王に御前會議の再開を宣言せしめ、同日は大いに保守黨を糾合して勝を取らんと欲せしにて、二十二日に開かるべかりし王親臨の議會の二十三日に延期せらるゝに至りしは、實にこれが爲なり

1 Puysegur

き。

かくて二十二日のヴェルサイユ御前會議には、王弟アルトア伯以下、形式上御前會議に屬すれど、平生出席することなき貴族四人までも出席せり。かくて首尾よく保守黨は多數を占めて、ネッケールを壓倒し去りぬ。その日ネッケールに贊成せるは、モンモレン、セン・プリー[1]、ラ・リュゼルン[2]の四五人に過ぎざりき。かくて上に擧げたる重大なる三點を否決し去り、他は大體ネッケールの案を認めたりき。二十三日親臨會議に於て朗讀せらる可き勅語の草稿は、ネッケール自ら之を作りしが、その最後の言葉に、『余は卿等に命ず、卿等は宜しく直ちに分れて、明朝卿等の所屬として定められたる各室に集合して、會議を開くべし。從つて余は式部長官に命じ、豫め其の準備を爲さしむべし』とありき。これ決してネッケールの知らざりし所にして、新たなる而も重大なる附加なりき。

此の王の言葉は直ちに宰相に對する不信任にして、現今の習慣によれば、ネッケールは直ちに辭職せざるべからず。されど當時は未だ定まりたる習慣なく、ネッケール自身はなほ當日の親臨會議に出席する心得なりき。然れども其の妻は娘と共に傍より、かくては彼の威嚴に關すべしとして、これを諫止するに及びて、遂に辭表を提出しぬ。これバランテンの『覺書』の記述に據る所なり。

御前會議の結果

ネッケールの辭職

1 St Priest
2 La Luzerne

此の御前會議の結果につき、その前夜モンモレンシー以下の人々來りてバイイーに告ぐるところあり、バイイーは大いに憂慮したるが、翌日議會に到り見るに、果して四圍の光景甚だしく穩ならず、兵卒四千人（この數に關し諸說一致せざれども、玆にはアーサー・ヤング[1]に據る）議場の近傍に整列して威儀を示せり。かくてまた議員の入場に臨みては、例の如く無用なる儀式的屈辱が、先づ議員等の興奮せる神經を更に一層興奮せしめたり。卽ち貴族と僧侶とは、一方の入口より隨意に入ることを許されしに反し、第三部議員は、大雨中なるに拘らず、戶外に佇立せしめられき。こゝに於てバイイー先づ憤慨して『然らば吾等一同は退場せんのみ』と疾呼するに及び、さすがの式部長官ブレーゼーも漸く

不穩なる議場內外の光景

1 Barantin
2 Arthur Young

悟りて、議員等一同の直ちに宮中に入ることを許したり。

議員等入場を終りて見れば、案外にも藏相ネッケールの姿を見ず、不安と疑惑との空氣は漸く濃厚に、形勢刻々險惡に陷りぬ。この間に立ちて王は敕語を朗讀せり。曰く、『三部會の開會後既に二箇月を超ゆるも、未だ前提をすら定めざるは如何』と、先づ咎責の口調嚴かに、されど此の際深くは咎めず、特別の恩惠として、財政の內容を公表すること、今後租稅の徵集及び豫算の決定を協贊に求むること、若し貴族僧侶が舊來の金錢上の特權を保つことを諾せば、租稅は三部とも同等なること、特別逮捕狀を廢するにつき良案を求むること、宗敎に對する尊敬及び國民の名譽を損はざる範圍に於て出版の自由を許すこと等を宣言せり。但し財產に關する特權、權利義務に關する規定及び軍制は完備して破壞すべからざることを告げ、最後に、各部は宜しく個々に分れて、議事を進むべしと訓示せり。

王大いに第三部を叱責す

勅語の旨意と王の態度とすべて專制的、命令的、威迫的にして、また恩惠的、諭告的なり。しかもこれを朗讀する王の聲は低くして力なく、威儀を缺けり。而して冷靜に考ふるときは、王の宣言は主權の確定に非ずして、或意味にて、貴族權の確定なり。然れども一方勅語の內に尙大なる讓歩を見るべく、これを基礎として、或は將來に民權の一層大なる發展進歩を期待し得ざるに非ず。この宣言にして二箇月の前に出でしめば、三部會は驚喜感激してこれを迎へしならん。而も國民議會はもはや三部會に非ず、彼等議員は一致團結、自己の偉大なる團體的威力を自覺せり。院外よりは多數人民は喝采してこれが爲に聲援を惜しまざるあり、他の二部よりは來りて盟約に加入する者あり。今に及びて各部分立、個々に集り議決せよと命ずるごときは、彼等が抑ふべからざる進勢を强ひて沮止して、退讓屈辱に甘んせよといふに等しく、誰かこれを肯はんや。況や、彼等を圍繞する人民の、彼等が今に至りて急遽旗を卷いて退嬰するを見ば、必ず彼等を兵仗の威力に畏れ、式部官の冷遇に氣沮みて、意氣地なく壓迫せられし卑怯漢として指彈の標的とす

國民議會は三部會にあらず

るなるべし。議員が此の際の立場として、到底王の宣言は承諾せらるべくもあらず、況や兵仗の威嚇は彼等を慴伏せしむる能はざるのみか、却つてこれを憤激せしめしに過ぎざりしをや。

事こゝに至りては、衷心温和主義を持せるミラボーも、國民議會自衞の爲、極力反對する必要を感じたり。彼が當時の演説はまことに精明嚴勵を極めたりき。王の勅語終りて廷臣退場し、貴族と僧侶の一部とは、依然國民議會として居殘れり。その時ミラボーは立ちて演説して曰く、『諸君。諸君が今聽かれたる事は國家の利益となる事もあらん。併し壓制者の贈物は常に危險なり。かくの如き恥辱的總統主義は何事ぞや。……諸君の言論の自由は束縛せられ、兵力議會を圍めるを見ずや。國家の敵果して何處にありや。[1]カチリン果して門前にありや。（カチリンはローマの過激黨にして、陰謀に依りて元老院を壓迫せんとせしも、雄辯の權化と稱せらるゝキケロ[2]の爲に其の陰謀を看破せられ、

ミラボー議會に警告す

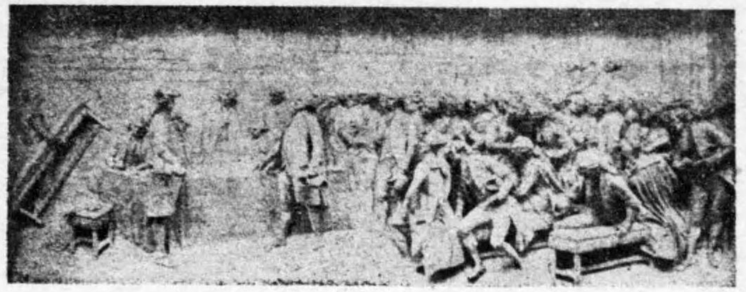
1 Catiline(Catilinus)
2 Cicero

面責せられき。）諸君は諸君の有する立法權能を以て、よく自己を包むならば、諸君は宣誓の信仰の内に立籠るべし。この議會は諸君が憲法制定の事功を果すまで、斷じて解散することを許さゞるなり』と。

ミラボー此の激語を放てるとき、式部長官ブレーゼー侯は來りて、式部官一流の低聲にて、バイイーに何事をか云へり。時に後方より、『何事なるか聽くを得ず、高聲に！』と呼ぶ者あり。ブレーゼー乃ちやゝ聲を昂め、『諸君は王の宣言を聽きたまへるならん』といひて、暗に議員等の退場を促したり。バイイーは勿論これに服從する意なかりしが、未だ如何に處置せんか、明確なる考もなく、ブレーゼー侯に向ひ、『集會は親臨會議終ると共に一旦閉會せり。只今は吾等の相談會にして、早速には解散いたしがたし』と答へ、議長席の近くに集れる議員に向ひて、『集合せる國民は王の命令に從はざるべからずと考ふるが、如何』といへり。その態度まことに優柔不斷なり。議員の多數も素より屈讓するを欲せざれど、さりとて一刀兩斷の勇氣も出でず、各相見て謀の出づるところを

式部長官議員等の退場を促す

名士の一喝風雲を開く



ミラボー　プレーゼー侯を叱す
（ダルー刻バレー・ブールボン蔵）

知らざりき。

此の危機一髪の際に於て忽ち天才は其の偉大なる光輝を放てり。見よ、ミラボーは忽ちバイイーに代りて陣頭に立ちぬ。大聲疾呼、目前に迫れる危險を掃蕩せり。彼は森嚴犯すべからざる態度にて、屹とプレーゼー侯を睨み、『獅子の鬣』と名づけられたる長髪をうちふり、天にも響く高聲に、得意の雷吼を爲して曰く、『吾等は人の王に勸告したる目的を聽き取れり。貴下は國民議會に於ける王の機關にあらず。國民議會に一の議席をも發言權をも有せざる貴下が、何の權能に依りてか、王の勅語に對し、吾々に注意を與ふることを得んや。行け、而して貴下を送れる人々にいへ、吾等は國民の意志に從つてこゝに在り。銃劍の力に依るの外、吾等は此所より放逐せらる可きにあらず』と。

式部長官避易して退く

ミラボーは此の際他の議員等が共に心中に抱きて、而もこれを口外する勇氣を缺ける所の意志を、直截明晰に放言せるものにして、實に朝廷に對する大膽なる挑戰なり。而して其の反響として『これ議會の意志なり』といふ聲は、忽ち四方に起りぬ。虚禮虚儀に馴れて、自由なる人間の言語を解せざる式部長官の、今かくの如き大膽粗暴とも、非禮非儀ともいひやうなき言辭を聞きて、いかに周章狼狽したりけん。彼は一言をも出す能はず、恭しく目禮して後樣に歩みつゝ、そこ〳〵に退場せり。これは平生ならば、唯君主に對してのみ行はるべき禮法なれど、彼は恐怖の餘り、思はず此の六百の新君主に對し最敬禮を行へるなり。

朝臣再度の小策失敗

こゝに於て朝廷側にては、更に一つの小刀細工を目論見、多くの職人を遣りて、王と傍聽者との席を取片付けしめ、その混雜の中に議事の進行を妨げ、止むを得ず解散に至らしめんとせり。然るに道具を携へて

入り來れる職人等は、直ちにバイイーの一喝に遭ひ、又議員等の緊張せる決意の面貌を見て深く鬼胎をいだき、忽ち靜肅なる傍聽者となりて、道具を傍に置きたるまゝ空しくそこに佇立せり。この時一議員は立ちて、明日更に議會を開き、重ねて王の決意を質さんと提議したるに、一人の贊成者もなく、却つてドーフィネー州の議員バルナーヴは立ちていへり、『諸君は自ら諸君の何たることを宣言したり。何ぞ其の認定を要せんや』と。ペチオン、[2]ビュゾー、[3]ガラー、[4]グレゴアール[5]など相次いで各演説を始めぬ。アベ・シエースはどこまでも彼が平常の冷靜なる學者的態度を以て『諸君は依然諸君が昨日ありし所のものなり。宜しく議事をなすべし』といへり。[6]カミューは曰く、『御前會議に關しては、總べてこれ宰相の間の私事、吾等の知る所にあらず。議會は斷じて其の決議を變ずべからず』といひて、滿場一致の喝采を受けぬ。實際的のミラボーは『議員の身體は侵すべからず。議員の身體に手を加ふる者は最も卑むべく、死刑に値する反逆人なり』との動議を出して、忽ちこれを可決せし

善後策に關する議員等の演說

王忽ちに屈す

めたり。これ實に政府の暴力使用に對して、防禦線を布けるものなりき。

以上の如き議員の一擧一動に關する報告、頻次王の身邊に致さるゝや、王の意志薄弱、大事を爲すなき資質は、この際に遺憾なく暴露せり。ブレーゼーの來りて第三部の解散せざるを告ぐるや、王は數分間默々として歩を動かしゐたるが、忽ち肩を振りて曰く、『よしよし、紳士(メッシュー)等止まらんと欲すれば止まらしめよ』と投ぐるが如くいへり。一旦高壓に依りて時局を解決せんとしながら、一度反對に遇ふや、半途にして忽ち阻止せるは、實に優柔不斷の極なり。然れども此のまゝに終らば、或は却つて王の幸福なりしならん。而も王后及び廷臣等はこれに滿足する能はず、頻りに陰謀を運らし、益〻局面の紛糾を招きたるこそ是非なけれ。

六月二十四日、僧侶部の合同派百四十四人は分裂し、うち二十八人は公然其の部の室を棄てゝ、サル・ド・メニューに赴けり。部室に殘りたる議員は、百十八に對する百三十八の多數を以て、自ら三部會僧侶部の活動

1 Bernave
2 Pétion
3 Buzot
4 Garat
5 Grégoire
6 Camus

僧侶部貴族部の議員續國民議會に加はる

會議なりと決議せり。貴族部に在りては、クレルモン・トンネール[1]より、宜しく第三部と合同すべしと動議せるが、ラリー・トランダル[2]等少數の贊成ありしのみ、忽ち多數の反對の聲に案は葬られ了りぬ。然るに二十五日に至り、僧侶部の大部分は脫出して國民議會に加はり、續いて貴族部に於ても、オルレヤン公以下四十四五人（此の内にナポレオン一世の后ジョセフィン[3]の前夫ボーアルネーもあり）相携へて國民議會に走れり。

ネッケールの首鼠兩端

たゞ自由主義の貴族ラファイエット、リアンクール[5]、ノアイユ[6]、チャールス・ド・ラメート[7]等の依然として貴族部に殘留せしは奇なれど、これ或は貴族部中に特權者反對の分子を殘し置かん策なりしやも知るべからず。

これより先き、ネッケールは辭表を提出して、親臨會議にも出席せざりしが、その晩人民等は彼が邸前に集りて萬歳を唱へたりき。王はネッケールを召して、再び留任を勸めしに、彼は固くこれを辭したり。而して二十五日彼は國民議會に感謝狀を送りしは、まことに彼が首鼠兩端の性格を見るべきなり。

1 Clermont Tonnere
2 Lally Tollendal
3 Joséphine
4 De Beaubarnais
5 Liancourt
6 Noailles
7 Charles de Lameth

二十四日、國民議會は何事をも爲さず、たゞヴェルサイユに議會印刷所を設け、バリー選出のボーデン[1]をして出版を引受けしめ、また新加入の僧侶部議員の資格審査を行へり。

バリーの民情險惡

これらの事件は大いに人民を感動せしめしが、バリーに於ては、例の書生、細民、婦人以外、堅實なる市民の富力ある學力ある階級の人々、みな國民議會援護の決心を爲せり。二十五日既に人民の一揆は、バリー大司教の邸を襲ひ、護衞の兵士は人民に向つて發砲せり。

ヴェルサイユの民情亦險惡

ヴェルサイユにも之に似たる運動おこれり。大僧正ロシュフーコール[2]以下貴族及び僧侶等は、人民等の叱聲を受けぬ。ボーヴェー[3]の司教は頭部に石を投ぜられぬ。國民議會議場の入口には群衆山の如くに集りて、軍隊もこれを制止することを得ず、士官等も部下の信賴し難きを告げたり。議會に於てはバルナーヴの提議により、兵士の解散を要求せり。バイイー、クレルモン・トンネール、及びヴィエンヌの大司教は政府に對し決議を傳へ、人民等の暴行に及ばざるべきを辯ぜしかば、政府は止

1 Baudin
2 Cardinal de la Rochefoucauld
3 Evêque de Beauvais

むを得ず、撤兵せり。この危機に際して王の態度いかなりしかといふに、イギリスの旅客アーサー・ヤングの日記に依るに、王は『ヴェニスのドージュたるか、フランスの國王たるかを決すべき運命の迫れる昨日、狩獵に赴けり』。又當日の王の日記を見るに、やはり平然『昨日は狩獵に行く』と明白に記されしを見る。いかに此の際の重大なる意味の、王の肺腑に徹せざりしかを知るに足るなり。二十六日パリーの選擧人會より派出せられし委員等は、議會に對し頌德表を上れり。この日僧侶部より、オータン司教タレーラン・ペリゴール[1][2]（後のナポレオン一世の外務大臣）來會し、續いてパリー大司教ドジュイニェ[3]以下數人來り加はれり。

王局面の危殆を悟らず

王貴族に國民議會加入を命ず

茲に於てさすがの保守黨も最早不決斷なる王の心を動かす能はず、王は貴族部議長リュクサンブール[4]公及び貴族議員をして、第三部に合同せしむる事を命ぜり。曰く、『余は今一錢をも有せず、軍隊は一揆的精神に感染せり。余は卿等を保護し得ず。余自身の生命すら危險なり』と。リュクサンブール公は、王の此の薄弱なる言葉を聽いて大いに驚駭し、『これ王の口より議會萬能を宣告するなり。貴族は王の爲に身命を惜まず』といへるに、王は『余は何人も余の爲に死するを欲せず』と答へぬ。

1 Autun
2 Talleyrand Périgord
3 de Juigné
4 Duc de Luxaml ourg

國民議會の全勝

翌二十七日、貴族部及び僧侶部は新たなる王の命令につきて議するところあり、止むことを得ず、抗辯の下にこれに服從せり。リュクサンブール公は、國民議會に加入の際、辭令巧みに演說して、自己が王に對し義務を守ることを告げしに、バイイーまたまた辭令巧みに、『茲に貴族部の諸君を迎へ、この幸福の時に議事を休むを喜ぶ』といひて閉會を告げ、王の萬歲を唱へたり。これ國民議會が全勝を得て、形式上の寬大を示す愉快を感じ得たる時なりき。當時實に多數の人士は、これを以て革命は全く終れりと思ひき。焉ぞ知らん、これ終局にあらずして、却つて其の開始たるに過ぎざりしとは。

1 Auch
2 Baron de Lupé

かくして貴族部と僧侶部とは國民議會の一部をなすに至りしも、なほ久しく平民部と區劃を存して離居せしが、いつしか次第に混淆するに至れり。中に一人、[1]オーシュ選出の[2]男爵ド・リュペーは、第三部と合同せざ

ることを以て、貴族としての最大神聖なる義務なりとし、王の命に從はず、全部合同を終りし後、獨り舊貴族部の議場に至り、自席に默座せり。其の後議場の閉鎖せらるゝや、彼は尙毎日來りて議場の廊下を或時間徘徊して、以て自ら慰めぬ。

國民議會は一旦全勝を得たる後、却つて冷靜沈著となり、自ら主動者として必ず改革を成就せんとする決心を顯せり。彼等は先づ新憲法を作ることに著手し、ムニエーを主査として調査を始めしが、一方朝廷側の貴族等はなほ自ら全敗を認めず、密々捲土重來の計を策し、武力を以て國民議會を壓倒する計畫を立てぬ。かくて其の首謀には、[1]ブローリー公ヴィクトル・フランソアこれに任じ、著々實行の歩武を進めたり。彼は勇敢なる舊式の將軍にして、オーストリヤ繼承戰爭に臨みて武功あり、一七一八年に生れて當年正に七十歲、頑冥にしてまた時勢の變化を悟らず、兵卒を機械の如く考へゐたり。彼の密謀は、各地方の軍隊及び外國の傭兵をパリー及びヴェルサイユに集中せしめ、機一度熟すると

宮廷派最後の大陰謀

1 Victor François' duc de Broglie

共に、疾風迅雷的の大活動を起さんとするに在り。この密謀はまづ王弟及び王后に勸められ、次いで王に勸められぬ。但し彼等の反對を恐れて、最後の激烈なる手段は祕して告げざりき。勿論ネッケールには一言も洩らす所なかりき。

軍隊の集中漸く人目を惹く

かやうにして祕密の手配は調へられ、軍隊は密々に屯集し來り、漸くにして人目を惹くに至れり。パリー、ヴェルサイユ兩市の人民は、何となく不安と恐怖との念に誘はれ、人心頓に殺氣立ちて、流言蜚語は巷より巷に飛びて、人民みな悲憤の色あり。議員等も自分等の何時捕縛投獄せらるゝかを知らず、心中頗る安からざりき。

國民議會軍隊撤退を要求す

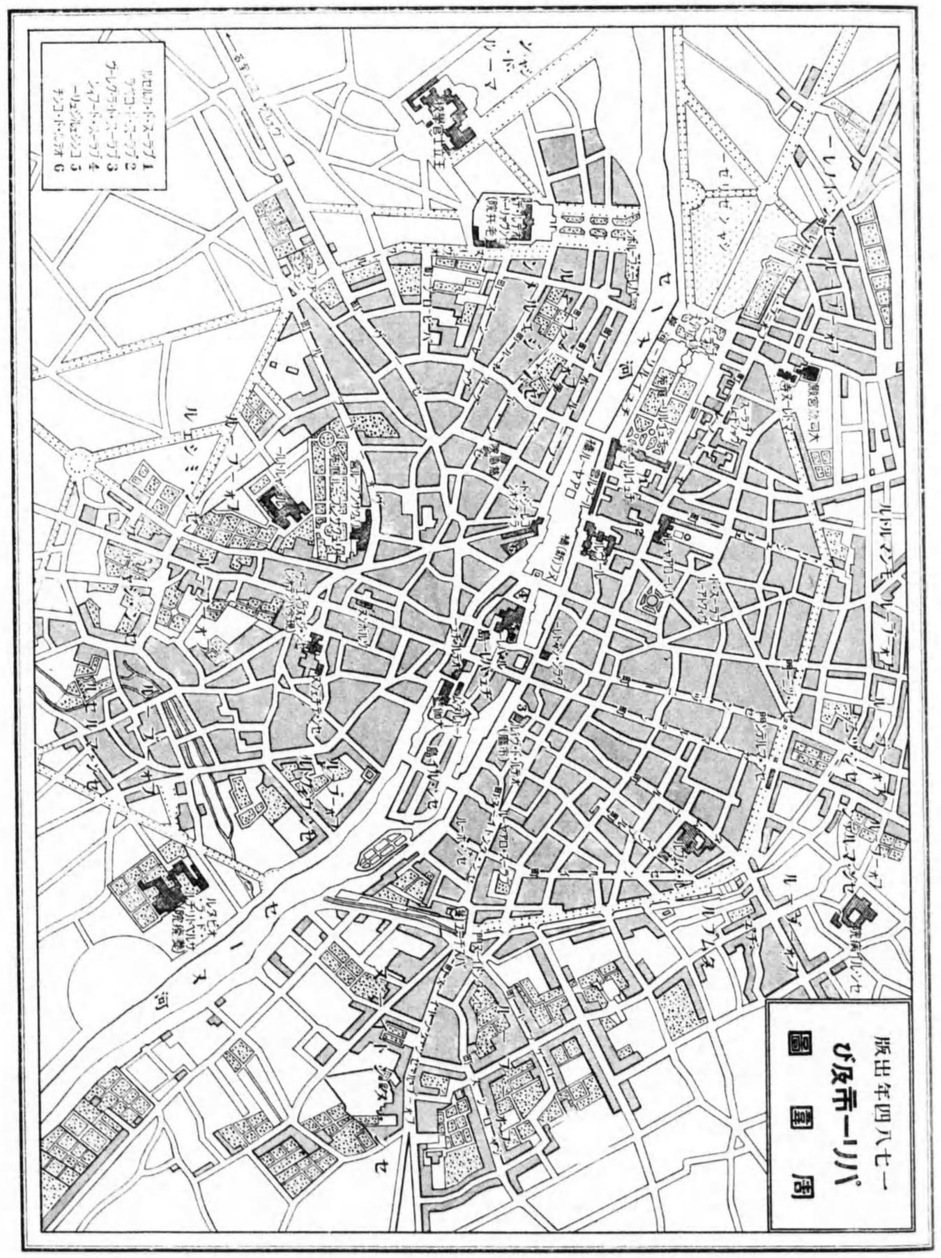
既にして七月九日、國民議會よりミラボーの決議として、委員を王の許に送りて、『かく無用に兵を集中するは、王と議會との間の信賴心を失ふ以外に利する所なし。速かにヴェルサイユより軍隊を退けられたし』との意を建白せり。王は十日を以て答へて曰く、『先日よりパリーとヴェルサイユとに不快なる暴動續發せるは、皆人の見るところなり。余は

余の權力を用ひ、國都及びヴェルサイユの秩序を正す必要ありと認む。これ公安に對する重大なる義務なり。國民議會に保證せよ、この非常手段は新たに起らんとする一揆の暴動を鎮撫し、秩序を維持して、以て議事の自由を保護せんとするに外ならざる事を。若しパリー及びヴェルサイユ附近に軍隊を集中することが、却つて以前よりも騷動を繁くする憂ひありとせば、議會をノアイヨン[1]又はソアッソン[2]に移さん、而して余もコンピエーヌ[3]に至り、議會と交通の便を計らんと欲す』と。

ネッケール復免ぜらる

然るに、七月十二日ネッケールは卒然として職を免せられ、ブローリー[4]は陸軍大臣兼パリー附近軍隊總司令官に任ぜられ、老いたる朝臣男爵ド・ブルチューイ宮内大臣に任ぜられぬ。今や朝廷は果して假面を脫せるが、議員等は却つて爲すところを知らざりき。而して此の危機に於て、先づ起ちて自由の選手となりしものはパリー市民なりき。

1 Noyon
2 Soissons
3 Compiègne
4 Baron de Breteuil



第五章　革命初期に於けるパリー

一　革命當時のパリー及びパリー人の狀態

中央と地方

フランスの歴史は中央集權の歴史なり。而して政治上の中央集權は地理上の中央集權に應じ、歴代の君主は、地方の勢力を殺ぎて、パリーの勢力を張る事を努めたるが、殊にルイ十四世の時代に於て、中央の勢力は絶頂に達したりき。卽ちパリーはフランス全國の首腦にして、フランスのパリーか、パリーのフランスかを疑はしむる狀勢にあり、パリー人民の位置は、從來の歴史上嘗て、見ざる絶對のものとなれり。

地方人の無氣力

彼のイギリス人アーサー・ヤングは、一七八九年七月十五日、[1]ナンシー市に於て、ネッケール免職の報に接したる際、同市の主なる人々と會して談話を交へたるが、彼等は一同に曰く、『吾等は一の地方市民に過ぎず、吾

1 Nancy

等は何がバリーに爲さるゝかを靜かに待望せざるべからず』と。ヤングはこれを以て地方一般の感情を代表するものとなしたるが、他の多くの憑據は、彼の斷案の誤ならざるを證せり。

一般農民の無理解

然れども當時ヤングに對し如上の言をなせる人々は、多少とも位置あり見識ある人物なるが、それすら斯く獨立の意見なかりき。況やその他の人、殊に一般農民等に至りては、かの選擧會開かるゝに及び、始めて自家の周圍に變動しつゝある空氣を感じたるのみ。從來漠然人口に傳へられたるところを妄信または誤解して、時勢を救濟すべき偉人等の一群が何處にか相集りて、彼等のために働きつゝあり、今に見よ、租稅は滅ぜられ、賦役は廢せられ、吾等は共に幸福を樂むを得んといひて相慶し合へりといふ。しかも此のいはゆる偉人等が、如何なる形式によりて彼等の爲に活動し、如何なる手段、如何なる方法を用ひて彼等の幸福を全うせんとしつゝあるか、一向に知る所なく、また知らんとも努めざりき。獨りバリーは古よりして氣慨あり覇氣ある青年の四方より來り集る所にして、學者、美術家、政治家、音樂家、俳優等、總べて富と名譽とに憧憬する者は、相競うてこゝに功名の地を求めたりき。從つてバリー人は、その文化の精神に於て一國の首都たるに恥ぢざりしなり。

バリー市街の狹陋汚穢

然れどもバリー市そのものの外觀は未だ多くいふに足らず。今日のバリーを見るものは、一樣に世界の都として其の華美を稱すれども、革命時代の當時に在りては、さしも世界の花の都も、また今日の歐洲諸國の地方都市の狀況にすら及ばざりき。例へば、その街衢は錯綜して狹陋に、往來は平坦ならずして、到る所陷沒あり、泥土多くして、歩行に不便なり。加之、人道車道の區別ある所は極めて稀にして、汚泥塵芥、道路の上に秩序なく累積せられ、一旦雨雪降れば、一面に河の如く湖の如く縱橫に氾濫し、辻々には貴女紳士の、靴の踵をあげて歩み惱む者を見る。

行人車馬の絡繹を極むる大通（ブールヴアール）[1]や、最大のシャンゼリゼー[2]大路すら今日の如くアスファルトには非ず。往來の監督不行屆なれば、シャンゼリゼーの大道に、羊を飼ふ者もあり、又所々の廣場、及び大通の街上に舞踏會を

1 Boulevard
2 Champs Elysée

催す事ありしが、殊にシャンゼリゼー及びバレーロアヤール（前出オルレアン公邸内）前の通にては、屢〻行はれて、通行の妨げをなす事少からず。又何處の街上にも所構はず床店あり、各簡單なる飲食店、酒場にして甚だしく往來の妨礙を爲せり。而して此の狹隘なる往來の間を貴族の馬車は、遠慮會釋もなく泥を飛ばして疾走せり。メルシエーの文に曰く、『パリー人は輕快にして、往來を歩むにも悠々たらず、小刻みに疾行する風あるは、幼少の時より、水溜や車馬の飛沫を避け、または階段をかけ上る習慣ありしが爲なり』といへり。或人は『パリーの婦人の動作輕快洒落なるは、常に其の纖足を活潑に働かし、泥濘の間を巧みに飛歩く習慣より得たる巧技なり』との秀句を吐けり。又晴天のパリー市街は紅塵萬丈、掃除人夫はあれど、懶惰にして其の職責を竭さず。公園その他にも共同椅子の設あることなし。往來に撒水し、また椅子を設くること、漸く一七八九年七月より始まりて、當時大いに公衆の滿足賞讃を博せり。

往來の取締不完全

かゝる有樣なれば、場末の貧民窟に至りては、汚穢愈〻言語に絶し、惡臭

1 Mercier

場末の貧民窟

鼻目を蔽はざるを得ざりき。而して郊外よりパリー市内に入る人は、必ず其の不快を忍びて此の貧民區を通過せざるべからざりき。

夜のパリー市

パリー市は夜間點燈を爲す事に關し、歐洲各市に先鞭を著けたり。即ち一五二四年政府は令して、各戸の窓に燈を出さしめ、一五五八年初めて街燈を設け、一六六七年に至り、遂に全市を通じて之を設置せり。然れども十八世紀の末に至るも其の數は甚だ少かりし上、種油の燈器を用ふることなれば、光力甚だ微弱なるを免れず、重なる街衢には兩側に店舗ありて、燈火を點じたれど、物價騰貴のため、日沒後は店を閉ぢたるが多し。政府は出火を恐るゝため、點燈の數を減少することを命じたるが、之に依りて却つて盜賊の橫行に便利を與へたり。

市民の狀態

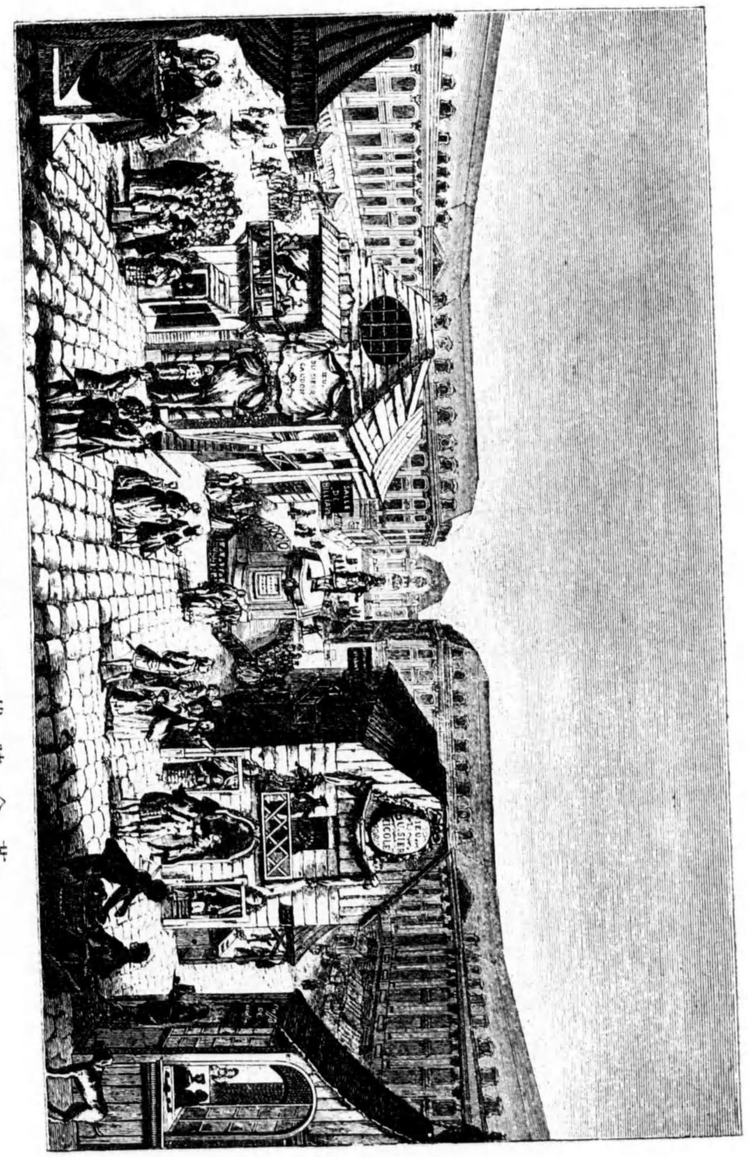
パリーははじめ二十一區なりしが、一七八九年の選擧以來、六十區に分れたり。行政機關としては市會あり、參事會あり、後、選擧會成るに及びて、いよ〳〵行政の中心となり、大いに勢力を振へり。革命當時の人口は六十萬人、人民の多數は無智無敎育にして、殊にフランス人の弱點

を極端に代表せり。卽ち彼等は、何事にも考慮を費す所なく、一時的の感情に依りて輕擧妄動し、激し易く醒め易く、政治家の雄辯に魅せられては、今日忽ち彼等を神の如く崇拜すれども、明日は忽ちにして彼等を惡魔の如く厭惡することあり。かくの如きは、何國にても下層細民の常習なれど、フランス人の輕燥は殊に甚だしく、而してパリー人は正しく其の極端を代表せるなり。

パリーの風俗

パリーの外觀のかく不完全亂雜なりしに似ず、內部の華奢は却つて今日に讓らず、或點は寧ろ優れりといふべし。唯生活上の便宜と安樂の設備とは素より今日に及ばずして、宮廷も電氣、瓦斯の設備なければ、專ら蠟燭を用ひたり。服裝はルイ十六世の時代には却つて今日よりも華奢贅澤を極め、男子の禮服は寬濶優長なる仕立にして、女子の頭髮は異常に大型に作られ、恰も山車の如く、紈、ガーゼ、造花等の飾を以て盛上げ、或は巨大なる帽子を被り、或はこれを軍艦の形に作れる者すらあり。その頃の漫畫には、此の婦人風俗を諷刺の材料に用ひて、女の髮の

巨大なる婦人の髮飾



斑一の街市一リバ代時命革

——畫生寫場市大のーイヴト・シセ(場廣王大イル)シラヴル・イル・スーラブ——

裡に様々の品物を入れて密輸入を企てんとして發見せられ、熊手にて引出す様などを描けるがあり、すべて髪の中に假髪を入れて大きくふくらませたるものを賞美せしゆゑ、舞踏の際燈燭の火の髪に燃えつきて火事を出せる所を描ける漫畫などの殘れるを見たり。

婦人の髪中に密輸品を隱す(戲畫)

革命の初期に當りては、貴族以下却つて著しく簡單平易を尚ぶ風ありき。之はアメリカに新たに興れる民主主義崇拜の影響にして、嘗てアメリカの使節ベンジャミン・フランクリンがフランスに來りて遊說し、援助を求めし時、學者として、民權家として、非常なる尊敬愛慕を受けしが、その質素簡朴なる服裝一時大い

にパリー人を感動せしめ、相競うて彼が服裝を模倣するに至れるなり。

この風朝廷の人々にも傳はり、高官等が退朝の時は、態と外套にて深く勳章の燦爛を隱す消極的虛榮すら行はるゝに至れり。かのイギリス旅行家ヤングは、途中パリー人が黑の靴下を用ふるを見て、其の理由を往來に汚泥多きが爲なりと記せるは誤解にて、これ亦彼の質素簡朴を誇示する時尚の一なりき。從前は大貴族は數頭の馬に牽かしむる美麗なる馬車を用ひたるに、今や之を廢して專ら二輪一馬のものに乘れるも、また此の平民主義の反映に外ならず。又頭髮に白粉を振掛くること廢れて、反つて毛を短く刈込む風俗起り、外出には從來の如く劍を佩かず、杖を携へ、當時下層階級の人民のみ用ひたる長き袴を穿つ者さへあり。かくて膝以下に及ばざる短きズボン(キュロット)[1]に、長き靴下を穿ちし十八世紀風追々に廢れ行かんとし、服色も華美を避けて質實に就き、黑、紺、黑褐の色を賞用したり。

平民主義の流行

婦人の帽は依然巨大なりしが、その頭髮は追々に小さくなりぬ。殊

1 Culotte

にロー[1]ラン夫人のごとく、自由主義の新婦人と目ざゝれしものは、服裝身に締りて宛然男子の如く、且頭髮をも短く刈れる者あり。又男子の多數と同じく髮に粉を振ることを全廢せる者少からず。元來フランス婦人の間には、頭痛、齒痛の折など、我が卽效紙に似たる黑色の小布片を顳顬又は頰に貼る風ありしが、白晳の皮膚の上の黑一二點、意外に著しく容貌の美を引立つるより、漸く「ムーシュ」[2]とて黑き布片を顏の諸所に貼布することも流行し、ルイ十五世時代に最も盛んにして、權勢家の子女の中には、花蝶などの形を作りて顏に貼れるものもありしが、今や一般平民主義の風俗流行の爲に、此の「ムーシュ」貼布の事も廢れたり。

婦人間の流行

朝廷及び大貴族は、最後まで舊思想を墨守せるに拘らず、彼等も亦追追に此の外部的流行に屈服するに至りしが、特に民主主義を了解せず、人道の深き考もなき貴族にして、領內の人民に對し頻りに慈悲憐憫を加ふることの流行せるも、是又民主主義傳播の結果なり。卽ち彼等往來に農民の荷車が倒るゝを見ては、馬車より飛降りて、從者と共に手づ

1 Mdme Roland
2 Mouche(Patch)

偽善の風

から之を扶け起しなどして、後に此の事を友人間に吹聽し、以て自慢話の種とせり。又保守主義の中心となりたる王后は、ヴェルサイユなるプチ・トリアノンにて農家生活の模倣をなし、自ら侍女等と共に農婦の服を着て、牛乳を搾りなどして樂みたり。時には眞箇の農夫を伴ひ來りて、共に舞踏せることもあり。但しこれは彼等高貴の夫人の前に恐縮して、狼狽顚倒し、或は無器用に跳躍する樣を相見て、笑ひさゞめくのみ、素より心から彼等の境遇を憐み慰めんとにはあらず。然れども斯る光景は、ルイ十五世時代には決して見ることを得ざりし所なり。かのヤングが、ヴェルサイユの王宮を拜觀せる折、むさくるしき服裝したる農夫等が自由に殿內に出入し、或は物を賣りなどせるを咎むる者なきを見て、いたく驚けりと記せるも、皆此の虛僞の寬大を示せるのみ。

禮式はフランス人の事とて飽までも之が保存に努めたれば、ネッケール夫人の家に出入せる民權家の語れる語氣などをスタエル夫人の筆記に徵するに、餘りに馬鹿丁寧に過ぎて輕薄なる諂諛の如く、今日の貴

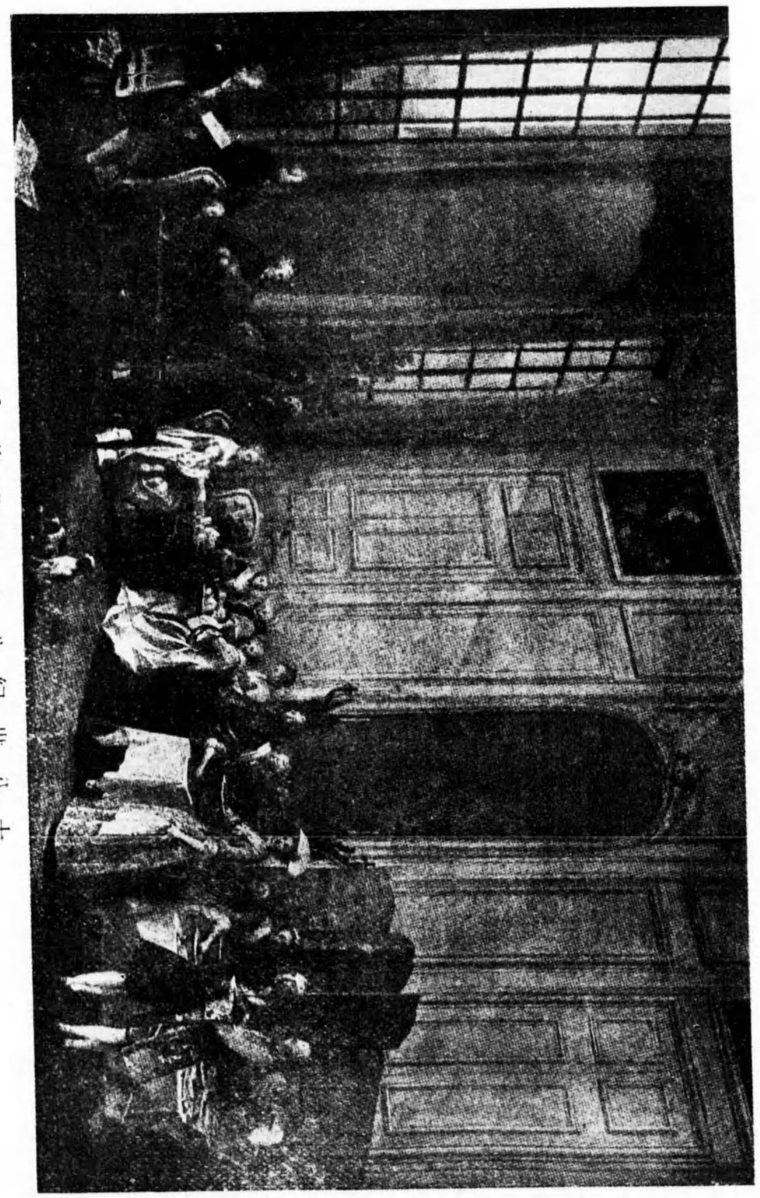
1 Petit Trianon

極端なる貴婦人の儀禮打破

婦人ならば、却つて之を不快に感じて憤るべしと思はるゝ程なりき。

然れども此等以外の事に至りては、一般に舊風を脫せんとする風あり。何事にも自由開放なるを良しとし、時に吾人をして一驚を喫せしむる如き記事を發見することあり。在パリー、アメリカ大使[1]モリスの日記に據れば、大使が、ド・ラ・シューズ[2]伯爵夫人を訪問せる際、侍女は客に對ひ『夫人は今着替をなしつゝあり、されど何の差支もなく候』といひて、夫人の居間に案內したり。夫人は着物を着替へながら『モリス君よ。妾の化粧することを許し玉ふや』といへるに、モリス『何卒御構ひなく遊されよ』と答へたれば、夫人は客の面前にて衣服を脫ぎ、新しき衣服と着替へて、だゞ下著をば小蔭に隱くれて著たるのみなりき。次いで六月二十五日、モリスまた約束により、フラオー[3]夫人を訪問せる時、夫人は客と談話しつゝ、至つて無邪氣に、下著を着替へたり。十一月八日、再び夫人に逢ひし時には、夫人は入浴しつゝ客に面會せり。たゞ湯に牛乳を入れたるため、不透明にして肉體は見るに及ばざりしのみ。かく入浴中

1 Morris
2 Mdme Comtesse de la Suze
3 Mdme Flahaut



會茶のンロサ紀世八十
——藏ルヴール・畫ーエイヴリヨ——

婦人が異性の客に逢ふは常の事なりしなり。フラオー夫人は美にして才氣あり、好んで客に接し、タレーランその他の人々とも交際せりといふ。これにて形式打破の當時の風潮が殆ど吾人の想像以上なりし事を悟るべし。

二　社交機關と新聞雜誌

サロン生活

上等社會に於ては、[1]サロン生活盛んに行はれぬ。然れども倶樂部、咖啡店及び新聞の追々流行するにつれて、また前日の勢力なかりき。

サロンとは客間の義にて、主人夫婦がサロンを開きて、定日時に友人の自由來集して談笑するを主とする生活を卽ちサロン生活と名く。サロン生活の始まりしは、マザレンの時代にして、ルイ十五世の時に其の全盛を極めたり。貴婦人は常にサロンの中心にして、その周圍に各種階級の人物を吸集せり。その中には名ある文士美術家も交りて、話題は文學、美術最も榮え、哲學、理學も談ぜられき。ルイ十六世の初世に

1 Salon

は、經濟問題興味ある話題となり、また催眠術、千里眼の議論も花を咲かせたり。一七六〇年後には政治問題代りてサロンを賑はしぬ。サロンを掌る主婦の人物、思想に依りて、會合する人々の人物、思想も截然として分れぬ。

守舊派のサロン

革命の初めの頃、パリーの守舊主義の集團として聞えしは、シャンボナ[1]夫人、サブラン[2]夫人のサロンなりき。シャンボナ夫人は名高き朝廷方の人にして、常に第三部の議員を罵りて快としたり。賭博は彼等の間に盛んなりき。これとは異なりて稍上品なる保守黨の集團は、サブラン夫人のサロンなりき。こゝに集る重なる人物の一に、フィリップ・セギュール[3]侯あり、侯の家は代々宰相を出せるが、フィリップは陸軍武官としてロシヤに在り、風丰閑雅なるを以てロシヤ女帝カザリン二世の寵遇を受け、イギリスの勢力を抑へて、大いにフランスの利益を振張せり。これがため交際社會の人氣を集めたれど、自家の財産を蕩盡するに至りぬ。一七八四年歸國して後、弟アレクサンドル・セギュール子爵の紹介にて、サ

1 Mdme de Chambonas
2 Mdme de Sabran
1 Philip Comte de Ségur

ブラン夫人のサロンにも出入するに至りしなり。弟子爵は兄侯爵の如き政治的才能なく、文藝を好みて劇詩を作り、才貌を以て交際社會の花形たりき。

セギュール侯に次いで交際社會に名ありしは、ブフレー[1]なり。この人もと僧侶の出身にて、應對圓轉の妙を極めしかば、いたく朝廷の間に人望ありしが、王后に戀するに及びて、終に朝廷を逐はれ、セネガムビヤ[2]の知事となりてアフリカに左遷せられしが、後歸國を許され、ナンシーの貴族部議員たり。また一代の風流才子として聞えたりき。

すべてこれ等の人々の集合するサロンは、保守黨ながら風雅に品格高き貴族を集めたり。これに對して新進氣鋭の貴族は、ネッケールの家を中心として集りぬ。こゝには交際上手の夫人の外に、才色兼備のド・スタエル夫人あり、一家はスウィスの新教徒にして、自由主義を信奉し、母娘共にネッケールをフランスの救世主の如く信じ、ネッケールの爲に、その崇拜者後援者の群を其のサロンに吸收するに努めき。從つてネッケー

ネッケール夫人のサロン

1 Boufflers
2 Senegambia

ネツケール夫人

ルの反對者は、このサロンの反逆者として取扱はれ、ミラボーの如き自由主義者も排斥せられたり。而して學者文人は大いに歡迎せられ、スウィス新教徒の名士の來り集る者も多かりき。ネッケール夫人は、その夫が國民議會内に人望を收むる必要あるを知りながら、却つて其の議員をサロンに迎ふる事を敢へてせざりしは奇なりといふべく、議員としては野なる政治家の客を悦ばず、暗にネッケールの競爭者を斥くる態度を取るに至りしなり。

オルレヤン公一味の人々の集會所たりしはジャンリ[1]夫人のサロンなり。この夫人は、もとオルレヤン公の家庭教師にて、唯物論の信奉者な

ジャンリ夫人のサロン

1 Mdme Genlis

りき。これに對し、嚴肅なる舊教信者なりしは、オルレヤン公の媳ド・シャルトル公爵夫人の老女ビュフォン夫人にして、却つて此の一團の人々を喜ばず。夫人はさすが放縱なりしオルレヤン公も眞摯の愛を捧げし婦人なりしが、信仰篤き人なりしがため、却つてオルレヤン公の一味を斥けて、若き文人にして、公に好意を有する者を、サロンに集めて歎待せり。かの革命の文士カミール・デムレンの如き、また嘗て此の夫人がサロンの客たりき。

ビュフォン夫人のサロン

ド・ブローリー夫人のサロン

ド・ブローリー夫人のサロンには、自由主義の人々多く集れり。バルナーヴ、ラメート、ノアイユ子爵、デーギョン公爵等みな其の客たりき。當時急進主義のド・ボーアルネー夫人、タルマ夫人、マドモアゼル・ド・テロアニュ・ド・メリクール等の婦人も、亦各そのサロンを開きゐたり。此の内、ボーアルネー伯爵夫人の家には、百科全書派の遺擘も集りゐたるが、また三部議員中のバイイーを始め、アベ・マブリー、ヴィックダヂール、ラボー・ド・セーンテチエンス等自由主義の名士も來會したりき。また貴族には主婦の娚アレクサンドル・ボーアルネー（ナポレオンの后ジョセフィンの先夫）及び元プロシヤの男爵にして、後過激派の壯士頭となりしジャン・バプチスト・クローツなども來客中にありき。

ボーアルネー夫人のサロン

タルマ夫人のサロン

ジュリー・タルマ夫人は、フランス喜劇座（コメデー・フランセーズ）の名優タルマが妻なり。こゝにも多くの學者文人を集へ、悲劇作家シェニエー、批評家デュコス、畫家グリューズ、化學者ラヴォアジール等の名家あり。彼等は演劇藝術の談話の間に、政治談の花を咲かせゐたり。

テロアニュ・ド・メリクール嬢のサロン

革命騷動には數名を出だせる有名なるテロアニュ・ド・メリクール嬢（マドモアゼル）は、女流革命家中の白眉なり。彼女はベルギーのリエージュ生れの美人にして、パリー花柳婦人の頭株なりき。嘗てロンドンに在り、後パリーに歸りて、極端革命派の人物と交遊せり。かのミラボーの如きも、上流社會の家庭に容れられざりしがため、去りてルジェー夫人の家に往き、また時々このメリクールがサロンをも訪れきといふ。その他、代議士ペチオン、タルジェ、ポプリュース、マクシミリヤン・ロベスピエールなど、また此の

1 Duches Se de Chartre
2 Mdme Buffon
3 Du d'Aiguillon
4 Mdme de Beauharnais
5 Mdme de Talma
6 Mademoiselle de Theroigne de Mericourt
7 Abbé Mably
8 Vicq d'Azyr
9 Rabout de Saint Etienn

1 Alexandre Comtesse de Beauharnais
2 Jean Baptist Cloots
3 Julie Talma
4 Chénier
5 Ducos
6 Greuze
7 Lavoisir
8 Liège
9 Mdme Lejay
10 Maximlian Robespiêrre

婦人が家の客たりき。テロアニュ・ド・メリクール嬢は、實に平生パリー花柳婦人の間に勢力を揮へるのみならず、また女壯士の一團を率ゐ居たり。革命運動の裏面に在りて、この婦人の活動の認むべきもの尠からざりしを記憶せざるべからず。

サロン衰ふ

以上の外、サロンを開ける名流の婦人は、その數尠からざりしが、要するに、サロンは總じて漸く流行の末に在りき。その理由いかにといふに、政爭追々劇烈に赴くに隨ひ、サロンに集れる人々の間にも睽離を生じて、互ひにその鋒鋩をつゝむに堪へず、況や新進の政客、前身素行修まらざるもの多く、禮節に嫻はず、よく交際社會の應酬に堪へざりき。是に於てこれに代れるものは俱樂部なり、珈琲店なり。各俱樂部には特別の會館を有するあり、珈琲店の一室を借りて會場と爲すあり、これといふ所を定めず、隨所に自由なる會合をなせるあり。俱樂部はもとイギリスの風に倣ひて起りたるものにして、階級の區別なく、初めは政治的色彩なく、文學を談じ、社會の時事を話題とせり。『リセー』[1]俱樂部はコ

俱樂部と珈琲店

1 "Lycee"

ンドルセーその牛耳を握りき。

ブリッソーのソシエテ・デ・ザミ・デ・ノアール[1](黒人の友の會)は、その名の如く黒人の救濟を目的とする集會なりき。

革命の開始と共に、數多くの俱樂部は一時に勃興して、到る所盛んなる時事の討論所は開かれぬ。たとへば、クリュブ・ブルトン[2]は、ブルターニュ州選出の代議士の集會所にして、國民議會の開會せらるゝや、セン・トノレー町なるドミニカン派の律院セン・ジャコブ[3]の一室を會場とせしより、クリュブ・デ・ジャコベン[4]と名けたり。これ彼の有名なるジャコベン俱樂部の起原なり。初めはクリュブ・デ・ザミ・ドゥ・コンスチチュシオン(憲政の友の俱樂部)[6]といひ、議員以外にも會員たりし者ありき。然るに小俱樂部は追追大なる俱樂部に吸收せられ、終にもとはその一部に過ぎざりしクリュブ・ジャコブが、最後に、ジャコベンの名を獨占するに至りしなり。革命の初めには、これ等の俱樂部は重に餘裕ある中等社會の會合所にして、貴族にも下等社會にも俱樂部なきにはあらざれど、大いに勢力を振ふには

ジャコベン俱樂部の起源

1 Société des Amis des noirs
2 Club Breton
3 Rue St. Honor
4 Dominican
5 St. Jacob
6 Club des Amis de la Constitution

至らざりき。

ソシエテー

中等以下の人民は、別に平民的なるソシエテー[1](會合)を組織し、貧民長屋の階上、または往來街上所を擇ばず、貧窮の學生、理窟好きの職工等集りて演說をなすものあり。また姉人にして街上に立ち、王后及び政府に對し彈劾の演說を爲すものあり、周圍には婦人の聽衆垣を作れり。職工が工場主に對し賃金値上を相談し、或は麵麭商の燒討を相談するものあり、中等社會の人々も時に此の會に集り來りて、これを利用せんとするものあり。又各區の選擧人會は一の勢力となり、從つて各區に

選擧人會

中等社會の會あり。選擧人會は主要なる區にては純粹なる選擧所有者の會合にて、專ら中等社會より成り、國民議會に向つて初めより同情を傾けゐたり。

フォーブール・セン・マルソー、フォーブール・セン・タントイーヌ[2]の如き場末[3]の貧民窟には、選擧權の有無に拘らず、江湖不平の徒多く集り來りて、細民の出身地となりたり。殊にフォーブール・セン・マルソーには、ジャコベン

1 Societé
2 Faubourg St. Marceau
3 Faubourg St. Antoine

俱樂部の支部なるコルドリエー[1]あり、ダントンをはじめ、後のアンラジー・ジャコベン(憤怒ジャコベン)[2]の徒勢力を得、一揆の製造所となれる所なり。

珈琲店の光景

パレー・ロアヤールの內庭も廣くして、珈琲店、酒場等に圍繞せられたる便利あると、野心あるオルレアン公の邸內なるとのため、こゝもまた一揆の噴火口とはなれり。

珈琲店はパリーの特徵なり。これは廣き意味の中等社會の集會所にして、その日の新聞を讀み、時事を談論するのみならず、手輕に用談をも辯ずる所とせり。或は時間を消すために、ドミノを爲し、賭博を爲すものもあり。以前は酒店のみなりしが、手輕ならざると醉客を出すことをおそれ、ルイ十五世の時、パリーに六百の珈琲店を作りき。來客はさすが紳士なれば、外面の禮儀を失はず、喫煙を愼み、酒もあまり嗜まず、菓子とコーヒーとを喫し、靜肅なるに勉めたり。

此の外專門の酒店あり、その設備に上等なるものと下等なるものと

1 Cordeliers
2 Jacobin Enragés

あり。『ギニエット』[1]と稱するものは、重に天幕張の小屋にして、内部に荒けづりの長き卓と腰掛とを備へあり、天幕の中央には舞踏場ありき。樂隊は絶えず賑かなる樂音を立てゝ、ヴァイオリンや笛の音樂を奏しゐたり。郊外のギニエットは或は樹木にかこまれ、天井は樹の柵にて作られ、家の構造手廣きものあり、これをクールチル[2]といへり。樹木を植ゑたる場所の意味なり。王后マリー・アントアネットは、嘗て王弟アルトア伯に伴はれ、人目を忍びてこゝに微行し、一生にかやうなる愉快を經驗したることなしといへり。この際人々皆彼女の王后なることを知れど、その微行なるを尊重し、素知らぬ顏して過したり。然れどもこれはた後に、不謹愼として王后が世人より指彈せらるゝ一原因に數へられぬ。

ギニエット

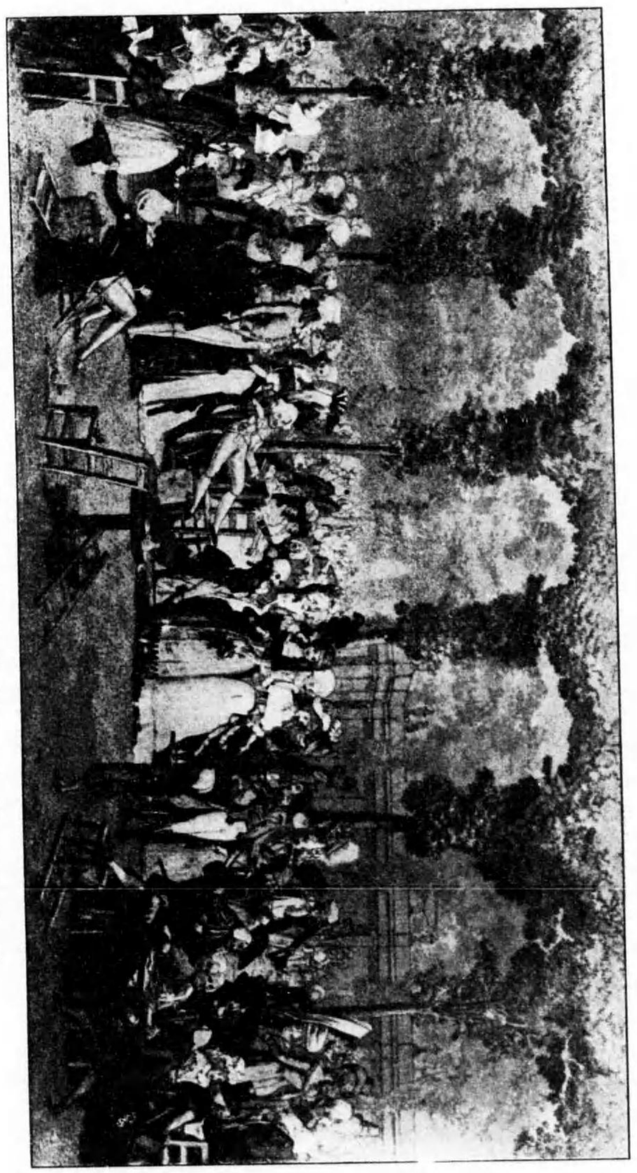
新聞と中等社會

これらの集會以外、世間の出來事を知らしめ、輿論の勢力を知らしむるに屈強の機關となりしものは、新聞の雜報なり。

フランス最古の新聞

大宰相リシュリューの時代に政府の保護を得たる『ガゼット・ド・フランス』[3]（フランス新聞）はフランス最古の新聞なりき。其の社長ルノーデー[4]は、センジェ

1 Guignett
2 Courtil
3 Gazette de France
4 Renaudet



遊女の民市ーリバる於に庭内ルーヤアロ・ーレバ

革命初期のパリー細民風俗

流しのギター彈き
鯉や鯉
帚屋
提燈賣

流しのヴァイオリン彈
燈！(冬)水！(夏)
石竹の花賣
幻燈屋

氣付け！氣付け！
珈琲はいかゞ
當り籤番附賣
研物屋

プロヴァンスの樂師
木挽
桶屋
風車賣

畫像賣
金物屋
鼠捕り
乳賣娘

ピラ貼り
繡直し
薪賣
ギター彈きの少年

盲人院の盲人
靴直じ
風琴屋
紐賣

ルマンにてこれを發行せるが、その子息をパリーに止めて、別に正反對の主張を有する『クーリエール・フランソア』[1](フランス急使)を發行せしめたり。卽ち一社主にして全く反對主義の二新聞を發行せるにて、かゝることゝ外にも例多し。當時リシュリューに反對するフロンド黨は壓伏せられて政府萬能なりしことは、新聞の自由發展のため不利なりき。『メルキュール』[2](傳使)の如き、偶まルイ十四世時代に出でたれども、寧ろ文學的雜誌なりき。ルイ十六世卽位して、人々政治の刷新を思ふに至り、爭つて自己の思想を發表するを競ひしが、なほ未だ新聞の勢力に依らず、頻りに單行本を著して世に薦めぬ。しかれども新聞もまた用を爲さゞりしにあらず。『アンナール・ポリチーク・エ・リテレール』[3](政治及び文學記錄)の主筆ランケ[4]は其の名一時に高かりき。三部會開會とともに、一般に政治思想勃然として起り、政談盛になるに及び、政治を專門とする新聞も大小數種出でたり。ミラボーが主宰せる『レター・ジェネロー』(三部會)は、三部會及び其の議事の批評を載せたるが、發行禁止の厄に逢ひて『レットル・ア・メ・コンメッタ

1 Courière François
2 Mercure
3 Annales politiques et literaires
4 Lanquet
5 "Lettres à mes Commettantes'

ン』（我が選擧者に送る書簡）と改題せり。彼はまた後に、『クーリエー・ド・プロヴァンス』（プロヴァンス州急使）を出せり。ミラボーは元來人が演説を爲さんとするに當り、これがため喜んで材料を供給せんとするもの尠からず、新聞の事業もミラボーの名の下に爲されたれども、實は部下の無名なる記者の熱心なる努力に成れること多かりき。ドゥロヴレー及びエチエンヌ・デュモンの如きは其の人々にて、みな優れたる一代の文才なりしが、後ミラボー此の人々に一任して新聞の事業と離るるに及び、急に讀者の數を減ぜしかば、ミラボー再びこれが管理者となりぬ。

ヴォルネー

コンスタンテン・フランソア・シャスバフ・ド・ヴォルネーは、一七八五年『シリヤ旅行記』を著して名聲一時に揚りし人なるが、一七八七年レンヌ市に『サンチネル・ド・ピュープル』（人民の番兵）といふ新聞を發行して、大いに歡迎せられたり。その後ヴォルネー三部會の議員となりてパリーに來りし後は、復自ら新聞を經營せんともせず、『メルキュール』及び『クロニク・ド・パリ

1 "Courrier de provence"
2 Duroveray
3 Etienne Dumont
4 Constantin François Chasseboeuf de Volney
5 "Voyage en Syrie"
6 Rennes
7 Sentinelle de peuple
8 "Chronique de Paris"

初期民主主義の好材料

ー』に、文學的寄稿をなすに止まれり。

革命初期の民主主義發展の歷史を知る好材料は、『ポアン・デュ・ジュール』（毎日要領）といふ日刊新聞なり。代議士ベルトラン・バレール・ド・ヴァンザックの發行にかゝり、初めは寧ろ立憲王政主義を主張せしが、中頃より共和主義と變じたり。

ブリッソー

後にジロンド黨の巨魁なりしジャン・ピエールは、前述の諸記者よりも名聲高き人なるが、彼は一七五四年シャルトルに生れ、父は富める旅店の主人なり。ブリッソー、パリーに遊學して教育を完成し、一七八二年『テオリー・デ・ロア・クリミネル』（刑法論）を著して忌諱に觸れ、バスチーユ獄に投ぜられしが、放免後アメリカに渡り、ワシントン、ジェッファーソン等の名士と交り、後イギリスに移りてロンドン郊外のピムリコに住み、マラー以下の民主主義のフランス人と交篤く、テヴノー・ド・モランド及びスウィントンと共に『クーリエ・ド・リューロープ』（歐洲急使）を同時にイギリスのロンドン及びフランスのブーローニュに於て發行

1 "Point du Jour"
2 Bertrand Barère de Venzac
3 Jean Pierre Brissot
4 Chartres
5 "Théorie des Lois criminelles"
6 Pimlico
7 Theveneau de Morande
8 Swinton
9 Courrier de l'Europe
10 Boulogne

し、イギリス人にフランスの政治を、フランス人にイギリスの憲法思想を注入せり。この新聞は大いに流行したるが、ブリッソーの名を一層高めたるは、この後一七八八年の『ソシエテ・デ・ザミ・デノアール』[1]（黒人の友の會）創立の一事なり。これはロンドンにて、イギリス人ウィルバーフォース[2]以下の

黒人の友の會

ブリソー

名家を其の會員に羅致せしが、後年純然たる政治倶樂部となりぬ。ブリッソーは、一七八九年又『パトリオート・フランセーズ』[5]（フランスの愛國者）を發行し、一時禁止せられしが、七月、後再びこれを續刊せり。これ今日に於て、ジロンド黨の溫和共和主義の發達を繹ぬる好材料となれるものにし

1 Société des amis des Noirs
2 Wilberforce
3 Society for the abolition of Slavery
4 Clavière
5 Patriote Française

て、その黨の人道主義、平等主義の主張を知るに最も便なり。ブリッソーはまた公平なる識見を持して奴隷廢止を主張せり。されどあまり論理的にして、議論迂遠なりしは其の弊なり。彼は自ら外交通を以て任じ、永くイギリスに在り、目のあたり貴族の跋扈を見て、深く自由主義に歸依するに至りぬ。

純粹に新聞記者にして、政治家とならざりしは、週刊『レヴォリュシオン・ド・パリー』[1]（パリーの革命）の主筆なりしエリゼー・ロンスタロー[2]なる法律家出身の人なるが、その新聞は賣行盛んにして、發行部數二十萬に上れりき。ロンスタローは何れの黨派にも屬せず、當時一般のフランス人の平均的知識及び感情を最も多く代表する活動の人にして、識見の公平を稱せられたるが、惜む可し早く歿して、その抱ける經綸を實行するに至らざりき。

中等社會を代表する新聞

ミラボーの『レットル・ザ・メ・コンメッタン』、『メルキュール』等は國會議事を主とすれど、その大意を取りて批評を加へたるのみ。これに反して純

1 Révolution de Paris
2 Elysée Lonstallo

官報的議事錄

粹の官報的議事錄たりしものは、一七八九年八月發行のルオヂ[1]主筆の『ジュルナル・デ・ゼター・ジェネロー』[2]（三部會新聞）にして、はじめは不正確を免れざりしが、追々熟練なる記者數名をして逐一速記せしめ、可成に完全なる議事錄を作ることを得たり。この新聞、一七八一年一月よりは『ジュルナル・ロゴグラフィック』[3]と改題せり。非常に正確なりとはいひ難きも、文中、『大笑』『謹聽』などの中間記事を挿みて、今日なほ革命時代最貴なる史料の一となれり。

「モニトール」

なほ一つ有益なる記錄は、一七九一年以後出版業者バンクックより出せる『ガゼット・ナショナール・ウー・ル・モニトール・ユニヴェルセル』[4]（國民新聞一名一般教導者）普通單に『モニトール』として知られたる最も有名なる新聞なり。初めは民主主義なりしが、後ナポレオン・ボナパルトの機關として、純然たる政府の御用新聞となりにき。これも革命史に於て缺く可からざる材料なりとす。

モニトール紙と關係殊に深かりしは、後ナポレオン政府の外務大臣

1 Lehody
2 Journal des États Généraux
3 Journal Logographique
4 Gazette nationale, ou le Moniteur universelle

マレーの人物

たりしバッサノ公[1]ベルナール・マレーなりき。

ベルナール・マレーは、一七六二年ヂジョンに生れたり。かのルソーが說を寄せて世評を惹起せし時、マレーは其の學士會の書記なりき。彼は次いで一七八五年パリーに上りしが、同鄕人にして外務大臣たりしヴェルジェンス伯は、彼を扶けて外交官たらしめんため、ストラスブルグにて、コッシュ博士[2]より國際法を學ばしめ、次いで轉學せんとせる際、一八八七年ヴェルジェンス歿するに會ひて、マレーはパリーに歸れり。パリーにては多數の名士と交り、その愛護を受け、出版業者バンクック夫人のサロンにも出入せり。三部會開會後彼は常に傍聽席にありて、議員の演說を聽き、彼の卓越せる記憶の中に、內外の光景、議事の要點を止めて歸り、これを筆記して諸所のサロンに出で、名士會合の席上にこれを朗讀して、夥しき喝采を博したりしが、友人等は彼に之を新聞として、廣く公衆に示す可きと勸告しければ、彼は之に從ひ、終に一七八九年七月一日

1 Hughes Bernard Maret, Duc de Bassano
2 Koch

より『ブレテン・ド・ラッサンブレー・ナショナール』[1]（國民議會報告）として發行せり。この新聞に示せる所は、現今の速記錄の如き正確精細なるものならざる事勿論なれども、議場の光景を叙し、議事の活動を寫して、目に見るの思あらしむるは、正しく其の特色たるを失はず。此の際彼はメジャンといへる巧妙なる助手を得たり。この新聞は『モニトール』紙の無色冷靜なるに反し、活氣あり生彩に富み、モニトール紙と相對して、各特色ありて、互に相補充するものなり。

以上各種の新聞のために最大の感化を蒙れる者は、パリーの中等社會即ち所謂ブルジョアジー[3]なり。中等社會には勤勉にして節儉、年を積みて相應の財產を作り、財產の利息を以て生活し、餘生を安らかに送るを目的とする者多し。これフランス人が好んで債券を買入るゝ所以にて、國家經濟の上より見れば、餘り早く小成に安んじて、未だ働き得る年齡に於て隱居するの弊害なきにあらざれども、之がために彼等は少壯の時營々として働き、勤儉の美風を爲し、且國家に盡すの餘裕を貯へたり。

パリーの中流社會

バリーの三部會選擧人四百五十人中、辯護士百八十三人、店主九十三人、退隱中等社會約五十人に及べり。以てブルジョアジーの勢力がいかに大なるかを知るべきなり。

退隱中等社會は、一應の敎育あり、平生閑暇多ければ、時事問題にも考慮を費す餘裕あり、政治上には重要なる分子なり。彼等は革命の初めより王室顚覆の思想などはなかりしが、一七九一年頃より殆どみな絕對共和政を理想とせり。

下等社會

下等社會即ちプロレタリヤ[1]は無產無敎育、唯其の日其の日を追ひ、感情的にして容易に煽動せられて盲動する者なれど、從來明らかなる自覺なかりしを以て、動もすれば中等階級の機械に使はれ、其の煽動に乘りて政府を威嚇し、而して此の結果より來る利益は常に中等社會に占められぬ。されば一七九一年以來王室に對する運動も、實は中等社會が彼等を利用せる事多かりき。然れども彼等と雖も次第に自覺する

1 Bulletin de l'Assemblée National
2 Mejan
3 Bourgeoisie

1 Proletariats

所あり。其の巨魁と爲る者は多く中等社會出身者なれど、其の主張は中等社會の爲に非ず。之に依り一七九五年頃には、細民社會の勢力盛んにして、もはや中等社會の驅使に甘んぜず、中等社會は茲に於て彼等自身の小財產の安全を思ひ、騷亂を恐るゝこと深かりしを以て、國民ガルド・ナショナール[1]（國民衞兵）創設も實は中等社會自衞の具にして、初め國民衞兵は多く中等社會の子弟より成りて、秩序破壞の細民に敵對せり。中等社會は又自己の利害の打算より、市政の組織、財政の整理を扶くるに熱心なりしゆゑ、ネッケール罷められ、國民議會解散せらる可しと聞くに及びて、彼等の驚愕は非常なりき。

1 Garde Nationale

此の際に當り、中等社會は自ら中心となりて細民を利用し、バスチーユを攻撃せしめ、以て朝廷の陰謀を無效に歸せしめたり。

第五章　革命初期に於けるパリーの狀態……二一九

川の如き雨上りの市街
（十八世紀パリー市中の寫生畫——本文參照）

第二編　大革命の發生期

第一章　バスチーユの陷落

一　バスチーユ攻撃の序曲

革命前パリー貧民困難の狀態

バスチーユの陷落を說くに先ち、少しく當時に於けるパリー下層社會の事情を詳にする必要あらん。その頃彼等の社會は極端なる窮狀に在り。一七八八年の大不作以來、物價騰貴して、地方農民の職を失へる者相次いでパリーに流入するあり、一方商工業も甚だしく振はず、從つてパリーの勞働者は一齊にパンの資を得るに苦めり。されば當時の暴動を以て、專らオルレヤン公一派が賤民を使嗾煽動せし結果なりとする朝廷側の臆測は、多少の根柢なきに非ざれど、其の勢力は爾く强大なるものにあらず、寧ろ當時勞働者を脅かしつゝありし饑餓こそ、實

に彼等を驅りて暴動に至らしめし最大の原因なりし事を知らざるべからず。いはゞ乾き切つたる枯草の上に一點の火を投ぜしにも等しく、忽ちにして燎原の勢を以て燃えひろがりしなり。

一般の政治熱昂騰

又三部會の選擧以後、一般人民の政治に狂奔する傾向日を追うて激烈に、一方中等社會に細民を利用して、政治思想を彼等の間に注入するに努むる者あり。而してこれらの細民は本來無智無學にして、何者をも信じ、何事をも實行せんとす、他の煽動使嗾に遭ひてよく冷靜なるを得んや。かくて朝廷及び貴族に對する反抗的運動は、久しき以前より〳〵所在に行はれゐたれど、其の大いに人目を惹く運動となりしは、レヴェイヨン事件を嚆矢とすべし。

レヴェイヨン事件

レヴェイヨン[1]とはパリーの壁紙製造所の主人の名にして、職工八百人を使用し、パリーの選擧人の一人にして、財産ある中等社會の代表者たり。彼は工場主としては使用人に對し頗る寬厚にして、慈愛の心深き人物なりしなり。しかるに何人か流言したりけん、(或はアベ・ロア[2]なる

1 Réveillon
2 Abbé Roy

僧侶の作り設けし浮說なりともいへど)レヴェイヨン或時人に語りて、『人民は未だ饑餓に瀕せず、彼等は一日三スー(六錢)の錢あらば裕かに生活し得るにあらずや』といへりとの風說が、端なくセン・タントイーヌの貧民窟に傳はるや、夥しく彼等の敵愾心を激發せしめたり。

かくて四月二十八日ロンシャン[1]に競馬ありし際、群衆のうちに誰言出すともなく、レヴェイヨンに對する不平罵詈の聲口より口に傳はりて、いつしか穩かならぬ騷亂の氣勢を作り、遂に徒黨を組みてレヴェイヨンが工場を襲ふに至りぬ。されどレヴェイヨンは早く姿を隱しゝかば、その腹癒せに彼が人形を作り、工場の梁に吊して絞首の狀をなし、また彼が近日勳功によりて朝廷よりセン・ミシェル[2]の勳章を賜はるべき噂ありし際とて、件の勳章に擬したる徽章を人形の胸に著けしめ、これを嘲罵して快を取れり。かく散々に凌辱を加へし後、プラース・ド・ラ・グレーヴ[3]の廣場に人形を荷ひ行きて、大聲嘲罵の內にこれを燒却し了り、『何れ近日再び來りて更に彼を退治せん』と叫び解散せり。其の後彼等はまたレ

人形を絞首して燒く

1 Longchamps.
2 Saint Michael
3 Place de la Grèves

ヴェイヨンが其の隣家なるアンリオー[1]の家に潛伏せりとの報を得るや、同家を襲ひ亂暴を働き、終に之を破壞したるのみか、その近邊を馬車にて通行する貴族を見ては、激しき嘲罵を浴せかけきといふ。

軍隊市民に狎る

レヴェイヨンやがてかくとバリーの選擧人會に訴へて、暴徒の鎭壓を求めければ、選擧人會は彼等細民の間に人望あるサンテル[2]を送りて鎭撫の任に當らしめ、次いで、ガルド・フランセーズ（フランス衞兵）、及びガルド・スウィス（スウィス衞兵）[3][4]の軍隊を鎭壓のため派遣せしめたり。されど士官等は自らその部下の兵士を信用すること能はず、現場に赴くことを躊躇したりき。

此の暴動事件は果して暴徒に多くの勢力を與へ、必然に細民等の擾癖を煽れり。彼等が常に恐れし所は、ガルド・フランセーズの武力なりしに、今や其の軍隊の兵士は大抵バリーの市民にして、平生彼等下層の市民と親しく、その婦女と戲るゝもの多く、中には既に妻帶せるものあり。從つて一朝事起るも、軍隊はバリー市民に對し暴力を振ひがた

1 Henriot
2 Santerre
3 Garde Française
4 Garde Swisse

き情誼あるのみならず、或は却つて鉾を倒にして上官に反抗を試みんとする氣勢なきにあらず。加ふるに、民主主義の思想また深く彼等の間に浸潤したれば、政府は愈〻以て彼等に信賴しがたき事情あり。これ政府にとりて重大なる弱點にして、彼等が人民に對して濫りに暴力を振ひ得ざりし原因は專らこゝに在り。人民も此の祕密を知るが故に、一度暴動勃發するや、一歩は一歩より大膽となり、勇敢となり、勢つひに底止するところを知らざるに至りしなり。

將校と下士卒との間に溫情なし

かくて暴徒の巨魁等は、細民等に對し『今や國民議會は吾等を助くる能はず、吾等は自ら助けざるべからず』と叫び、まづガルド・フランセーズの兵士を懷柔して、之を味方とする運動を始めたり。而も軍隊の指揮に任ずる士官等は一向に部下の内情を悟らず、彼等と部下との間には階級の區別のみありて、戰友としての情誼なく、士官の中にても、兵卒に最も近き下士官等は貴族に對して何の同情をも有せざりき。されば

1 Duc de Châtelet

六月三十日、公爵[1]シャトレーといふ不人望なる指揮官の一人、事に依りて

部下の兵卒十一人を捕へてアッベーの獄に投ぜしに、ガルド・フランセーズの兵士は忽ち公衆の一揆と共に獄中に闖入し、十一人を救ひ出しゝのみならず、一隊はオルレヤン公のパレー・ロアヤールに立寄りて、酒食の饗應にあづかりき。しかも上官等はこれを如何ともする能はず、空しく不問に附したりき。

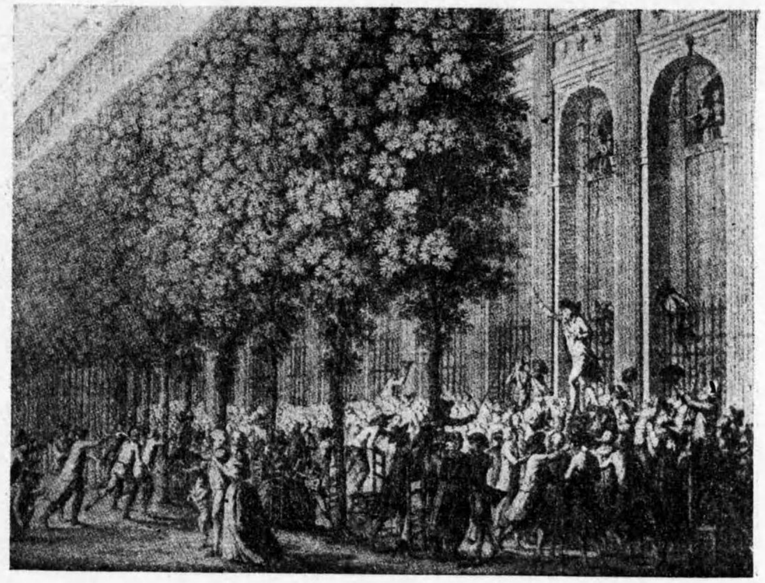
ネッケール免職の報パリーの人心を動かす

七月十二日の朝、ネッケールその職を免ぜられて、フランス王國退去の命を受けたりとの風評は、忽ちにして燎原の勢を以て民衆の間に流布したり。憤激と疑惧と、今や彼等は頭上に黒風渦巻き、雷電閃くが如くに感じたり。彼等は自ら何を爲すべきか、又何を爲さんと欲するかを知らず、パレー・ロアヤールの中庭に集合し來り、三々伍々珈琲店の卓を圍み、囂々として不平の嘯きを交したり。そこに集まれる者には、無職の閑人あり、失業の職工あり、また中等社會の立派なる紳士もありき。

熱辯を振ふ一青年

忽ち見るカフェー・フォア[1]なる食卓の一角に、痩身黒髪、眼光射るが如き一青年あり。高く卓上に躍り上ると見る間もなく、朗々と一大演説を

1 Café Foy



カミーユ・デムレンの演説（ベルトール作銅版畫）

始めたり。公衆は爭つて彼の周圍を圍繞せり。彼は曰く、『市民諸君よ！、諸君が皆其の永く公職に在らんことを冀へる、ネッケールは免職せられしぞ。彼が免職は愛國の人々に取りて、セン・バルテルミー[1]の警鐘にあらずや。見よ。ガルド・フランセーズか、ガルド・アルマン（ドイツ衞兵）[2]か、今夕その何れかの軍隊は吾等を殺戮せんがため、シャン・ゼリゼーに出動せんとす。

1 St. Barthélemy
2 Garde Allemand

今に於て吾等の執るべき手段は唯一つあるのみ。武器(オーザルム)を執れ！、而して吾等相互に傷けざらんがために、各人は一つの徽章を着けざるべからず』と。群衆は狂熱の如くに喝采せり。青年の名は、カミール・デムレン、當時パリーに流浪せる薄倖の一文士にして、後に大革命の領袖ダントンが股肱たりし人物なりき。

カミール・デムレンの人物

註　デムレンは名をブノア・リュシー・センブリース・カミール・デムレンといひ、一七六〇年ピカルヂー地方のギーズに生れぬ。富裕ならざる辯護士の長男なり。資性感情激しく、知識慾旺んにして、學才之に應じて豐かなりき。彼の父は其の子に法律を學ばしめ、己れの嘗て夢想して得ざりし高等裁判所の議員たらしめんと欲せり。而して之がため其の子をパリーに遊學せしめんとしたれども、元より資力に乏しく絶望の外なかりしを、カミールの叔父にして同じく辯護士ながら富み榮えしド・ヴィーフュイー・デ・ゼッサル、其の甥の奇才を愛して、學資を給し、コレージ・ド・ルイ・ル・グランに入らしめき。カミールが勉學は衆を抜きて忽ち級中の最好成績を示しゝが、一方、彼はこゝに在りて自由主義の思想を吸入し、古ローマの共和政治に深く憧憬せり。

1 "Aux armes"
2 Benoit Lucie Simplice Camille Desmoulins
3 Danton
4 Picardeie
5 Guise
6 De Viefuille des Essars
7 Collège de Louis le grand.

當時カミールの學びしコレージ・ド・ルイ・ル・グランの教育は、專らジェスイット風なりしかど古典の研究をも奬勵し、またコンシオーヌといふことあり、ケーザル、キケロ等古典文學の名文を本に、演說と文章との練習を爲さしめたり。カミールはしかもこれのみに滿足せず、更にタキツスにまで遡りて、古典の文章に習熟しき。彼の同級の友として、彼はロベスピエールとも昵懇なりき。卒業後彼はパリーに辯護士を開業したるが、社會より餘り認識せらるゝことなく、たゞオルレヤン公一派の多少彼に注目せるあり、これが爲、デムレンはビュッフォン夫人のサロンに出入する機會を得たりき。辯護士たりし間に彼はダントンと交を結び、自由主義の理想を語りて相傾倒せしが、辯護士の本業には成功せず、吃音甚だしきに依りて世人の嘲笑を買へりき。リュシール・デュプレッシといふ少女に對し、詩人的戀愛を感じたれど、貧窮にして志を達する事能はず。彼後年新聞記者として漸く成功するを得たれど、革命の初期に於ては、窮迫の淵に沈みるたりしなり。三部會召集の令出づるや、彼は功名を夢みつゝ、故郷ギーズに

デムレン

1 Jesuits
2 Conciones
3 Caesar
4 Tacitus
5 Lucile Dupressis

歸り、盛んに運動するところあり、爲に父は第一番の選擧人に選ばるゝに至りしが、父辭して受けず、恩人なる叔父デ・ゼッセルこれに代りぬ。デムレン自身もまた七十九人中の二十五番にて選擧人の一人たり。然れども第二選擧の結果、叔父は第二位にて三部會議員に當選せしが、彼自身は遂に落選せり。かくて彼は其の同窓の若き友ロベスピエール以下の當選者を羨みつゝ、怏々としてパリーに歸り、この度は論說によりて自由主義の主張を伸べんと欲し、幾種の論著を作りしが其の過激なるを惧れて、書肆はこれが出版を肯はず、彼は悶悶としてひとり頻りに神經を興奮せしめるたるが遂に圖らずも七月十二日の演說となり、平日の吃々たるに似ず、火の如き熱辯大いに公衆を動かして、一躍大革命の花形役者とはなりしなり。

七月十二日の暴動

デムレンの演說に煽動せられし群衆は、一齊に興奮起立せり。デムレンは更に曰く『諸君、徽章は何を擇ばんとするぞ。希望の色なる綠を擇ぶや。はた自由の愛を表象するシンナッス[1]の藍を擇ぶや』と。群衆は一齊に『綠！綠！』と叫べり。言下にデムレンは、綠色の綬をとりて自家の帽上に纏へり。群衆は手に手に園中の樹葉を折取りて、帽に挿みぬ。デムレンは尙卓上に立ち、二挺のピストルを高く揭げ、叫んで曰く『諸君よ、こゝには警察官あり、余を睨視して監察を怠らず。余に對し間牒を放ちて一擧一動を探索しつゝあり。よし、よし、余の同胞のために自由を叫ぶは余の任務のみ。余は併しながら決して彼等の手には落ちざるべし』と。その時群衆が一齊に『武器（オーザルム）を執れ、武器（オーザルム）を執れ！』と叫ぶこゑ雷の如くなり。デムレンは卓より跳び下りて往來に出でたり。群衆は彼の後に隨ひてパレー・ロアヤール大通に出で、行く行く數を增して、大通せましと練りゆきぬ。劇場の前に出づれば、彼等は叫びて、ネッケールの退職を弔するために劇場の閉鎖を要求せり。彼等は更に進みてブールバール・デュ・タンプル[1]二十番地なる彫像店（キュルチュース）[2]の家に至り、王、ネッケール及びオルレヤン公の半身像を貸し與へんことを求めたり。蓋し王は此の時いまだ他の二人と同じく群衆が崇拜の的たりしなり。

群衆デムレンに附隨して動く

キュルチュース

註　※キュルチュースはもと、スウィス、ベルンの醫師にして、多く臘細工の解剖模型を作れり。フランシュ・コンテ[3]親王に伴はれパリーに來り、はじめは臘細工にて流

1 Cincinnatus

1 Bourvard du TemPle
2 Curtius
3 Franche Comtè

行品の模型などを作りゐたるが、後には多く當代名士の半身像をも作れり。かのロンドン名物の一なるマダム・チュッソー[1]が臘人形の見世物の最初の女主人は、このキュルチュースが姪なりといへり。

キュルチュースは此の時群衆の要求に應じて、ネッケール及びオルレヤン公の半身像を與へしが、王の像は皆全身像にして、群衆の手に與ふれば途中取落し破壞せらるる虞あり、かくては己れの身上に後難あらんことを氣遣ひて、これは遂に隱して出さず。

最初の衝突

こゝに於て群衆はネッケール及びオルレヤン公の半身像を棒に突刺して、高く前面に押立てつゝ前進し、プラース・ド・ヴァンドーム[2]に至るや、※ランベスク[3]の率ゐたる歩騎の二分隊に遭遇し、之と衝突せり。

ランベスク公

註　※プレンス・チャールス・ランベスクはギーズ家の支流エルブッフ家の最後の繼嗣にして、マリー・アントアネットと血緣あり、一七五一年ヴェルサイユに生れ、一八二五年ウィーンに歿す。

此の際起れる騷動の顚末に關し傳ふる所の諸記錄は、頗る錯雜矛盾して、其の眞相を知る事頗る困難なるが、今諸材料を比較研究せる結果、

1 Mdme Tus eau
2 Place de Vendôme
3 Prince Charles de Lambese.

余は實際の經過は凡そ下のごとくなりしと斷ぜんとす。卽ち群衆が道を開くことを兵士に要求し、罵聲を放つて押寄せ來るや、兵士は銃槍を振つて群衆を襲擊し、此の際オルレヤン公の胸像を押立てたる一人は銃槍に傷けられ、又ネッケールの胸像を持てる青年は銃彈に當りて死せり。しかも群衆は少しも屈せず、刻々に勢を增して猛進し來り、兵士も素より無益に殺戮を行ふ意志あるに非ざれば、敵せずして、次第にプラース・ルイ・ケンズ[1]（ルイ十五世廣場）の方に壓迫せられぬ。指揮官プレンス・ランベスクは兵士の退却するを見て、大いに周章て、軍を整ふるに地の利を求めん爲なりしか、馬をチュイルリーの園內に乘入れつ。園內には折しも數多散步中の紳士貴婦人あり、遊嬉せる兒女あり、將軍の馬に驚ろきて左右に逃惑ひ、一人の紳士はランベスクの馬蹄に蹴倒されたり。

ランベスク公の狼狽

當時流布せる一枚刷の粗畫に、此の時の實景なりといふものあり、或ものは民衆が將軍及び兵士の馬に驚ろきて右往左往する狀を描き、或ものは將軍が劍を拔いて人民を斬倒せる圖を揭げたるを見たり、以て巷

1 Place Louis XV

說の區々にして、眞僞共に混沌のまゝ傳へらるゝ實例と爲すに足れり。

人民は今や銃聲を聞き、愈〻己れ等に對して襲撃始まれるものと誤信し、武器を執りて起てり。而して平生其の司令長官に對し不平を抱けるガルド・フランセーズ（フラン衞兵）の一隊は、是に至り飜つて人民の味方となり、銃槍をつけ急走してプラース・ルイ・ケンズに來著し、チュイルリーとシャン・ゼリゼーとの間を塞ぎたり。時にシャン・ド・マール[1]には兼ねて朝廷方の集めたるガルド・スウィッス（スウィッ衞兵）ありしが、彼等も當時隊内に不平ありしかば遲疑して動かず、薄暮に至りてスウィッス衞兵の隊漸く騒擾の場所に達せしも、フランス衞兵がシャン・ゼリセーを占領して、戰鬪姿勢を取るに遭遇するに及び、スウィッス衞兵は行動を停止して、發射することを肯んぜず。士官等は今や止むことを得ず、再び彼等を率ゐてシャン・ド・マールに引返せり。

二　バスチーユへ！　バスチーユへ！

1 Champ de Mars.

七月十二日より十三日に亙る夜、一揆は武器廠に亂入して武器を奪ひ、次いで市中の麵麭屋、酒屋に亂入せり。婦人もまた多く槍を携へ、群衆に加はれり。これ實に革命の第一烽火なりき。

ギーヨッチーヌ

パリーの選擧人會は、この際に方り、會議を[1]無期繼續（アンパルマナンス）とする事を決議し、大いに活動を開始せり。先づ或市の先例に依り、市民自衞の必要上より、人民より成る軍隊卽ちガルド・[2]ナショナール（國民衞兵）を組織することを決議し、一方、代議士ギーヨッテン[3]（斷頭機ギーヨッチーヌの發明者）に依頼して、その許可の歎願書を政府に出さしめ、一方、著々として軍隊の組織を進めたり。かくて全パリー市六十區の各一區毎に毎日二百人を出し、四五日中に四萬八千人の軍隊を作る計畫をなせり。各區は更に十六隊に分れ、その十二を以て四箇大隊を作り、殘り四

1 Assemblée en permanence
2 Garde Nationale
3 Guillotin

を以て三箇大隊を作り、各大隊は四箇小隊とし、各小隊は二百人、各兵卒は皆青と赤との徽章を帶ぶる事とし、かくて十三日の正午までに、一萬八千人と、外に若干の義勇兵とを得たり。又嚴に市内の秩序を立つる事を戒告し、奪掠を禁制し、盜賊は捕へて、プラース・ド・グレーヴ[1]にて、街燈臺の鈎に釣上げて絞殺せり。後革命の最中に當り群衆の間に數〻起りし、『燈臺へ！（アラテルヌ）[2]燈臺へ！』といふ恐ろしき叫びは、この時盜賊に對して始めて用ひられしものなりき。

國民衞兵の組織

翌十三日は、昨日の騷擾に比し、外觀甚だ靜穩なりき。しかもこれ嵐の前の凪に過ぎず。沈默の底に陰鬱なる凄氣を藏めたり。

オルレヤン公派の運動

當時オルレヤン公の黨派は、密々煽動に奔走しつゝあり。[3]クリュブ・デ・コルデリエーの巨魁等は、頻りに運動の畫策をすゝめつゝあり。槍の分配、銃の集收、みな明日の大事のために、著々準備せられつゝあり。

一方、朝廷の防備は如何といふに、恃むところは、シャン・ド・マールに屯集せる兵のみなれど、ガルド・フランセーズは昨日以來、公然人民の味方となり、外國人の雇兵なるガル・ド・スウィスも給料の不平あり。人民の煽動者は兵士に近づきて彼等の心を誘へるのみならず、兵士の兵營を去りて市中に出づる者相次げり。蓋し從來士官等は貴族にして、階級上の區別に因はれ兵士を動物視し、器械視せるため、此の際に於て彼等と兵士との間に意志の疏通を圖る能はず、遽々として彼等の反かんことを恐れたり。されば朝廷黨は一網打盡的に、民主主義を壓倒し去らんとする計畫を立てゝ、これまでバリーの市中に密々兵士を繰入れゐたれど、司令長官ブローリー公は、今やバリー附近軍隊の司令官ド・ベザンヴァル男爵の報告に接し、信賴せる兵士の却つて危險なることを初めて悟り、こゝに朝廷黨の計畫は水泡に歸しぬ。

朝廷陰謀の失敗

一方、ヴェルサイユに在りては、七月十三日朝、國民議會は開催せられ、ムニエーは起ちて、政府が突然藏相ネッケールを免職せしことを非難せり。ラーリー・トランダル之に贊成し、ネッケールに對する長々しき讃美の辭を述べて、彼の復職を要求し、貴族部のド・ヴィリアン[2]は、議會は七月十一日

1 Place de Grève
2 à laterne,
3 Club des Cordeliers

1 Baron de Besenval
2 De Virien

まで成立せざるものとし、改めてこゝに成立の誓約をなさんと動議し、クレルモン・トンネールは之に對し、其の必要なしと主張し、吾人は憲法を得ずんばたゞ死せんのみといへり。次いで尚續々演説あらんとせる時、兼ねてパリー市選擧人の依託を受けたるギーヨッテン博士は動議を提出し、政府に對して、パリー市のガルド・ナショナール（國民衞兵）創設を請願せんことを提議せるに、議會は直ちにこれを可決し、卽座に一群の委員を選出したり。而して其の一群はヴィエンヌの大司敎に率ゐられて、王に謁見を乞ひ、國都の騷亂の狀態を告げ、軍隊の撤去を要求し、國民衞兵の組織を請願せり。

國民議會パリー市のために斡旋す

而して他の一群の委員は、王よりパリー市に對する許可の狀を得て、これを同市に報告する任務を含みて待てり。

王の拒絶的返答

王はヴィエンヌ大司敎に答へて、『余は曩に、パリーに於ける不穩の狀態に對し、止むを得ずして採れる手段につき、余の所思を告げたり。これが良否の判斷は一に余の心に在り、余はこれを變更することを欲せず。或市は自ら護衞する例あれど、これを國都に用ふることは許可し難し。余は卿等が請願の趣意の純潔に出づるを疑はずと雖も、卿等はパリーに赴くも寸效なからん』と。その意依然として拒絶的なりき。

國民議會謀の出づる所を知らず

ヴィエンヌ大司敎等歸り來りて、王の回答を報告するや、議會は互に顧て爲すところを知らざりき。其の時ラファイエットは、王の背信を責め、タルジェ、クレルモン・トンネールはこれに贊し、『王の意見の如何に拘らず、國民衞兵の組織は急要なり』といへり。モンテスキュー侯は、かくの如き重大問題あり、今日は徹夜これが審議を盡すべしといへるに、滿場歡呼してこれを贊したるが、一方には又、此の問題の解決は決議に依るとも寸效なし。たゞ實際的行動に依る外なしといふ者ありて、紛々擾々の間に、何事の定むる所なくして散會せり。

老兵院の奪掠

十三日夜より十四日に亙り、市民等は武器を携へて往來し、市中はさながら戰場の如くなり。國民衞兵隊の兵士は他の編入義勇兵と共に、終夜その間を徘徊して、秩序を保つ事に盡力せり。市民は家毎に燈火

十三日夜のパリー

を出し、全市は不夜城の觀をなし、一人も眠に就く者なく、皆鶴首して不安なる夜の早く明けんことを祈れり。各商店はみな堅く戸を閉ぢ、人人は今や何事か起らんとするを察すれども、その果して何事なるかを知るものなく、議會に對して何かと取沙汰喧しく、國民衞兵隊は、シャン・ド・マールに屯集して、警戒し、市民は三々伍々打集ひて、或はネッケールの復職を說くものあり、或は王の廢黜せられて、オルレヤン公の卽位すべきを說くものあり、一般に、ヴェルサイユ市とパリー市との交通を絶たれたれば、やがて內部に裏切起らんといふ說に一致したり。是に於て何人も、パリー市外に出でんとする者は、人民の利益を裏切る間諜とせられたり。人民は選擧人會中にすら政府の探偵あらんかと疑へるを以て、彼等は先に會議の無期繼續を決議したれども、假令此の決議なくとも、人民は彼等全員を監視して、一步も外に出づることを許ざりしならん。而して一般に、政府軍の不意の襲擊に對し、武器を以て自ら衞るべしとの說行はれ、十四日朝人民の二個の集團は、バスチーユ及び[1]*オテル・デ・エン

1 Hôtel des Invalides.

交通遮斷

十四日の群衆の性質

ヴァリード(老兵院)に向つて進入することとなりぬ。

十四日朝活動せる群衆は、十二日、デムレンに隨ひて盲動せる烏合の衆とは、大いに其の性質を異にせり。此のバスチーユ及びオテル・デ・エンヴァリードに向へる群衆は、相應秩序ありて、中にはガルド・フランセーズの兵士あり、學生あり、若き辯護士あり、その他中等社會の人物も交れり。また軍隊はこれが道を塞がず、敎會もこれを妨げず、或牧師の如きは、己れが檀家の人々の先頭に立ちて進めり。これらの人々は初めより奪掠殺戮を好めるにあらず、武器を獲て自ら護らんとするに外ならざりしなり。

老兵院の歷史

註　*オテル・デ・エンヴァリードは、ルイ十四世の下に陸軍大臣[1]ルーヴォアの建議に依りて作られたるもの、一六七〇年より一六七四年の間に成れり。初めの設計者は[2]ブリュアンにして、これを完成せるは、有名なる建築技術家[3]マンサールなり。ルーヴォアは陸軍改良の上に幾多の事績を殘しゝ人にて、老兵院の設立もその改良事業の一なりき。ルイ十四世の死後は行政萬事腐敗せし結果老兵院も大貴族の家隷の住居の如くなれるも、尙さすがに少數の老兵これを守れ

1 Louvois
2 Bruant
3 Mansard.

り。群衆到れるときは、ソンブリュイュ[1]伯司令官たり、二萬六千挺の武器を藏せりと信ぜられたりき。

老兵院に向へる群衆無事目的を達す

かくてエチュイ・ド・コルニー[2]及びセン・テチエンヌ[3]寺の主僧等を先頭として、之に集れる大群衆は、主として市の場末なるフォーブール・セン・タントイーヌ[4]の住民にして、十四日の朝、一團となりて老兵院に赴き、直ちに武器の引渡を求めたり。司令官ソンブリュイュ伯素より之に應ぜず、衝突あはや起らんとせしが、元來この建物は防禦の爲に作られしものにあらねば、群衆は交渉手間取るをもどかしがり、或は窓より、或は他の隙間より、自由勝手に潮の如く闖入して、各〻手に手に武器を剽掠せり。之に因りて、此所には反つて幸に一滴の血をも流すことなくして、群衆の目的は易々と遂げられたり。

バスチーユ城の歴史

バスチーユ城は、今形を止めずと雖も、その圖書は多く殘りたれば、今日より其の模様を察するに難からず、元來牢獄に非ず、その起源はイギリス・フランス百年戰爭の頃にあり。一四八七年町人頭エチエンヌ・マルシャン[5]（プロヴォースト・デ・マルシャン）

1 Comte de Sombreuil
2 Etuys de Cornay.
3 Saint Etienne
4 Faubourg Saint Antoine
5 Provost des Marchand
6 Etienne Marcel

ルセルの主張に依りて造られ、初めは城門の形なりき。チャールス五世の時、一三七〇年町人頭オーブリオ[1]その城堡を築きたり。このオーブリオの生涯は、バスチーユの歴史と最も因緣深し。オーブリオは、常にパリー大學と善からず、これに關聯して一の事件起りぬ。一三七七年九月ランヂー[2]の祭に、パリー大學は宗教行列を作りて進行せしに、セン・ヴニーの原にて市の行列と衝突せり。市の行列は、アグネス・ピエドリュー[4]といへる身性のよからぬ女をば、若き娘を苦めし罪の私刑として、丸裸のまゝに縛りて往來を引廻し居たり。アグネスは大聲をあげて、己れが不正に辱めらるゝことを哀訴しゐたるが、今し他の行列の來掛るにあひ、一しほ聲をふり絞りて『われを救へ』と叫びたり。茲に於て學生の群よりはギドマール[5]以下多勢これに應じて、市の役人と鬪爭をはじめたりしも學長の制止にて一時は鎭まれるが、その後、オーブリオはギドマール[6]がジュリエンヌ・ブリュルフェーといへる若き女を誘惑せるを訴へて、これを拘禁せしめたり。しかれどもチャールス五世はこれに干涉し

町人頭オーブリオ

バスチーユ城の歴史

1 Hughes Aubriot
2 Lendit
3 St Denis
4 Agnes Piédeleu
5 Guidomare
6 Julienne Brulefer

て、ギドマールを放免せしめき。之より大學と市との確執は結びて解けず。チャールス六世の代に、オーブリオは、又罪を訴へて、ギドマールを拘引せしめたり。然るにギドマール法廷に立つや、逆にオーブリオが、ユダヤ女と情を通ぜる事を告訴せり。當時斯る事は死刑に相當せり。而して法廷に召喚せられたるユダヤ女は、オーブリオの爲不利なる證言をなして、その席に自殺したり。之に依りオーブリオは、異端と不品行との罪により死刑を宣告せられしも、王は死一等を宥めて、オーブリオを彼が自ら築きしバスチーユ城に投じ、パンと水とによりて生くる事を許したり。こゝに於てパリーの市民等オーブリオを救はんとして、種々畫策せる間に、彼は自ら獄を脱して故郷に逃れ、そこにて間もなく死歿せり。

バスチーユ牢獄となる

當時のパリー市は狹隘にして、バスチーユも市の外に在り、宛も市のために第一防禦線たる觀をなし、外城の役目を勤めゐたり。その後大抵破壞して、形を止めずなりしが、パリー市の膨脹と共に、バスチーユもそのまゝ市内に殘されて、監獄に代用せらるゝに至りぬ。チャールス六世の時、屠者カボシュの[1]ブルギニョン黨の一揆、バスチーユ城を襲ひし時、[3]アルマニャック黨の[4]ピエール・デ・ゼッサールこれを擊退せり。その後一四一五年、イギリス人の助力によりて、ブルギニョン黨勢力を得て、一四一八年バスチーユにあるアルマニャック、黨は虐殺せられたり。（アルマニャック、ブルギニョンは當時フランスにありし二黨にして、前者はフランス王の爲に忠義を盡し、後者はイギリスの利益の爲に勵みて、互に相爭へるなり。）

ブルギニョン、アルマニャック二黨爭の

イギリス王ヘンリー五世、その弟フランシス公をパリー市守備軍の司令官に任ぜし時、イギリスの守備兵は、バスチーユ、ルーヴル、及びヴェンセンヌに駐屯せり。その後一時イギリス兵は撤退せしが、パリーは再びイギリスの羈絆につながれぬ。[6]エキゼター公守備軍司令官となりし時、シェークスピヤの史劇に道化役として有名なる[7]サー・ジョン・フォールスタッフ、バスチーユの守備に任じゐたりき。フォールスタッフの後繼者たる[8]ウィローピー・デレビーの時に至り、フランス軍に對し、開戰を餘儀なくせ

フォールスタッフ

1 Caboche
2 Bourgnignon
3 Armagnacs
4 Pierre des Essarts.
5 Vincennes
6 Duke of Exeter
7 Sir John Fallstaff
8 Willoughby d'Eresby

られたり。

その後代々のフランス王の下に、有名なる人物のこゝに禁錮せらる

る者幾人なるを知らず。バリー市がヘンリー四世に全く降伏せると

きに、王は元帥ビロン公[1]、チャールス・ド・ガントーと共にバスチーユに入り

ビロン公

ぬ。このビロン公は、同じくシェークスピヤの喜劇『ラヴス・レーボアス・ロ[3]

ースト』の主人公なりといふ。彼は其の後、イスパニヤと通じ、反逆罪に

問はれて、バスチーユに移され、一六〇二年七月三十一日斬首せられた

り。ヘンリー四世の死後、宰相シュリー[4]公は、反對黨の毒手を避けて、バス

チーユに籠りしことありき。

フロンド黨の反亂

リシュリー大宰相たりし時、バスチーユに禁錮せられしものは甚だ多

かりき。マザレン宰相の時には、フロンド黨の反亂あり、王軍の大將チュ[5]

ーレンヌ將軍は、市の場末なるセント・タントイーヌにて、フロンド黨の將

軍コンデ[6]公を破り、勝に乘じて追撃頗る急に、危機正に迫りしに、オルレ

ヤン公ガストン[7]の娘グランド・マドモアゼール[8]、バスチーユに在り、自ら

1 Biron
2 Charges de Cant'aut
3 "Love's Labour's Lost"
4 Duc de Sully
5 General Turenne
6 Condé
7 Gaston
8 Grande Mademoiselle

名士多く玆に繫がる

兵を指揮して敵兵を砲撃し、よくこれを喰止めたりしことあり。

フロンドの亂鎭りて後、バスチーユは全く牢獄として用ひらるゝのみとなり、常に國事犯人、特別逮捕狀によりて忌諱にふれし人物を囚禁する場所となり、ヴォルテール、ミラボー等、皆其の一時的住人となれり。之に依り世人はバスチーユを專制政治の暗黑なる標章として見るに至りぬ。

バスチーユ攻撃の計畫

バスチーユは、當時坊間に傳はりし、今尙革命史の書に引用せらるゝ銅版畫に描ける如く、廣大なるものにあらず。バスチーユの城壁は、ルーヴルの屋根と高さを同じうし、高さ九十六尺、厚さ九尺、空濠の深さ、內側より二十二尺、八個の塔樓あり、ヘンリー四世の時、武器を玆に貯へたり。今や市廳に在りし選擧人會の人々は、此の武器を獲ん爲に、いかにしてバスチーユを占領すべきかの議を開けり。或鍛冶職の人は、ローマの投石機の如きものをすゝめ、パリー民兵中佐[1]コーシヂエールは、正攻法に依りて正面より陷落せしむべしといひ、細民間に人望ありし酒造家

1 Caussidière

サンテルは、消防隊のポンプを以て、テレビン油に燐を交へたる液を城壁に向ひて注ぐべしとの議を立てたり。

しかし乍らこれらの人々は、バスチーユの實際には更に恐るゝに足らざるものあるを知らざりき。當時バスチーユの司令官[1]ド・ローネーは十分の防禦手段を知らず、到底攻撃に對して永く支へ得る道なかりき。況や火藥の僅少なる上に、糧食としては、穀物の粉二袋と少許の米とありしのみ。守兵としては、ガルド・スウィッス三十二人（隊長[2]ルイ・ラフリュー）老兵八十人（隊長[3]ローム・サルブレー）小口徑の大砲十五門ありしのみなるをや。

バスチーユの守備薄弱

されど選擧人はバスチーユのかく手薄なることを知らず、先づ開城勸告使として、[4]ベロン、[5]ビルフォール、[6]シャトン等三人の士官をバスチーユに送れり。ド・ローネーは之に朝食を饗し、彼等は止る事三時間の後に辭し歸りぬ。此の際ド・ローネーは、素より開城を承諾せざれど、正當防禦の外決して、大砲を用ひざるべしと誓へる事を報告せり。群衆はかく

1 De Launay
2 Louis La Flue
3 de Losme Salbray.
4 Bellon
5 Billefors
6 Chaton

て四方よりバスチーユを圍みしが、未だ襲撃を爲すの勇氣もなく、空しく遠方よりこれを觀望せり。集れる群衆のうちには、襤褸引きかつぎし細民もあり、立派なる服裝せる紳士もあり、ガルド・フランセーズの兵士も中に加はりて、實にさまざまの種類の市民を網羅しゐたりき。

バスチーユ開城の談判

午前七時、公衆の代表者として、[1]チュリオ・ド・ラ・ロシエールは、[2]ヅリエー、[3]ヅルーズ以下一群の人々を從へて城に近づき、守備隊長ド・ローネーに、城中の武器引渡を迫りしに、ド・ローネーは、乃ちチュリオ・ド・ラ・ロシエール一人のみを城中に入るゝことを許せり。チュリオ城中に入るや、激烈なる語調にてド・ローネーに對し、『余は國民の名に於て、足下が差向けたる大砲の、深く人民に危險を與へつゝあることを告げ、速にこれが撤去を命ずる爲に來れり』と。ド・ローネーこれに答へて、『余は王陛下より直接の命令なき限り、決して大砲を撤去する能はず』といひ、『然れども余は砲口を城の銃眼より遠ざけ置きたれば、城外よりこれを見得べき筈なし。余は足下等の方より進みて攻撃を爲すに非ざれば、部下の兵をして決

1 Thuriot de la Rosière
2 Dourlier
3 Toulouse

して發砲せしむることなからん』と。

この交渉やゝ手間どりし間に、城外にては、チュリオの身に異變あるかと疑ひ、頻りに喧騒して止まざりければ、ド・ローネー乃ちチュリオに其の姿を彼等に示して安心せしめんことを請へり。チュリオは乃ち城壁の上に立現れ、群衆これを望み見て歡呼せり。チュリオは復び城中に下り、この度は穩かに守備兵に向ひ、降伏して武器を引渡さんことを說けるも、守將は兵士等と共に軍規を重んじて、これを肯はざりき。

ド・ローネー遂に應ぜず

かくてチュリオも空しく城外に歸り、群衆に對ひて、バスチーユ開城の絶望なることを報告せり。群衆これを聞くや、怒號一時に湧き起りて、殺氣漸く漲れり。中に逸り男の數名は、先頭に立ちて城下に進み寄り、囂々として『吾等が目的を達するため、必ず城中の武器を獲ざるべからず』と叫ぶこと頻りなり。

守將ド・ローネーも今は殆ど困却して、僅かに彼等の中の五六人の代表者を入城せしめて、これと談判すべしといひ、吊橋を下したるに、談判委員の後に蹤きて、群衆の一團忽ちどつと雪崩をうちて城内に込入りぬ。さらでも神經過敏に陷れる隊長ド・ローネーは、此のすさまじき光景を見て、さてこそ攻撃は始まりたれと思ひ、急に部下に命じて銃を發射せしめしかば、忽ち二三人の死傷者を生じて、群衆は退却し、吊橋は直ちに引上げられぬ。

銃火發す

こゝに於て群衆は怒氣沖天、頻りに例のフランス人の間に恐怖すべき警語たる『裏切（トライソン）』[1]を怒號せり。その時ルイ・ツルネー[2]、オーベン・ボンヌメール[3]等二人の兵士、石垣を攀ぢて吊橋の上に出で、番小屋の屋根に登り、忽ち内より橋を引下せしかば、群衆喝采して、再び雪崩れ入りぬ。やがて城の内庭クール・ド・グヴェルヌマン[4]に入りしに、そこに一女子の姿を見たり。群衆これを守將の娘なりと思ひ、競ひ掛りてこれを捉へ、無慘にも焚殺せんとせしが、オーベン・ボンヌメール、義俠の心より群衆を制し辛うじてこれを救ひぬ。かくて群衆は城内に亂入したれど、これは未だ外城にして、内城に達するには、更に吊橋一つ渡らざるべからず。守

外郭陷る

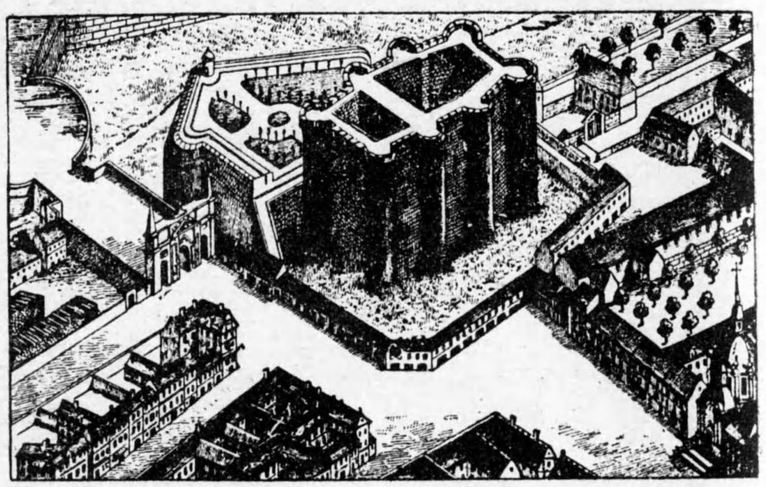
1 Trahison
2 Louis Tourney.
3 Aubin Bonnemere
4 Court de Gouvernement

將ド・ローネーは、初めより外城に歩哨の老兵たゞ一人を殘したるのみにて、守備兵の全部は内城に在り、今や群衆押寄せしと見るや、銃眼より小銃を亂射せしめたり。されど大砲は前後にたゞ一發を放てるのみなりき。

ド・ローネー自燒を計り妨げらる

當時ド・ローネーにして、飽迄手強く城を守る決心ありて、大砲の威力を十分に用ひしならば、群衆を擊退すること困難にはあらざりしならんも、彼初めより心定まらず、一方救援の軍隊の來るを心待みにして、有耶無耶に時間を遷延せんとし、そのため他方群衆を甚だしく憤らしめざらんとして、渉々しくは應戰せず、首鼠兩端を持しゐたりしなり。然れども時は徒らにうつりて、救援はつひに到らず。ド・ローネー今は百計盡き、自ら火藥庫に火を放ち、城と共に敵も味方も一齊に焚燒し去らんと企てたるが、火藥庫の守兵等これを肯んぜず、銃槍を示して彼を威嚇し、やがて城内の兵一團となりて彼に迫り、遂に開城の止むなきに至らしめたり。こゝに於て彼等は白旗を掲げ、太鼓を打ち、守將の名によりて一葉の掲示書を城外に出し、兵士等の生命を保障する條件にて開城せんといへり。士官エリー[1]はその時、『吾等は士官の名譽に依りて開城を許容せん』と答へ、士官ユーレン、ツルネー、ボンヌメール[2]等は直ちに入城し、これに踵いで群衆踴躍して續々城内に闖入し、バスチーユはこゝに陷落せり。時に一七八九年七月十四日午後六時なりき。

パスチーユ遂に降る



パスチーユ俯瞰圖

1 Elie
2 Hulin

當時、群衆の行列の先頭に

城兵の虐殺始まる

進める士官と兵士との姿を望み見るや、城内の守備兵は彼等に依りて一身の安全を得べしと思ひて、喜ぶこと限りなく、熱烈なる握手を以てこれを迎へたるに、いかゞしけん、その時二三發の銃聲起れり。こゝにまた『裏切よ、裏切よ』の叫聲は起りて、城兵中三人の士官、四人の兵士は、忽ち無殘に虐殺せられたり。寄手の士官エリーは此の光景を見て、群衆に向ひ大聲に、『われらの月桂冠を血を以て汚すことなかれ』と叫びしかば、辛うじて一時騒動は鎮りき。

士等守備長を保護す

この時、守將ド・ローネーは、四圍の形勢險惡なるを見て、自殺せんとしたれども、ユーレン、エリー等はこれを止め、自分等が士官たる面目にかけ、飽まで開城の約束を守りて、彼及び部下の兵士を捕虜として保護せんとせり。然るに、彼等が一同の捕虜を伴ひて市廳（オテル・ド・ヴィル）[1]まで赴かんとせし途中、群衆等は必ず守將ド・ローネーを獲て甘心せんとし、忽ち之を包圍して、怒罵の聲激烈を極めたり。されど開城の條件を約せる人々は極力之を妨げんとし、レルピーヌ[2]の如き、此の義俠的行動の爲、誤つて群衆に打擲せられて卽死するに至れり。又ユーレンは、ド・ローネーが脫帽せる爲群衆の標的となり易きを見、自ら其の帽を取りて着せしかば、却りて己れ手いたく打擲せられぬ。ド・ローネーこれを見て、『余は死するとも、君を煩はすを好まず』といひ、また彼の帽を受取りて被れり。

ド・ローネー慘殺せらる

プラース・ド・ラグレーヴ[1]の廣場に入りしとき、群衆は愈〻激しく揉みに揉んで押寄せ來れり。ユーレンは腕力を振つて之を拒みたれど、如何せん、衆寡の勢敵すること能はず、あはれド・ローネーは遂に彼の手より奪はれ、群衆は獰猛なる歡呼の聲をあげつゝ、ド・ローネーを引摺りて、滅多無性に打叩き、切りさいなみしかば、ド・ローネー苦痛に堪へず、最後の蟲の息に、『余を殺さば早く爲よ』と叫ぶや、群衆忽ち彼の首を切落して、これを槍の穗尖に貫き、これを先頭に、行列を作りて行進せり。

當時パスチーユにド・ローム・サルブレー[2]といふ老兵あり、平生囚人に懇切なりしかば、これを德とするもの多かりしが中に、筆禍に祟られて五年の禁獄を命ぜられゐたるド・ペルポル[3]殊に此の老人の身を憐れが

1 Hôtel de Ville
2 L'Elpine

1 Place de la Grève
2 De Lorme-Salbrey
3 De Pell port

り、如何にもして救ひ出さんとせしが及ばずして、これも犠牲の數に入りぬ。またド・ミレー[1]といふ士官はツルネル街[2]の附近にて、バンサン[3]少尉はブレー[4]門邊にて、何れも暴徒の慘手に殪れぬ。其の他の士官兵士等は、攻撃者中のガルド・フランセーズの兵士等が、中に圍みて楯となり、辛うじて無事ならしむるを得たりき。

街上の流血

町人頭疑はれて殺さる

バリーの町人頭ド・フレッセル[5]は、この時、市廳の選擧人會に在り、孜々として事務を執りゐたりしが、何人か彼を惡む者の所爲ならん、『ド・フレッセルはバスチーユの守將と通じ居れり、彼は市民を賣るものなり』といふ風説頻りに行はれ、彼に對して公衆漸く不穩ならんとするの兆候あり。之を知りてフレッセルは心中恐怖の念を以て滿されたるも、さすがに冷靜を裝ひて事務を續け居たりしが、口に入れたるパンの一片を嚥下しもやらず、そのまゝ口中にふくみ居たりといへり。やがて例のド・ローネーが首を刺したる槍を先頭にかゝげたる暴民の行列は、市廳に繰込み來り、『ド・フレッセル出でよ。出でゝバレー・ロアヤールに來れ』と叫べり。

1 De Murray
2 Rue de Tournelles
3 Pensen
4 Port de Blé
5 de Flesselles

バスチーユの亂——ド・フレッセルの虐殺

その時彼は强ひて、靜かに『よし、行けとならば行かん』といひて、中より出で來れる、その態度と音調と悠揚沈着なりしかば、さすがに暴民等も直ちに粗暴の手段にも出でず、彼を眞中に挾みて市廳を出で、プラース・ド・ラ・グレーヴの廣場を橫ぎりし時、忽ち一人の青年あり、ド・フレッセルの前面に立塞がり、

ピストルを差向けつゝ、『汝反逆人、これより先へ一歩も行く事を許さゞるぞ』と絶叫すると見る間もなく、一發の下に彼を射殺せり。群衆は歡呼の聲をあげ、彼の首を切りて、これを槍の穗尖に貫き、ド・ローネーの首と列べて、高く振りかざしつゝ、太鼓を鳴らして行進せり。

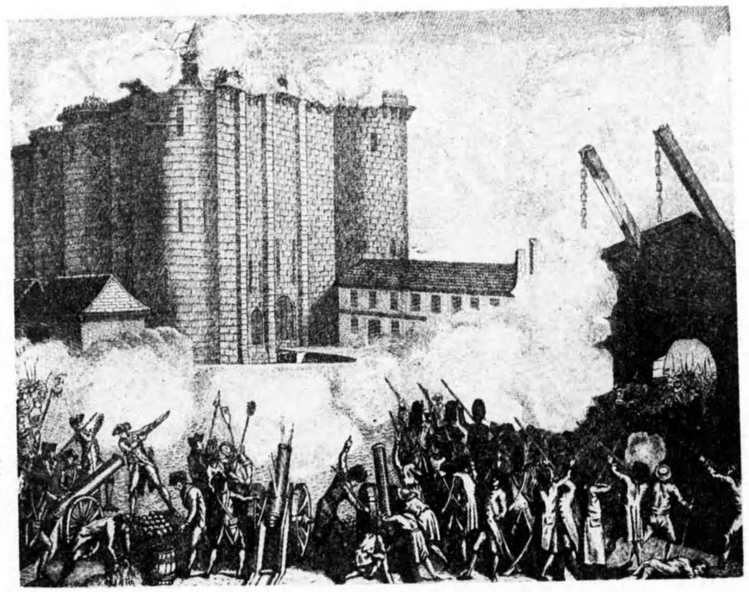
町人頭と守備長との首を振りて進行す

バスチーユの獄中には七人の囚人あり、その四人は詐欺罪の囚徒なりき。而も群衆は彼等を悉く壓制の犧牲者なりとして之に同情し、彼等を酒造家サンテルの家に運び行きて介抱せり。かのレヴェイヨン事件の中心たりし製紙工場主レヴェイヨンは、その後暴徒の迫害を畏れて、實はバスチーユに潛伏し居たりしが、豈計らんや、此の潛伏所は忽ち最危險地と變じ、若し一度發見せられなば、如何なる憂目に遭遇せしやも知るべからず。しかも幸運なる彼は、此の度も暴徒の目を眩まして、逃走することを得たり。

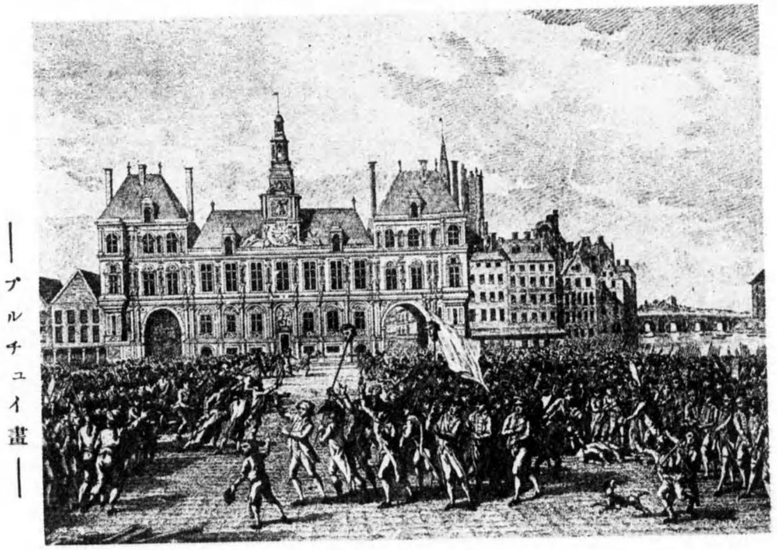
レヴェイヨン逃る

かやうにして、バスチーユの略取は、無慘の流血を伴ひたれど、しかも人心興奮の度に比して、秩序は甚だしき亂雜に陷らず、却つて十二日夜

暴動の影響



——ゴーダン畫——



——ブルチュイ畫——

バスチーユの亂

（上圖はバスチーユ外城の砲撃。下圖は群衆バスチーユ守將ユーリー町人頭の首を揭げて凱旋す）

の奪掠に類する行爲なかりき。加ふるにパリーの國民衞兵は終夜非常を戒めて、秩序を保つに努めたれば、バスチーユの陷落とて、後世に誇張して傳へられしにも似ず、實はさまでに甚だしき亂暴狼藉は行はれざりしなり。しかも此の暴動の影響は頗る著大なるものあり、パリー人が自由に對する熾烈なる要求、貴族に對する抑ぶべからざる反感は、こゝに明白なる形を取りて極端に表白せられ、國民議會がよく解決し得ざりし問題を、一朝にして解決し了れり。

當時この亂によりて、バスチーユ城に殘れる記錄は大抵壞滅したりしが、その斷簡零片の一部はロシャに賣られ、一部はフランスの政府これを保存せり。七月十六日、パリーの選擧人會は、バスチーユ全部破壞の決議を爲したるが、破壞の作業を命ぜられし石工[1]パロアは、其の石材を以て記念品を作る事を建議して認許せられ、こゝに八十三個のバスチーユの小模型を作りて、全國八十三縣に分ち、また鋲、釘等の鐵材にて數多の記念牌を作り、又大石を以て新たにポン・ド・ラ・レヴォリュシオン[2]（革命橋）

1 Palloy
2 Pont de la Révolution

を造り、而してまた石の小片にて作りたる文鎭にルイ十六世の像を刻みて、これを王に獻呈したりき。

これ謀反にあらず革命なり

かゝる事變の起れりとも知らぬルイ十六世は、十四日例の如く出獵して歸り、始めて此の報を聞きて色を變じ、『これ謀反(レベリオン)なり』[1]と叫べるに、ラ・ロシュフーコール・リアンクール公[2]これを抑へて、『否陛下、これ謀反にあらず、革命(レヴォリュシオン)なり』といひしかば、王も今更の如く憂苦措かず、直ちに輿論の抑壓を止むべしと命令しぬ。武斷派の首領と仰がれしブローリー公も、今は王后に向つて『臣も部下の兵卒を信用する能はずなれり』といひて、辭表を呈したり。

國民議會の活動

國民議會も、この變に遭ひて大いに驚き、直ちに會議を開き、委員を擇びて王に建白せしめ、早急にネッケールを召還すべき事を勸め、一方パリー市の秩序回復に全力を盡すべきを誓はしめんとす。委員等未だ出でざるに、王は突然議會に幸し、口づからネッケール召還のことを議會に告げぬ。議會は意外なる王の態度に一度は驚き、一度は喜び、直ちにパ

1 C'est la rebellion
2 Duc de la Rochefoucauld-Liancourt

リー市に向つて王の諭旨を傳ふるに決せり。

パリー市中の警戒

翌七月十五日、議會は五十人の委員をパリー市に送れり。委員等がパリーに着し市内に入らんとするや、恰も戰場に入るが如き困難と危險とに遭遇せり。唯見る、市街の商店は悉く戶を閉ぢ、會堂その他の大建築物には掩堡を築きて、防禦の手配嚴重に、市街戰の準備全く成りて、往來は車馬の通行を禁じたり。當時イギリスより來れる四人の旅客は、バレー・ロアヤールなる一旅舍に宿泊しゐたりしが、七月十四日以後市街に出でんと試みし事三回、市廳選擧人會の證明狀を携へたるに拘らず、その都度途中にて市民の爲に拒まれて、市外に出づる事能はず、十九日に至り始めて嚴重なる身體檢査を受け、ピストルその他身邊の武器悉く沒收せられし上にて、辛うじて通行する事を許されたりといふ。すべて市中の武器を藏すと認められたる限りの民家にして、掠奪を被らざるは無かりき。されど此の間に、國民衞兵は平服のまゝ市中を巡邏して秩序を戒め居たりしかば、かの五十人の委員等は、この國民衞兵

の助力に依り辛じて市廳に達し、選擧人會に臨むことを得たり。

市會委員の困憊

この時選擧人等は連日市廳の一室に閉居せしめられ、多くは疲勞困憊の極、腰掛の上に倒れて昏睡しゐたり。しかも襤褸をまとへる細民等は絶えず入來りて、『パンを與へよ』『武器を與へよ』と絶叫しつゝ、彼等を苦めしかば、選擧人等は徒らに會議を開きて、或はパンを輸入すべきことを決議し、或はバスチーユ攻撃を爲せる人々に月桂冠を贈る決議をなすなど、如何にもして暴民を慰撫することに全力を盡し居たり。かくて五十人の委員等の姿の選擧人會に現るゝや、人民等は一齊に國民議會萬歳を叫び、口々に、王は何處にありやと問へり。その時選擧人等は委員寺に向ひ、今日の狀勢、王自らパリー市に幸して、最近の事件に對し、パリー市を罰せざることを宣言するに非ざれば、秩序回復は絶望なりと告げしかば、委員等も此の言を諒として、これを王に報告せんと約して去れるも、心中、この事の實現の困難なるを思ひて憂慮せり。

十五日の夜、委員等はヴェルサイユに歸り、國民議會にこれを報告せり。

王をパリー市に招請す

國民議會は協議の結果、民間に最も人望ある百人の議員を擇び、これを王に從はしめてパリー市に送る事とし、これを以て王の心を動かさんとしたり。王は國民議會の勸告を受くるや、平日の優柔不斷にも似ず、王后の諫止をも斥けて、直ちにパリー行の決心を定め、七月十七日出發の命令を下しぬ。其の前、十六日に、ネッケールと共に免職せられしモンモレン、ピュイセギュール[1]、ラ・リュゼルヌ[2]を再び復職し、保守主義のバランテン[3]、ローラン・ド・ヴィルドニル[4]を免じ、その補缺はネッケール歸著の後に決することとし、一方パリー市のみならず、地方諸都市にも、各その國民衞兵を備ふることを公許せり。

先發の議員等王の來都を豫告す

七月十七日の午前一時頃、ドリュートル[5]以下十二名の國民議會委員は、先發してパリー市に到着し、王自らパリー市に來るべきことを豫告せるに、選擧人會は忽ち蘇生の思ひを爲し、急に歡迎の準備を始めたり。

先づ議事堂に高く王座を設け、前面時計堂に、『フランス人の父にして、自由の民の王なるルイ十六世』の數文字を透かし、直ちに王の眼に入る樣

1 Puységur
2 La Luzeine
3 Barantin
4 Laurent de Villedenil
5 Deleutre
6 Louis XVI, Père des Française et Roi des Peuple libre

にしつらふなど、宛も祭日の設けをする如く勇み立てば、感じ易く、物見高きパリーの市民は、早くも祭日氣分になりて、口々に、『王は吾等の意志を行へり』などいひて歡び合ひ、王歡迎の裝飾の花やかに成るを見て、嬉笑し合へり。

王、パリー市に赴く

さて七月十七日は、早朝より王は起出でゝ、先づ遺言狀に署名し、死する前に行ふ聖餐拜受式を了り、この時までも諫止して止まざりし王后の言葉には耳をも假さず、護衞として百名の騎兵と、少數の歩兵及び國民衞兵とを從へたるのみにて、ヴェルサイユの王宮を出でぬ。共に從へる國民議會委員の先頭には、議長バイイーありラファイエットあり、ラーリー・トランダルあり、その他最近の議會に雄辯の花を唉かせ、人民の間に著名となりし人物はみな其の列中に在り。たゞ一人ミラボーの姿の見えざるは惜しけれど、彼はこれより先き、其の父逝去のことありて、これが葬式のため缺席せるなり。

行列の歩みは甚だ遲々として、パリーに達せるは漸く其の日の午後三時なりき。此の途中、頻りに浮說ありて、オルレヤン公の一派暴漢を儻ひて、王を襲擊せしめんとする計畫ありなど、眞しやかに取沙汰せられしが、別に異變の兆も見えず、王は人民の湧くが如き喝采聲裡に國都に入りぬ。『王來る！王來る！』人民は此の叫聲に依りて、直ちにパンと自由とを得たる如くに感ぜり。選擧人會もこれに依りて自家の生命の安全を保障し得たるが如くに感ぜり。

人民王を歡迎す

バリーの國民衞兵は、[1]ポン・ド・ジュールにてヴェルサイユの國民衞兵と交代せり。やがて行列は市廳の門を入りぬ。王は馬車より下りて內庭に立てば、國民議會を代表して議長バイイー恭しく王に三色の徽章を呈し、『陛下願くはフランス國民の表章を受けさせ給へ』といひしに、王は莞爾としてこれを受け、直ちに採りて其の帽に著けぬ。

バイイー王に三色章を呈す

三色章の由來

註　此の三色章につき一言すべき必要あり。はじめ、カミール・デムレンが發案に依つて、綠色の徽章を用ひたれど、これはオルレヤン公家の色章なりとて、白青紅の三色章を用ふることとなりしなり。たゞし此の三色を用ひし理由

1 Pont de Jules

は明らかならず。たゞ軍隊にては其の所屬を分つために、三個の異れる色を用ふることは、古くより珍しからぬことにして、イギリスも、ドイツも、みな同じ。現今にてもドイツの大學生の組合が、帽及び飾り襷に三色を用ふるも其の意は同じ。かくてフランスの白・青・紅三色を用ふるにつきては、白はブルボン王家を、青は貴族を、紅は平民を、象徴して、やがてフランス全國民を象徴する所以なりといひ、或は白は純潔、青は崇高、紅は熱誠の表現なりといふものあれど、これ恐らく後より附會せるに過ぎざるべし。思ふに當時深き理由もなく、或人人が目を惹きやすき三色を取りしを、他の人が考もなく雷同模倣せしにあらざるか。

王大いに民意を容る

王が入都早々人民の多數と同じく三色の徽章を佩びたるは、いたく彼等を感動悦喜せしめたり。更に王は、國民衞兵設置の承認を與へ、パリーの市制を改め、從來の町人頭を改めて市長を置くこととし、市廳の樓臺に出でて、親らこれを人民に宣示せり。その聲は低くして聽き難かりしが、傍に在りしラリー・トランダル引取りてこれを敷衍し、立派なる大演説として人民に傳へしかば、人民は歡呼してこれを迎へたり。

かくて王はバイイーを最初のパリー市長に、ラファイエットを國民衞兵の司令官に任命せり。之より王は直ちにセント・ジェネヴィエーヴ[1]寺に執行せられたる宗教上の儀式に臨みしが、牧師クロー・ド・フォーシェ[2]、十四日の遭難者のために追弔の演説を爲し、儀式訖るや、王は卽日ヴェルサイユに還りぬ。

1 Sainte Geneviève
2 Abbé Claude Fauchet

第二章　各地方の動搖

一　貴族の脫走とパリー市の不安

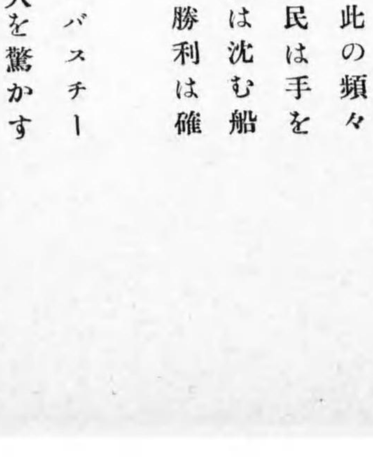
朝廷黨の狼狽

國民議會の議員等は、バスチーユ破壞を以て革命の一段落と爲し、爾後は順潮に改革の事徐々として成るべきを思へり。これに反して朝廷の黨與は、事前に於て得意滿幅なりしだけ、今や此の豫期に反したる形勢の變轉に遭ひて、恐慌惜く所を知らず、陰謀の中心たりしアルトア伯の如き、殊に人民の己れを惡む事深きを悟り、僅に一身の危險を脫すべく、倉皇として國外に奔れり。王弟すら既に斯くの如し、その餘ランベスク公、フランシュ・コンテ公以下の貴族等は、相率ゐてイタリヤの[1]トリノに逃れ、所謂[2]エミグレー（脫走人）を載せたる馬車は、これを初めとして陸續國境を越えぬ。就中[3]ポリニャック公爵夫人、同伯爵夫人兩人は、元來品操甚だ高からず、亂行放逸の結果莫大なる借財を負ひて、世間指彈の的

脫走人相繼ぐ

たりしかば、數々朝廷より斥けられんとしたるに拘らず、王后が彼等を寵遇せる餘り、却つて王に勸めて彼等の借財を賠償しやりたるが、これが爲に社會の非難は一層高まり、餘波は延いて王后の身上に及びたり。その勢の激しきには、王后もさすがに敵しがね、遂に自ら諭して、彼等二人を國外に去らしめぬ。此の頻々たる貴族の脫走を見て、人民は手を拍つて喜んで曰く、『見よ、鼠は沈む船より去りつゝあり、吾等の勝利は確實なり』と。

「鼠は沈む船より去りつつあり」



アルトア伯

騷亂後のパリー市

パリー市に於ては、かのバスチーユ騷動の餘燼尙靜まらず、恰も大地震の跡に弱き餘震の屢〻人を驚かすが如くなりき。幸ひに新市長バイイーが非常なる努力に依りて、多少沈靜には赴きしかど、何よりも國民衞兵を指揮する權力が市長の手中に存せざりしことは、大なる弱點たりしを免れず。その故は、國民衞兵

1 Torino (Turin)
2 Emigrès
3 Jules, Duchesse de Polignac
4 Dianne, Comtesse de Polignac

の司令官たりしラファイエットに、往々全國國民衛兵の統帥となりて、勢力を揮はんとする野心あり、而して彼は自由主義を信奉せるにも拘らず、細民を忌み嫌ふこと甚だしく、國民衛兵をも專ら中等社會より徵集せんとし、之が爲故らに兵の服裝を華美高貴の物たらしめき。かゝる勢なれば、彼と、彼に率ゐらるゝ部下との素より市長の命令に從順なるべくもあらず、バイイーは徒らに焦燥するのみにて事功は擧らず、窘窮の狀、眞に同情に値するものありき。彼は妻子を携へてオテル・ド・ヴィル(市廳)[1]に引移り、日夜政務に精勵せしが、下にこれを扶翼する市會あるにあらず、選擧人會は一時パリー市の實權を握りゐたるも、騷擾の前後苦しき奔走に勞れて、再び市政に執掌する氣力を失ひ、加之一方に選擧人會を非法の團體として非難する聲もあり、新たに市長の任命せられしを幸ひ、彼等はこれをよき潮合に、一切を市長の肩上に負荷せしめて退き去れり。かくして今や孤獨に殘されたる市長バイイーは、日々その事務卓の邊に雨下し來れるパリー六十區及び新興幾十の俱樂部よりの請

バイイー新市長の難境

1 Hôtel de Ville

願書の、一としてパンの缺乏を訴へざるものなきを見て、差當りこれが救濟の方法を講ずべく、自ら給養委員會(コミテー・ド・シュブシスタンス)[1]に長とし、人を四方に派して穀物を買收せしめ、これを廉價にて市民に賣下げ、以て穀價を平準ならしめんとせり。元來食糧缺乏の原因は、農民等が國都の騷擾のため穀物を掠奪せられんことを惧れ、自ら穀物を輸送するに努めざりし結果なれば、この法決して當らざるに非ざれども、かくの如き手段にて長きを支ふることは困難なり。彼は漸くにして困憊し、遂に書を國民議會の舊友に寄せ、パリー市のために助力を要請するに至りぬ。

フーロン事件

曩に七月十四日ネッケール辭職の時、一時其の後繼者たりしフーロン[2]といふもの、『人民は饑ゆれば草を食うても生息し得んに』と放言せりといふ噂傳はりしため、人民は憤慨して、フーロンを前警察長ド・サルチーヌ[3]の別莊に襲ひ、これを捕へて市廳に引行きたる事件あり。パリーのアンタンダンなりしベルチエー[4]はフーロンの女婿なるが、同じく捕へられて引かれ來れり。細民等はバイイーに向ひ、喧囂して此の兩人を嚴

1 Comité de Subsistence
2 Foullon
3 de Sartine
4 Berthier

罰せんことを要求せり。兩人はバイイーの足を抱きて切りに救助を求め、バイイーも此の處置にはほとほと當惑せり。しかもラファイエットは彼を助けず、市廳に在りし僅小の國民衞兵は、敢へて熱心に暴民を制する事をなさざりき。バイイーは公衆に向ひ、『罪科は國民の定めたる正當の方法にて斷ずべし』と說き諭したれども、群衆は決して耳を假さず、遂に市長の優柔をもどかしとし、やがて二人を街上に引行き、殆ど市長の面前にて、街燈に吊上げてこれを絞殺したり。

國民議會の警告

國民議會はもはやパリーは安靜なりと思ひて油斷せる時、以上の如き頻々たる動亂の報告を得て、今更の如く驚慌措くところを知らず、曩に七月十七日の議會に於て、ラリー・トランダルは、人民等既に自由を得たる上は、秩序を重んじ、國法を守るべきことを諭告すべしと提議せるに、ミラボーはこれを斥けて、今の時に百の諭告も何の效果あらん、吾等は一日も早く合理的なる取締規定を作らざるべからずと喝破したりしが、こゝに至りて議會は漸く覺る所あり、倉皇先づ地方一般に對し諭告を發すると共に、パリー市には速かに市會議員の選擧を行ふべきを提議し、ラファイエットには、秩序回復に努力すべきを要請せり。かくてパリー選擧人會は解散し、百八十二人の市會議員は、秩序回復に努めたり。

二　地方動亂の種々相

地方動搖の形勢

議會に於てミラボーの豫言せるに違はず、地方に於ては、國民議會の警告は果して寸效をも奏せざりき。動亂は日を追ひて表面に顯れ來りぬ。元來地方人民は封建的壓迫に苦しむこと久しかりければ、今や漠然國民議會が何等かの方法にて彼等の負擔を輕減しくるゝならんと考へ、日々翹首して國都の消息を待てり。當時或地方人よりの書狀に『民衆は一日バリーの新聞を廢せんよりは、むしろ四十八時間食事を廢せんとす』といへり。又『何人も最近の消息を聽くこと無しに晩餐に向ふを欲せず』と。彼等は國民議會と朝廷との爭ひに一喜一憂せるなり。既にしてネッケール免職の報告到るや、動亂の形勢は一夜に成りぬ。

ドーフィネー州の都グルノーブル市にては、さすが國民議會の初めに當り、率先民主的運動を起したる土地だけありて、飛報に接すると等しく、忽ち數千の市民はセン・ルイの大伽藍に集まり、『政府は若し國民議會を解散するの擧動に出でば、吾等は決して租稅を支拂はざるべし』と決議したり。レンヌ市にては、モロー[1]以下の法律學生、要塞を襲ひて武器を奪はんとし、同地軍隊の司令官ランジュロン伯[2]は、學生に對し發射すべきことを命令せるも、兵士等肯かずして、却つて彼等に對し親睦の意を示せり。ブレスト[3]港にては、暴徒は二千人の水夫及び繩作りと共に、近隣の砲臺を占領せり。フォレー[4]にては第三部選擧人等はモンブリソン[5]に會合し、『政權の濫用を防遏すべく、財産全部を傾けて、最後の血の一滴まで奮闘すべし』と誓盟せり。

ネッケール失脚の報と各地の動搖

更にまた交通不便の遠地にては、ネッケール免職の報知と共に、バスチーユ陷落の警報同時に到着せり。ロン・ル・ソーリニエー[6]にては、ネッケール失脚の飛報を手にするや、七月十九日市民三千人市廳に集合し、次いで二十二日には國民衞兵組織に著手したりき。リヨン市よりは上下貴賤各級の市民連名して、政府に對し一大抗議を提出せり。これより先き同市にては、七月二日より三日に亙り祭事あり、その際紛擾起りて人民難儀せしより鎭壓のため、中等社會の青年八百人相集りてガルド・ブルジョアーズ[1]（中流衞兵）を組織したるが、これ後の國民衞兵の前身たり。

マスカデン

人民は一般に彼等の好む香水の名にとりて、マスカデン[2]と綽名せり。

かくの如くにして、全國到る處反抗的精神鬱勃たる形勢なれば、よしや朝廷側の豫期せし如く、武力を用ひてパリー及び國民議會の壓迫に成功するを得たりとも、これが爲却つて全國に一大内亂を爆發せしむる導火となりしならん。しかも貴族等の實勢に迂なる、元帥ブローリー[1]の如き、一度パリーに失敗せるにも懲りず、さもあらばあれ、脚一度パリー市を出づれば、軍隊は舊に依りて上官に從順なるべく、將軍の權威は絶對無上なるべしと信じ、先づ國の東境に走りて、こゝに徐ろに回復の策を運らさんとし、バスチーユ事件の飛報未だ着せざるに先だち、七

ブローリー將軍の失脚盲動

1 Moreau
2 Comte de Langeron
3 Brest
4 Forez
5 Monbrison
6 Lons le Saurinier

1 Garde Bourgeoise
2 Mascadins

月十六日の夜を以て長驅してセダンに入り、翌日直ちに市民に布告し、[1]その貯藏する武器一切を獻納すべき事を命令せるに、市民の多くは深く怪まずして、將軍の命を奉せんとせり。恰もバリーの一寶石商の難を避けて此の地に來れるものあり、市民に向ひて七月十四日の事變の巨細を語り、ブローリー將軍また憫れむべきエミグレー（脫走者）の一人に過ぎざることを告げたり。こゝに於て市民は一時に憤激し、先きに獻納せんとせし武器を執りて、直ちに要塞を攻撃せるに、守備兵は敢へて抵抗を試みざるのみか、反つて市民等と聲を合せて、『第三部萬歳（ヴイーヴ・ル・チエル・エタ）』[2]を高唱し、ブローリー將軍は辛うじて一婦人の助けを得、纔に身を以てのがれたり。されど彼はなほも懲りずまに、此の度は去つてヴエルダン[3]に入りしが、こゝにても同一の運命に遭遇し、要塞は人民の圍む所となり、ブローリーは這々逃れてメッツ[4]に入りぬ。しかも此の地は彼の舊き任地にて恩顧も者の少からざりしに似ず、守備兵は堅く拒んで彼の入營をすら許さざれば、さすが頑冥の老將軍も、今や陰謀の末路を知りて、深く時

1 Sélan
2 Vive le tiers état
3 Verdun
4 Metz

運の非なるを慨し、孤影悄然、祖國の國境を越えて、[1]ルクセンブルグ公國に亡命するに至りぬ。

かやうにして全國各地の要塞多く人民の占領する所となり、軍隊は戈を反して彼等を迎へ、兵士と人民とは互に手を握りて味方となりぬ。要塞の占領に次いでは、貴族の邸宅の攻撃も行はれたり。元來地方貴族の邸宅は、封建の餘習として、中世の城廓そのまゝの形を稍變へたるもの、又は依然として城廓の原形を嚴存せるものにして、巍然たる結構人民を威嚇しゐたるが、こゝに至りて彼等が餘憤の迸る所、所在劫掠を免れざりき。これを[2]ゲール・ヴー・シャトー（對邸宅戰爭）といへり。蓋しバスチーユ劫掠の風潮の地方に蔓延せるものといふべし。これを或はオルレヤン公の徒黨が煽動に出づとする者もあれども、バリーに於てすら、オルレヤン公一派の暗中飛躍は偶然暴動の刺戟となりしのみ、直接の原動力とは認めがたし。況んや地方到る處に騷擾の種子を播くほどの大活動を演ぜしめんには、恐らくオルレヤン公の富力世界を傾くと

1 Luxemburg
2 Guèrres aux Châteaux

するも、尚及ばざるべし。

古文書燒棄

小農民と小作人

此の際多くの場合に於て、農民等は必ずしも邸宅の主人に對し反感ありて暴掠を行へるに非ず、例へば或貴族の邸宅にては、農民襲撃の際、邸主の夫人折しも病床に在りしかば、農民等は殊に遠慮して、これに無禮を加ふることなく、たゞ邸中舊く藏する古文書を取出して、これを燒却し去れり。かくの如き例他にも多く、大抵は文書の破棄を目的とし、その中にも小作借地人の權利に關する證文多かりき。

抑もフランスの各地方には小農民の階級あり。彼等はいはゆる小作人にはあらずして、小地面の持主たり。而して大地面の持主と同じく土地を賣買し入質する自由を有せるも、理論の上より、また歴史の上よりして、その土地はもと貴族の領地の一部なる事、文書の明記する所なれば、土地賣買の場合は素より、婚姻の儀式を擧ぐるに際しても、小農民等は一々土地の舊領主たり權利者たる貴族に、特別の稅を支拂はざるべからず。尤も稅といふも名のみの至つて少額にて、僅かに貴族が舊領主たる歴史的權利を認むる徴證たるに過ぎず、多くは鷄一羽、穀物一袋の獻納にて事足る所もありけれど、やはり農民に取りて義務たるには相違なく、而も此の義務を懈れば、貴族は小農民を迫害する權利を有せり。一方に此等小農民等は今や長年月の習慣にて、本來自己の所有物の如く思惟し居る土地に對し、いつまでも舊き權利を湮滅すべき古文書の破壞を屑とせず、さてこそ一擧にして此の權利を企つるに至りしなり。

メタイエー

これ等小農民の外に、なほメタイエー[1]といふ一種の小作人あり、地主はこれに農作物の種子と根株とを與へ、地代の代りに作物の幾割かを納入せしむる習慣あり。メタイエーは土地の所有者ならざれば、これを抵當として金を借ることを得ず、從つて其の土地に改良を加へ、その生産力を增さんとする努力もなく、その日その日を過せば足ると思へり。されば彼等は平常他の地面持の小農民に比べて、自家の身分の劣るを見ては、不滿の情に堪へざりき。蓋し農民社會の心理として、自己

1 Métayer

の耕作する土地は、自然自己の所有なるが如くに考へんとする傾向あり。これ何の法理上の根據なき一片の希望たり理想たるに過ぎざれど、また彼等としては、無理ならぬ感情なりといはざるべからず。かくして彼等は自己の額に汗して得たる勞力の結果を、優遊安坐して取立つる地主の權利に對して、不平ならざるを得ず、對邸宅戰爭の當面の原因は、此の理由なき不平の感情に基づく。かの愛國心や自由主義の理想の如き、彼等を動かすには、あまり高遠に、あまりに微力なり。まして

寺院内特別坐席の破壞

オルレヤン公一派の煽動の如き、假令之ありとするも、既に燃出せる薪に多少の油を濺ぐ役目をつとめしに過ぎざりしならん。

また更に農民等が貴族に對する階級的不平の暴發する所、村の寺院内に貴族のため特に設けられたる高貴の坐席を破壞する者あり。貴族側にても祖先を尊重する情よりして、頑然これが防遏に努むる所あり。されば、ド・マルセーヌ[1]といふ紳士は、配下の農民等が村の寺院にある其の家族の坐席を毀たんとして、寺内に亂入するや、彼は拔劍して神

1 De Marseigne

に祈り、『神よ、わが及に流血するを許したまへ』と叫び、意氣軒昂、寄らば討たんと構へたりしかば、農民等も其の氣勢に呑まれて辟易し、何事をもなさずして寺外に逃去りき。

當年の不作

以上貴族に對する反感を外にして、なほ暴動の近因としては、當時農民が實際上の困窮を數へざるべからず。前年卽ち一七七八年七月十一日、フランスの各地方に異常の降雹あり、作物の被害非常にして、或地方にては、收獲皆無に歸せるものあり、パンの價一時に騰貴せり。尤もパンの缺乏より起る暴動は、地方よりも都會に著しかりき。

市民と農民との反目

これを大體より觀れば、北部の地方は、借地人割合に富裕にして、勞働者にも十分の賃銀を支拂ひしかば、革命の騷亂以來、不意に年貢、賦役その他總べての義務の解除せられしため、地主も小農自身も不時に收入、の一部を失ひて當惑せしに止まり、又地主自ら農作を爲す地方に在りても、人民が自由の行動を爲す以上に、地主の生命財產に對し損害を加ふる事は多からざりき。これに反して、中部及び南部、殊にメタイエー

の仕組行はるゝ地方にては、地主たる貴族は家を燒かれ、財產を破壞せられ、時に或は身體を傷けられ、生命を失ふものすら有りき。フランシュ・コンテ[1]にては、一個月間殆ど毎日に邸宅の燒討ありき。ベズール[2]といへる小市の國民衞兵は、農民の一揆を鎭壓せんとせしに、農民等は之を擊退せるのみならず、反つて逆襲して、一時ベズール市を占領せり。マコンネー[3]にては、一揆の人數非常に多く、勢烈しくして、十四日間に七十三個所の邸宅を燒き、暴動に加盟せざる二百二十人の農民の家も燒却せられたりき。かくて近隣の諸市聯合して、一揆と一大合戰を爲し、漸くにしてこれを鎭定するを得たり。市と村落との間に初めより感情の疎隔あることは、此の一事にても明白なるべし。

「暴徒來」の云ふ蜚語

此の騷擾の間、何時誰人の口より出づるともなく、種々の流言浮說は行はれて、人心惘々その堵に安んぜず、恰も曩にバスチーユ破壞の前後、パリー市民が、皆何處よりか恐ろしき陰謀の魔の手の彼等を捉へつゝある如き不安を感じたると同樣の、取留もなき陰鬱なる不安は頻りに

1 Franche-Comté
2 Besoul
3 Mâconnais

地方の人民を脅かせるなり。例へば『暴徒(カラボー)[1]襲來せんとす』といふ囁きは、甲より乙へ意味あり氣に傳へられしが、その『暴徒(カラボー)』とは何ぞ、その正體は何者なるぞ、朝廷の間者なるか、オルレヤン公派の煽動に出づるか、純粹に不平一揆の暴動なるか、何人もこれを知る者なく、而も『暴徒來』の叫聲はいつまでも人々の耳朶を打ちて止まざりき。されば或地方にては、王が暴徒を儆ひて人民に壓虐を加へんとすといひて、公然宣布する必要ありし程なりき。

尼院の恐惶

諸人は此等の『暴徒』の何の爲に來るか、何を爲さんとして來るかを考ふる遑もなく、一に暴徒來りつゝありと信じて惶惑するのみ。殊に人烟稀少にして交通少き地方に、漠然たる恐惶は甚だしかりき。されば[2]ノートル・ダーム・デ・プレー尼院の主尼と、在院の尼十一人とは、この『暴徒來』の聲を耳にすると等しく、恐惶措く所を知らず、深夜徒步のまゝ遁れ出で、翌朝泥濘に塗れたる憐れなる姿をトロア[3]市に現しき。[4]ゲレー市にては、七月廿九日の午後五時頃、突如として『暴徒來』の噂傳はるや、

1 Carrabots
2 Nôtre Dame des Prés
3 Troyes
4 Guret

婦人等は市外に逃出で、藪や茂みの間に隠れ、男子は武器を執りて市廳に參集し、市の民兵を援助して街上を警戒せるのみならず、市の名士等は臨時防禦委員會を組織し、近隣の町村に使を走せて援助を求め、これら救援の人々を接待するために、製パン人をして終夜パンを焼かしめ、かくて續々參集し來る近隣の援兵は八千人を越え、やがて一萬にも及びけれど、彼の想像せられたる敵は、遂に隻影をも現さざりき。

トロア市の「暴徒來」

シャトー・チエリーの喜劇

シャトー・チエリー[1]にては、七月二十八日、二千五百人の暴徒、ソアッソン街道に推寄せつゝありとの報知來れり。非常を報ずる太鼓は聲々と打鳴らされ、市民は手に手に武器を執りつゝ市外に出でて之を迎撃せんとして、街道を推行けり。途中人あり、告げて曰く『暴徒は今ブルッシュ[3]市を焚きつゝあり』と。市民群は足を早めて現場に向ひしに、火災と見しは屋根の上に太陽の光線の反射せるなりけり。然るに復報ずる者あり、『暴徒はエッソンム[4]に於て今やマルヌ[5]河を渡渉しつゝあり』といへり。民兵は再び勞れたる足を曳きてエッソンムに驅付けしに、何事ぞ、婦人の一團あり。今や我が勇敢なるシャトー・チエリー市の秩序擁護者の來るを見て、婦人等は却つて之を暴徒なりと疑ひ、哀叫して救助を求め、かくて此の喜劇の終局を告げたり。

1 Château-Thierry　5 Marne
2 Soisson
3 Roureches
4 Essommes

外國兵侵寇の警報

ショーモン[1]にては、一人汚塵に塗れたる怪漢あり、來りて『暴徒近づく』と告げぬ。推問するに、何處にて何時見しとも答ふることなし。而も市民は倉皇として此の假想の敵に對して、抗戰の準備を始めたりき。

またやゝ趣を異にして、外國軍來襲すとの浮說も行はれぬ。例へばブリーヴ[2]にては、イギリスの軍隊ボルドー[3]に來寇しつゝありといふ者あり。チュール[4]にては、オーストリヤ軍リヨンより進みつゝありといふ警報四方に飛びぬ。之を聞くと等しく、全市民は皆武器を執り、近隣の農民を合せて其の勢數千人、みな面上に敵愾の血を漲らしつゝ、外敵を攘ふべく隊伍を整へて前進せるに、途中三人のイタリヤ人の僧侶に遭ひ之を間諜と誤解し、逸り男の面々彼等を絞殺せんとせしに、さすが理非を辨へたる辯護士ブリヴァル[5]あり、彼公衆に人望ありしかば、僧侶の爲

1 Chaumont
2 Brive
3 Bordeaux
4 Thulle
5 Brival

に彼等を宥め諭して、斯る暴擧に走ることを制止するを得たり。

アルトア伯襲來の誤報

ユーゼルシュ[1]市にては、七月三十日午前四時頃、アルトア伯の率ゐる一萬四千の軍隊、今やボルドーに向つて進行の途中、沿道の人家を焼きつつあり、目的は國民議會に迫りて、これを解散せしめんとするに在りといふ流説紛々たり。市民狼狽、策の出づるところを知らず、紙幣を焼棄するものあり、婦女子は村里に隠匿し、男子は集合して防禦の手段を議し、チュール及びブリーヴに使を遣りて救援を求め、近村よりは、鋤鍬また は十字鍬を擔へる農民等の馳せ集るもの引きも切らず、總勢一萬人に及びきといふ。

國民衛兵農民の敵となる

かく全國一般恐惶熱に襲はれし以來、市府にては此處にも彼處にも國民衛兵組織の企起りて、バリー市の先例は忽ちにして全國を風靡しき。元來國民衛兵は中世以來の舊制なれども、中頃、中央集權の結果次第に廢せられて、バリーの如きは殊に嚴禁せられゐたり。然れども地方には尚舊制の存するものも亦少からざりき。例へばゲレー市、ヴェルノン市の如き、舊國民衛兵は數百人に上れり。今や其の勢力を加ふるや、七月二十九日、十六歳より二十歳までの男子を悉く國民衛兵に編入し、隊制を整へ、士官を任命し、日夜街上を警戒せしめたり。他の諸市にても多く之に倣ひしが、すべて市の國民衛兵は一般に中等社會の味方にて、その利益を擁護するに努め、從つて暴民のパン奪掠の擧も一時屏息したり。

1 Uzerches

市民と農民との反撥

元來フランスにては、貴族平民間の區別嚴しきのみならず、市民と地方の農民との間にも深き溝渠あり、利害の衝突感情の反撥ありて、とかく互に融和せず、市民は農民を賤み、農民は市民を憎みゐたり。されば農民の一揆には市民の同情なきのみならず、却つて彼等は悦んでこれが鎮壓に力を貸せり。フランス領フランドル地方にては、[1]ヅェイ國民衛兵等、多數の暴動農民を捕縛し、同市のパールマンは之を裁判して、その中十二人を絞刑に處せり。[2]マコンネー及び[3]ボージョレー地方にては、[4]マコン市の新選委員等、國民衛兵を率ゐて地方を巡廻し、農民約二十人を

1 Douai
2 Maconnais
3 Beaujolais
4 Mâcon

捕へ、裁判を用ふる事なく之を處刑せり。更に特筆すべきは、リヨン市の國民衞兵が、遙々ドーフィネー地方に向つて遠征を爲し、同所の農民一揆と會戰して、その八十人を殺戮し、六十人を捕虜とせる事なり。此の援助を受けたるグルノーブル市の市民は深く之を德とし、記念柱を建て、リヨン人の勇武を稱揚せり。されば後に恐嚇政治の時代に及び、鋤鍬を擔げる農民等リヨン市を襲撃せしは、この時の怨に報いしなり。

地方的色彩

なほ暴動が地方によりて自ら其の色彩を異にする事も注目に値すべし。さればアーサー・ヤングの觀察に據るも、地方の國境に近き地方例へばフランドル[1]などにては、一揆は貴族の邸宅に破壞を行はず、關稅署、稅務署、鹽稅署の出張所など平生彼等を誅求する官廳を攻撃せり。ノルマンヂー[2]地方にては、イギリスとの條約に依り、農業の大器械輸入せられ、勞働者ために業を失ひしを怨みて、一揆は專ら此の機械の破棄に努めたり。エルザス[3]及びジュンドガウ[4]にては、ユダヤの富豪の阪扈する土地柄とて、ユダヤ人の家多く劫掠を被りき。

1 Franlre
2 Normandie
3 Elsass(Alsace)
4 Sundgau

市民内部の階級爭鬪

要するに、到る處に醞結せる不平不滿は、この機會に乘じて勃發せり。しかも各人その不平の異なる如く、その目的も方法も異なれり。

農民と市民と相反噬する如く、市民の中にも中產階級と下層階級とは相軋轢せり。パリー市に於ける勞働者の困苦と、その暴動の始終とは前にいへるが如し。地方の大都市に在りても、その事情は異なる所なかりき。

パリー市に次ぐフランスの大都會はリヨンなり。リヨンは革命當時十五萬の人口を有し、一七八九年國民議會選擧の際には、マルセイユ、ボルドーの兩市共に、その選擧人會は五十人を以て組織せられしに、リヨン市は百五十人を出したり。リヨンの中產階級は、多く製造業者にて皆富裕なりき。當時は未だ今日の如き大規模の製造工場なく、大製造家にて一時に多數の注文製品ある時は、更に無數の小店主に仕事を分配して、製品を請負はしめたり。この小店主を親方（メートル）といひ、徒弟を使用し、自身も共に勞作せり。併し組合に嚴しき規約ありて、一人の親方

リヨン市の中等階級と下層階級との反撥

は、二人以上の徒弟及び傭勞働者を使用するを得ざる定めなり。また織物、染物など特別の業務に關する特權は、織物組合これを獨占し、從つて組合全體は、富裕なるを得たれど、請負にて仕事を爲す親方等は、その時の景氣により、仕事なければ職工と共に、饑ゑざるを得ず、仕事の忙しき時は、親方の位置も氣樂なれども、世間不景氣なれば、親方も大いに苦む。まして解雇せられし勞働者は喪家の狗の如く、市中を徘徊せり。殊に革命前に於ては、[1]イギリス崇拜熱の影響として、イギリス羅紗の需要盛んなりしかば、リヨン絹は之に壓せられ、工場は皆仕事なきに苦めり。而も餘裕ある資本家は別莊に引籠りて景氣の回復を待つことを得たれども、親方等は日に日に困苦に迫らざるを得ず。況や勞働者は多く解雇せられて業を失ひ、かくて[2]勞働社會（プロレタリヤ）と[2]中等社會（ブルジョアジー）との間の懸隔甚だしきに隨ひ、兩者の反感は益〻昂められたりき。

されば前に述べたる七月二日、三日のリヨン市に於ける祭日の騷動も、其の原因は此の資本家對勞働者の衝突與りて力ありき。當時リヨンの中流市民が、國民衞兵を以てグルノーブル市を助け、ドーフィネーの農民一揆を壓迫せる際、同市の勞働者は市民を助けず、却つて農民の氣勢を添へたりき。

1 Anglomania
2 Proletariat
3 Bourgeoisie

勞働者農民訴ふるに所なし

げにも物價の騰貴こそ、農民にも勞働者にも死活の大問題なりけるに、國民議會の却つてパンの問題に冷淡なりしは、彼等の出身が、多く中產階級の市民にて、細民に對する同情少かりし爲なり。されば此所にも利害の相同じからざりし迹を見るに足れり。後議員[1]サロモンの農民痛苦に關する報告に基き、國民議會はこれが救濟の策を建てたるも、市中の勞働者の困苦に對しては、遂に忘れたるものゝ如く、一言の之に及ぶことなかりき。ひとり國民議會議員等のみならず、かの萬民の利益を說き、革新の理想を說けるルソー以下の民主主義の啓蒙文學者も、同じく農民を對象として他の勞働者を遺れたる如きは、不思議といへば不思議なれど、またこれ、彼等の出身が文學哲學の人にして、中產階級に屬せるがためならずんばあらず。革命始まりて後、彼等中產者は口

1 Solomon

に自由を唱へ、下層民の苦痛に同情せる如き言をなせるも、實は專ら自己の利益を思ふに忙しく、勞働者農民をば、これを利用して朝廷を威嚇し、王權を殺ぐ道具の如く考へ、初めは陽に陰に彼等を煽動して暴動を檀にせしめ、彼等の爲す所漸く度を越えて、秩序に危險なりと見れば、忽ち國民衞兵の力を以てこれを壓迫せんとせり。

中産階級の利己主義

然るに議員の過激黨の或者は、逸早く此の中産階級の私利を計りて不公平なる內情と、勞働者農民等が訴ふるに所なき不平不滿とを看破して、巧みにこれを利用するに至りぬ。ダントン以下の人々は、こゝに彼等が成功の鍵を得たるなり。

過激派下層社會を利用す

第三章　空論に支配せられたる國民議會

一　人權宣言と特權廢止

パリー市の騷擾と國民議會

國民議會は其の後物情依然として平靜に歸せざるに鑒み、先づパリー市に向ひて、秩序維持の警告を發し、國民衞兵司令官ラファイエットに市長と協力すべきことを要請し、また早く正式の市會を召集して、新市長を扶翼すべきことを勸告したり。是に於て七月三十日、パリー市六十區中より新たに三百人の市會議員は選ばれ、市會は諸委員會の委員を選擧せるが、就中給養委員會は直ちに市長バイイーを扶けて、人民救助事に從へり。一方ラファイエットもパレー・ロアヤールを騷擾の中心と認めて、市民の群集することを制禁し、國民衞兵中より番兵を送りて、これを監督せしめたり。

これらの處置に依りて、パリー市は一時靜穩に歸せるものの如くなりしが、これ唯表面の事に過ぎず、騷擾の根原たるパンと勞働との缺乏は依然として除かれず、何時にても危險を勃發すべき禍機を孕めり。加ふるに新聞紙は恰も雨後の筍の如くに發生し、矯激の筆を舞はして人民を煽動しつゝあり。この際に當り、國民議會として爲さゞるべからざる事決して以上に止まらんや。今や議會は非常なる勢力を得たり。この實力を擁して、彼等は先づ着々焦眉の急要ある實際問題を解決して、國民の信賴に酬ゆる所無かるべからず。而も此の一刻をも忽にす可からざる一大危局に當りて、議會は何事を爲しつゝありしか。

騷擾の原因依然として存す

彼等は先づ憲法を制定するに先ち、人權の宣言を中外に布く要ありとし、この理想に走れる閑問題を提げて、甲論乙駁、可否の討議に貴重なる時日を費せり。此の原案は七月十一日ラファイエットによりて議會に提出せられしが、主旨はアメリカの獨立宣言に倣ひ、フランスが人類の幸福の爲盡力しつゝある大趣意を中外に宣揚せんとするに在り。而もアメリカの獨立宣言が、內、民心を固め、外、列國の同情と援助とを乞はんとする實際上の目的に出でたると異なり、秩序の刻々に崩解しつゝあるフランス當時の國情に在りては、此の事議員の虛榮心を滿足せしむる以外に、全然無用の擧たるを免れず。されど議員の多數は自由の美しき空想に憧れて之を歡迎し、提出者たるラファイエットは、パリー國民衞兵の司令官として、議會を去れるに拘らず、この議案の議會劈頭に於て決議せられん事を希望しゐたり。既にして討議に附せらるゝや、先づ人間の義務に關し、吾等は何を言はんとするかといふ質問に對し、グレゴアール[1]、カミュー[2]等は曰く、『人間の意義は明瞭なり。吾等は人間の義務に明瞭なる定義を與へざるべからず』と。ミラボーは獨り斯くの如き言論的遊戲に耽るを好まず、『諸君が人間の權利を宣言せんと欲するは自由なれど、そは憲法の後に置きて可なり。願はくは速かに實務に著手せよ。諸君は貴重なる時間を空費しつゝあり』と警告せるも、空想家大多數を占めたる國民議會は、主義を論じ定義を說くを以て、實際問

議員空想に耽りて緩急を知らず

人權宣言の討議

1 Grégoire
2 Camus

題以上に必要なりと考へたるか、この切迫せる形勢の中に在りて、悠々閑々學術討論會の態を爲して喜べり。

封建的特權一夜にして廢棄せらる

然れども八月四日、調査委員會（コミナー・ダルシエルシエ）[1]の委員長として議員サロモンが朗讀せる報告は、さすがに優長なる空論家等の魂を威嚇するに十分なりき。報告の内容は前章述べたる如き、地方到る所に蜂起せる動亂の實狀にして、貴族富豪の邸宅は燒かれ、稅務署は毀たれ、米穀商は脅かされつゝありて、今や人民の一齊に仰望する所は人權の宣言に非ずして、一塊のパンの問題なる事實は、今更の如くに彼等を感動せしめたり。而して一度感動すれば忽ち熱狂し易きは、フランス人の常なり。先づ新思想に心醉せる貴族等は、此の際大いに自家の貴むべき犧牲奉公の精神を表白するに於て、互に人後に落ちざらんとせり。ラファイエット[2]の從兄弟にしてアメリカ獨立戰爭に功勞ありしノアイユ子爵[3]は先づ演壇に上り、『今や地方を動搖せしめつゝある災禍の根元如何。思ふに禍根は人民が年來苦められゐたる封建的束縛が、この後も尙永存すべきか、將に

1 Comité des Recherches
2 Vicomte de Noailles

廢棄せられんとするか、明白ならざるに依らん。宜しく先づ彼等の爲に此の束縛を解くべきなり』と叫べり。エーギヨン公爵[1]、モンモランシー伯爵[2]、ボーアルネー子爵[3]、ラメート伯爵兄弟[4]、ムノン男爵[5]、レヴィー公爵等の諸貴族相次いで之に同じ、大喝采裡に自己所有の封建的權利の廢止を主張せり。かくて養鳩權、狩獵權、各種の特別稅、其の他地主文書に依る諸種の權利、寺院稅、市が其の附近の土地に對する權利以下、數百年來累積し來れる習慣は、此の一夜の議事に依りて、宛も積水の大河を決するが如き勢を以て崩潰し去りぬ。これを有名なる『八月四日夜の事件』とす。ミラボーの評して『これ一の躁宴なりき』といへるもの、當夜の眞相を穿てり。名譽書記の一人ラリー・トランダル[7]は、議員の熱狂極度に達したるを見、密かに一紙片に書して議長を警め、『議員等は今や自制を失へり。議事を中止するに若かず』と警告せるも、當時の議長たりしブルターニュ選出のシャップリエー[8]は之を肯ぜず、却りて騷擾を煽揚せり。

八月四日夜の躁宴的議事

ともかくも此の一擧に依りて、封建的權利は今や名實共に破壞せら

1 Duc de Aiguillon
2 Comte de Montmorency
3 Vicomte Alexandre de Beauharnais
4 Comtes Charles et Alexandre de Rameth
5 Baron de Menon
6 Duc de Lévis
7 Lally-Tolendal
8 Chapelier

れたり。勿論實際に於ては貴族の特權といふものも、當時は地方騷擾の爲に中止の狀態に在りて、いはゞ既に空しき形骸を葬り去りたるに過ぎざれど、これが爲貴族等が爲せるところ、獻身的の美擧ならずとはいひ難し。空しき形骸とはいへ、その存在する限り、或時期の後には回復する機會も有るべければなり。されど、折角の獻身的行動も其の處置を誤れば、却りて有害となるものなり。八月四日の事件は、人民に對して封建的束縛の解放を宣明すると共に、これに代るべき新負擔を告ぐることを忘れたり。これのみにては、地方動亂の爲に惹起せられたる無政府狀態を是認するに等しく、かくて秩序の破壞は滔々として底止する所を知らざるべく、全國の人民より一個の燈臺として囑望せられたる國民議會は、徒らに騷擾せる人民の後援者として、一層政府の勢力を縮めたるのみ、自ら進んで秩序ある新フランスを建設する能力なく、却つて刻々に國家を無政府の淵に陷れつゝあるを覺らざりしなり。

犧牲的精神も秩序回復に益なし

……二九八

二　議會の狀勢

國民議會がかく非常識の行動を執るに至れる原因の第一は、議員の多數に實務の經驗を有するもの少かりしに由る。彼等の多くは其の平生耽讀するルソー、モンテスキュー、デドロー等啓蒙文學者の議論を、その儘に實行せんとして、熱狂することを知れるのみ。第二に、議員等みな議事に慣熟せざりき。その證據には、彼等の少數者にて組織せる特別委員會に於ては、各自自己の責任を知りて、實際に調査研究もし、まじめに報告書を作り、仕事振りも迅速確實なりしに、一たび議會に出づれば、一定の議事規則といふものもなく、議事に對する大體の方針すら定まらず、爲に不必要に時間を費消し、解決を得ざること多かりき。その不秩序なる一斑をいはゞ、第一に演說の希望者非常に多數にて、それも前以て順序を定めて、適當に進行を圖ることもなし。しかも議員の多數は辯護士にて、從來辯論にて名を獲しもの多ければ、專ら議場の雄辯

議場の亂雜不統一

第三章　空論に支配せられたる國民議會……二九九

家として世に誇らん野心あり、無用の修辭を以て言論を粉飾し、冗漫に流れて、聽者の迷惑するにも頓着することなし。また演壇に上る前後を爭ひ、互に突除けんとし、或は二人同時に演説を始め、喧囂を極むることと屢〻なりき。又傍聽席の取締なければ、聽衆は面白ければ拍手喝采し、氣に入らぬことあれば、無遠慮に怒罵嘲謔して議事を妨ぐるを厭はず。甚だしきに至りては、議員等互に顔を知る者の少きを幸ひ、傍聽人は平然議場の中に闖入し來るも人の咎むるなく、時には起立に加はるものすらありき。議決は濫りに公平を標榜して、些々たる動議をも一々議員の起立に依りて其の賛否を決せんとしたり。[1]ゴドヴィル男の覺書に據れば、斯かる決議を爲す場合、議員等は其の隣席の人の上着の裾を捕へて其の起立を妨げ、時には之を引裂く事も少からず。また反對に、強ひて隣席の議員を起立せしめ、自己に都合よき票決に加はらしめんとして、足を以て其の尻を蹴るなどの暴狀ありき。これら皆議事規則の備はらざるより起り、また未だ政黨としての團結無ければ、豫め同心の

傍聽者の不謹愼

譬を蹴つて起立を促す

Baron de Gaudeville

議員の間に打合せといふものもなく、各人各樣の態度を恣にして議場にのぞみ、その時々の感情思想に依りて、勝手氣儘の言動を爲すに至れるなり。

ミラボーの議事規則案否決せらる

ミラボーは早くより此の亂雜なる議場の弊風を憂ひたるが、當時フランスの民主主義運動に對し、外人殊にイギリス人は多大の興味を寄せて、ヴェルサイユ及びパリーに來り、議會を傍聽する者少からず。フランス人の快濶自由なる精神を喜びながら、その議事の亂雜なる光景に驚くの餘り、知己の議員等に忠言する者もありき。こゝに於てミラボーは、其の知己なるイギリスの辯護士[1]ロミリーの口述を乞うて、イギリス下院の議事規則の大要を筆記せしめ、更に之を自己の部下[2]デュモンをして國語に譯せしめ、ミラボー自ら之に基きて原案を作り、議會に提出して賛成を求めたれど、議員等の多くは、吾等はフランス人なるに、何ぞイギリス人の後塵を拜すべきといふ如き風にて、賛成せんともせず。されどさすがに議員等も、平凡なる議論を長々と聽かしめらるゝに

1 Samuel Romilly
2 Dumont

五分演説案亦否決

倦みしか、エイ選出の議員ブーシュ[1]は八月五日の議事に於て、今後演説を五分間に限る可しとの議案を提出せしが、これも亦用ひられざりき。されど此の動議にして若し成立したりとせば、依りて議場の退屈は救ふことを得たらんも、之が爲にミラボーの大雄辯の如きをも、併せて聽くを得ざるに至りしならん。而して長たらしき演説の連りに議場を倦殺するのみならず、民間の團體若しくは個人よりの請願書は、毎日雨と降り來り、その大部分は、文辭徒らに冗長を極むるのみ、内容の愚劣にして、殆ど一笑にも値せざるものあるに拘らず、議員等は一々丁寧にこれを朗讀せり。

憲法制定の先決二問題

この間に在りて、議員等は未だ政黨政派の形を成さず、混沌の裡に議事を進めゐたりしが、憲法問題の討議に移りて、こゝに漸く黨派的色彩を分つに至れり。

憲法制定の先決問題として先づ議事の中心となれるは、第一に、國會は二院可なるか、一院可なるか。第二に、王に中止權を與ふべきや否や

1 Charles-François Bouche

の問題これなり。

新憲法草案議に上る

さても例の人權宣言の問題は、八月より九月に入りてなほ決する所なく、ルソー生呑の論者徒らに多くして、一字一句の定義のために議論百出歸するところ無かりしが、之も漸く終結を告げ、終に九月に入りて憲法の討議始まり、こゝに劈頭の二問題起り、更に激烈なる紛議を重ぬるに至りぬ。これより先き七月十四日、憲法起草委員會[1]（コミテ・ド・コンスチチユシオン）は選ばれ、ムニエー、タレーラン、アベ・シエース、クレルモン・トンネール、ラリー・トランダル、ボルドー大司教、ル・シャプリエー、ベルガッス[2]の八人委員に選任せられ、ムニエー主査として草案を作り、九月十一日に至りて之を議會に報告せり。然るにムニエーが先づ新議會はイギリスの如く二院たるべしと云ふや、未だ内容の説明をも聞かざるに、異議の聲囂々として起りて滿場を壓せり。議員の中にはイギリスの政體を崇拜する者も少からず、これは一議なく二院論に雷同せるも、多數の議員は理も非もなく、フランス人はイギリスを模倣する必要なし。吾等は獨創の理想を以て自

議會二院論敗る

1 Comité de Constitution
2 Bergasse

ら世界の模範として進まんのみと叫びて、彼等が無用の愛國的虚榮心を滿足せしめんとせり。

かくの如くして九月十一日、委員會の原案は、八十九に對する八百四十九の大多數を以て否決せられ了りぬ。こゝに於てムニエー、ベルガッス、ラリー・トランダル、クレルモン・トンネール、ボルドー大司敎の五人は直ちに憲法起草委員を辭し、九月十四日、タルジェー、ツーレー、デミュニエー、トロンシェ、ラボー・ド・セン・テチエンヌ代りて委員に擧げられたり。ムニエーは更に議員の職をすら辭退せんとしたれど、友人の勸止に遭ひ、また二十八日議長に推選せられしため、辭意を飜すに至りぬ。

王の中止權問題

二院論に優りて議論の花を咲かせしは、國王に中止權（ヴエト）を附與するや否やの問題なり。イギリスの崇拜者は、王は新憲法に依りて完全に中止權を有すべしといひ、反對者は、イギリスの國王と未來のフランス國王とは、根本的に異ならざるべからずと唱へたり。ミラボーは九月一日の演說に、國王の絶對的中止權を主張せり。當時ミラボーが爲に材

1 Thouret
1 Desmeuniers
2 Tronchet
4 Rabout de Saint Etienne

料を供給せるは、イギリス學士會院の名譽會員たる侯爵ド・カッセー（1）なりき。ミラボーは議場に於て絶叫して曰く、『中止權を廢止するは、國家最上の權力を王の手中より奪ひて、議會に與へんとするものなり。然らば余は寧ろコンスタンチノープル府に移住するを喜ばん。かくの如きは一人の專制君主を廢して、却つて千二百人の新しき專制君主を頂くことなればなり』と。ミラボーは深くイギリスの歷史を研究せる結果、眞の國民の輿論在る所に、王も決して不法に中止權を行使する能はず。議會も亦時に眞の國民の輿論を代表せざることあり。かゝる時にこそ王の中止權の必要現る可し。故に王の中止權を廢止するは、却りて王の名によりてする國民の中止權を抑止するに同じく、結果は議會の專恣跳梁に終らんのみと思へるなり。

ミラボー絶對中止權を主張す

かくミラボーは論じたれど、これは偶ま彼のために不利益なる結果を生じたり。之より議員等は彼を以て朝廷に內通するものと疑ひ、而して朝廷はまた決して彼に感謝するところなかりき。これに反して

1 Marquis de Casset

ラファイエットの一時的中止權案

彼のラファイエットは、却つて輕浮なる非實際的の意見を以て、議會の空想家等の人氣に投じたり。彼は此の際[1]一時的中止權案（ヴエトー・シュスパンシブ）を以て時宜に適する處分なりとしたり。これに依れば、王は一回のみ中止權を行ふことを得るも、尙六ケ月の後、議會が依然同一決議を爲せる場合には、再び中止權を行ふを得ずといふに在り。然れどもこれたゞ王をして徒らに議會の鼻息を窺はしむる結果を生ぜんのみ、眞の中止權の效力を有せざることは明白なり。然るに朝廷側に在りて、ネッケール先づこれに贊成し、王に勸めて、王親ら議會に赴き、一時的中止權の提案に對し贊成の意あることを宣明せしめたり。かくて三百三十五に對する六百八十四の大多數を以て、ラファイエットの原案は議會を通過したり。

議會の分野

この票決は始めて明白に議會の分野を決定せり。舊狀のまゝに王政主義を墨守する最も頑固なる保守黨、卽ち現今の語を用ふれば、所謂極右黨は[2]デュヴァル・デプレメニル、[3]子爵ミラボー（『權のミラボー』の弟）等を中心として少數の貴族より成り、其の勢力甚だ弱く、たゞ事ある毎に妨害を試

極端保守黨

1 Veto suspensif
2 Duval d'Espremesnil
3 Vicomte de Mirabeau(Mirabeau-Tonneau)

みて一時の快を取れるのみ。同じく極端保守黨ながら、エイ大司敎と少數牧師議員とは別に一派を爲し、專ら敎會擁護を己れの任とせり。

溫和保守黨

次に、溫和保守黨は、ムニエー、マルエーを首領として、漸進主義を理想とし、[1]モーリー、[2]カザール、[3]モンロシエー等の雄辯家も之に屬す。彼等は舊封建的王政を維持せんとするにはあらず、たゞ極端なる革新を厭ひ、根本的破壞を避けんとするのみ。中にもマルエーは、クレルモン・トンネール、[4]ラングル司敎等と共に政黨組織の計畫を爲し、八月に入りて十五人の委員を選び、先づ議會を支配すべき勢力を擁して、以て彼等が理想の王政に到る基礎を作らんと思へり。彼等ば手始めに二十名の同志を得、進んで三百名を網羅する大政黨を組織せんとせり。然るに中止權問題は、端なくも彼等が實力の試金石となりて、その案外に微弱爲すなきを悟らしむるに至りぬ。彼等は更に王をヴェルサイユに置くは將來暴民の凌辱を蒙る危險ありとなし、ラングル司敎を以て、王室をパリー市外二十リーグの地に遷すと共に、議會をも共に移轉せしむべき

1 Abbé Maury
2 Cazales
3 Mortlosier
4 Langres

をネッケールに勸告したり。これ實に後に至りミラボーが王に上りし獻言に含める所の主張と一致せり。此の際ネッケールも之に贊同して、御前會議を奏請し、その可否を諮りしに、王は自己の王國と自己の家門と自己の一身の浮沈とに關する此の重大問題に對し、一向感興を有せざるものの如く、議事中始終眠り續け、或は眠を裝ひつゝ、漸く目を開くや、一言『否』と答へて此の提議を一蹴し去れり。かく溫和保守黨の爲す所事毎に蹶きて、マルエーが熱心盡力せるに拘らず、遂に一政派を組織するだけの實力を蓄ふることを得ざりき。加ふるに同志の間に競爭あり、猜忌行はれて、マルエーとムニエーと兩首領先づ反目せるなど、一層活動の力を殺ぎたりき。

王事の重大を悟らず

急進黨

轉じて急進黨卽ち今の所謂左黨も亦結束固からず、堅固なる團體を組織するに至らざりしが、同志の名士には、アベ・シエース、オータン司敎タレーラン、[1]ラボー・ド・セン・テチエンヌ、[2]シャプリエー、[3]ラジュイネー、[4]タルジェー、ツーレー、[6]カミュー、[7]トレーラール、[8]ダンドレー、[9]トロンシェ、自由主義の大貴族

1 Rabaut de Saint Etienne
2 Chapelier
3 Lajuinais
4 Targer
5 Touret
6 Camus
7 Treilhard
8 d'André
9 Tronchet

[1]ロシュフーコール・リヤンクール公、牧師の首領と仰がれしグレゴアール等之に屬し、皆雄辯家、學理家の錚々たる者にして、右黨と同じく少數ながら、重要なる問題に於て能く多數の贊成を獲得するの伎倆を有しゐたり。

極端急進黨

また極端なる急進黨卽ち極左黨といふべきは、甚だ少數なれども、後に革命の大立物と成れる者多く、ジャコベン黨の首領として、惡魔の如く恐れられたるマクシミリヤン・ロベスピエール、恐嚇政治の中心たる公安委員會の委員となりし[2]プリュール・ド・マルヌ、[3]ジロンド黨の首領[4]フランソア・ビュゾー、同黨に屬し、パリー市長となりし[5]ペチオン、憲法制定國會（コンヴァンシオン）の議長となり、ジャコベン黨を追窮せる[6]メルレン・ド・ヅエイなどを數ふべし。

この極左黨と左黨との中間に、極端過激の說を爲す若き貴族の一團あり。其の巨魁は[7]ジョセフ・バルナーヴ、[8]アドリヤン・ヂュポン、[9]チャールス・ド・ラメートの三人、之を[10]トリユンヴィラー、（三頭政治）と名けて、アメリカを助けて名ありしノアイユ子爵、アレクサンドル・ド・ボーアルネー、エイギヨン公、ア

極端過激の貴族團

1 Rochefaucauld-Liancourt
2 Prieur de Marne
3 Girondins
4 François Buzot
5 Pétion
6 Merlin de Douai
7 Joseph Barnave
8 Adrien Dupont
9 Charles de Lameth
10 Triumvirat

レクサンドル・ド・ラメート、男爵ムノン[1]等これに加はりき。中止權問題にては、左黨、極左黨及び中央左黨共に、一時中止權の味方なりき。

中央黨

然れども議會の中心勢力たるものは中央黨なり。彼等は一の政黨として其の黨議に束縛せらるゝ事なく、時々の問題に對して、自己の理想と信仰とを以て進まんとす。彼等は必ずしも無能無策無氣力なるが故に、中立の地位に在りて、觀望する者とは評すべからず、一に自由にして公平なる判斷を以て、國政の諸問題に臨む事を理想とせるなり。然れどもフランス人の常として、感情に走り易きが故に、多數者の意思の趣く所に雷同して、前後の意見矛盾撞着するを顧ざる事往々あり、冷靜沈着を缺く弊ありて、失敗も亦多し。同志の人物としては、哲學者デチュット・ド・トラシー[2]、經濟學者デュポン・ド・ヌムール[3]、文學者にして歷史家なるガラー[4]あり、ミラボー亦實に中央黨の一人なりき。但しかく左黨といひ、右黨といひ、乃至中央黨と名くるも、黨議あり黨制ありて議員の行動を規束するに非ず、大體は各人各樣一に自由意志の趣くに任せたり。

1 Baron de Menon
2 Destutt de Tracy
3 Dupont de Nemours
4 Joseph Carat

第四章　王室及び國民議會のパリー移動

一　疑惑と反動

王居をパリーに遷さんとする運動

國民議會の議員等がかく徒らに空論を事としつゝありし間に、パリー人は漸く彼等のよく爲すなきを感じ、次第にこれに對する信賴の度を減ずると共に、一方朝廷の陰謀の依然繼續せられつゝあることを恨れて、疑心暗鬼を生じて已まず。彼の七月十六日、王のパリー行は一時人心を鎭定する效ありしかど、王后の野心に對する人民の猜疑は益〻昂まるのみ。彼等は王をして此のまゝ王后及び朝臣等の手中に在らしむる事の危險を强く感じ始めたり。加ふるにパリーの新聞雜誌は愈〻筆鋒を銳くして、人民の感情を煽揚しつゝあり、彼等は市民に警告すると稱へて曰く『速かに王と議會とをヴェルサイユより拉し來れ、而して汝等の